季刊「ふくおかアジア」

創刊号

志賀島・海の中道

金印公園

季刊「ふくおかアジア」創刊号【令和 6 年(2024)9 月】
編集　季刊『ふくおかアジア』編纂委員会
発行　ふくおかアジア文化塾

季刊『ふくおかアジア』創刊号

目　次

	タイトル・テーマ	執筆者	ページ
1	季刊「ふくおかアジア」の創刊にあたって	河村哲夫	2
2	ちょいワルオヤジの古代史エッセー 第九回「古代史を楽しんで」―魔界へようこそ	大和川一路	8
3	マツコのひとり言 第 1 回　河村先生との出会い	マツコ	15
4	新連載　風の吹く丘 第 1 回　バブルのおもいで	H・IMAGINE	21
5	『魏志倭人伝』を読み解く 第一章　私の「邪馬台国」試論	愛川順一	24
6	古代史マニアのひまつぶし 第 1 回　古代朱のベンガラを作る鉄バクテリア	徳永隆司	50
7	吉備の古代史シリーズ　第 14 回 吉備と出雲(上)銅鐸文化「大国主の祭祀受け入れる」	石合六郎	56
8	日本古代通史(第 5 巻) 続・邪馬台国の時代 3 論文一挙掲載！ 第 32 回　出雲の国譲り① 第 33 回　出雲の国譲り② 第 34 回　出雲の銅鐸③	河村哲夫	 80 106 126

季刊「ふくおかアジア」の創刊にあたって

季刊「ふくおかアジア」編纂委員会
委員長　河村哲夫

季刊「ふくおかアジア」の創刊に至った経緯については、別添のとおりです。
そして、予告させていただいたとおり、創刊号を発刊することができました。
関係の皆さま方に心より御礼申し上げます。
論文についても、広範なテーマで、多くの方からの応募がありました。
このことについても、心より御礼を申し上げます。

「ふくおかアジア文化塾」は、九州・アジアにおける文化・歴史等の発掘・調査を行い、広く普及教育すること、および九州の芸術文化の振興に寄与することを目的に、平成 27 年(2015)に設立され、これまで日本の古代史を中心に、講演会、シンポジウム、研究会等を開催し、また県内外の古代遺跡や神社等をめぐる旅行などを企画してまいりました。

その間、事務局長高野文生氏の死去(病気のため)や令和 2 年からの新型コロナの流行によって、活動全般が大きく制限され、ほとんど閉店状態となる危機にも見舞われました。

多くの皆さま方によるご支援とご協力により、どうにかその危機は脱したものの、高齢化の急激な進展によって、多くの人が生涯学習・文化芸術活動から離脱せざるを得ない状況が高まっており、ふくおかアジア文化塾の活動についても、予断を許さない状況がつづくことが予想されます。

そういうなかで、新しい取り組みとして、季刊「ふくおかアジア」の創刊に至ったことに、大変喜んでおります。

しかも、古代史から経済評論まで、内容がきわめて雑多です。したがって、全体としては、何ともいえない大きなエネルギーを感じることができます。

人は古代史だけで生きていけるものではありません。もちろん現代史だけでも生きていけるものではありません。ときには地球とか宇宙のこと、あるいは物質ことを考え、風景や旅行を楽しみ、友人や知人との交流を楽しみ、うまいものを食べ、おいしい酒を飲み、映画や音楽を鑑賞し、不毛な総裁選に憤り、うっかりヘマをやり、・・・・・などなど、さまざまな局面に出会いながら、毎日の人生を過ごしています。

そういう意味で、人生を考える一歩としての雑誌になればいいな、とおもっています。
よって、テーマはなんでも結構ということになります。
ご遠慮なく、応募してください。
次号の発行は 12 月末の予定です。12 月 20 日ごろまでに原稿を送付してください。

季刊「ふくおかアジア」の創刊および原稿募集について

ふくおかアジア文化塾
代表　河村哲夫

令和 2 年 10 月 1 日に日本古代史ネットワーク(会長鷲崎弘朋)が設立されたことに伴い、筆者が責任編集者となり、令和 2 年 12 月から令和 6 年 6 月まで、3 か月ごとに季刊「古代史ネット」をホームページ上で刊行してきたところです。

季刊「古代史ネット」の刊行状況

号	発刊時期	内　容
創刊号	令和 2 年 12 月	巻頭言　河村哲夫 日本古代史ネットワークの設立総会について　丸地三郎 木材の年輪年代法の問題点　鷲崎弘朋 日本古代通史・プロローグ　河村哲夫 【Ⅰ】卑弥呼の鏡―金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡を中心として 【Ⅱ】天照大神の鏡――八咫鏡を中心として
2 号	令和 3 年 3 月	巻頭言　河村哲夫 年輪年代法の問題点　鷲崎弘朋 「水行十日陸行一月」をめぐって　愛川順一 魏志倭人伝からみえる私の邪馬台国所在地考　矢野勝英 「魏志倭人伝」の行程と「水行十日陸行一月」について 塩田泰弘 弥生時代の開始時期　丸地三郎 奴国の時代①　河村哲夫
3 号	令和 3 年 6 月	巻頭言～日本書紀ルネッサンスを願う～　河村哲夫 吉備の古代史①ふたりの天皇が行幸された谷　石合六郎 記紀に隠された史実を探る＝聖徳太子時代編　飯田眞理 現実的視点からの「邪馬台国」論　秋山 耀 奴国の時代②　朝鮮半島南部の倭人の痕跡　河村哲夫 奴国の時代③　北部九州のクニグニ　河村哲夫
4 号	令和 3 年 9 月	巻頭言～年輪年代法に関する情報公開について～　鷲崎弘朋 吉備の巨大墳を考える（上）吉備津彦の時代（4世紀）　石合六郎 中臣鎌足の虚像と皇極・孝徳時代の政変　飯田眞理 奴国の時代④～奴国の神々～　河村哲夫
5 号	令和 3 年 12 月	巻頭言～ゴッドハンドの余波はつづく～　河村哲夫 記紀に隠された史実を探る③

		白村江の敗戦と唐による倭国の羈縻（キビ）支配　飯田眞理 吉備の古代史シリーズ第 3 回吉備の巨大古墳を考える（下） ―御友別の時代（5世紀）　石合六郎 邪馬台国の時代①～卑弥呼の登場～　河村哲夫
6 号	令和 4 年 3 月	巻頭言～古代からのメッセージ～　河村哲夫 邪馬台国の時代②～卑弥呼の外交～　河村哲夫 魏志倭人伝を考える～鉄について～　塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ第 4 回 ～温羅伝説を考える（上）―こんな物語だった～　石合六郎 記紀に隠された史実を探る④ ～隠された天智大王暗殺と天武天皇の真実～　飯田眞理
7 号	令和 4 年 6 月	巻頭言～古代からのメッセージ～②　河村哲夫 邪馬台国の時代③～卑弥呼の外交②～　河村哲夫 魏志倭人伝を考える～斯馬国について～　塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ第 5 回温羅伝説を考える（中） ～成立過程とその起源「神仏習合の中から誕生」　石合六郎 記紀に隠された史実を探る⑤ ～蘇我氏の祖は百済人～　飯田眞理
8 号	令和 4 年 9 月	巻頭言～今後の取り組みについて　丸地三郎・河村哲夫・山内千里 邪馬台国の時代④三韓諸国　河村哲夫 邪馬台国の時代⑤対馬と壱岐　河村哲夫 魏志倭人伝を考える～絹・絹織物について～　塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ第 6 回温羅伝説を考える（下） ～桃太郎の誕生「日本人の心映す鏡」　石合六郎 ちょいワルオヤジの古代史エッセー(新連載)第 1 回 「古代史を楽しんで」――あっ、そうだったのか！　大和川一路 記紀に隠された史実を探る⑥「任那日本府」とは何か ～朝鮮半島における倭人の勢力～　飯田眞理
9 号	令和 4 年 12 月	巻頭言　石合六郎 邪馬台国の時代⑥～末盧国と西海の島々～　河村哲夫 邪馬台国の時代⑦～末盧国から伊都国へ～　河村哲夫 魏志倭人伝を考える～魏使はなぜ末盧国と不弥国に行ったか 塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ　第 7 回素戔嗚尊の剣（上） ――吉備のどこにあった？「十握(とつか)の剣(つるぎ)流転の真実」 石合六郎

		ちょいワルオヤジの古代史エッセー第 2 回 「古代史を楽しんで」―訳の解からぬことばかり　大和川一路 記紀に隠された史実を探る⑦欽明即位の謎と埼玉稲荷山鉄剣 飯田眞理
10 号	令和 5 年 3 月	巻頭言　大和川一路 邪馬台国の時代⑧～伊都国から奴国へ～　河村哲夫 魏志倭人伝を考える～髪型と衣服形態について　塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ　第 7 回素戔嗚尊の剣（下） ――どんな形だったか？「邪馬台国時代の北部九州と類似」 石合六郎 ちょいワルオヤジの古代史エッセー第 3 回 「古代史を楽しんで」―まるで目くらまし―　大和川一路 記紀に隠された史実を探る⑧ 欠史八代大王非存在と神武＝崇神説の検証　飯田眞理
11 号	令和 5 年 6 月	巻頭言～古代史で広域連携　石合六郎 邪馬台国の時代⑨奴国から不弥国へ　河村哲夫 邪馬台国の時代⑩夜須をゆく　河村哲夫 邪馬台国の時代⑪朝倉をゆく　河村哲夫 邪馬台国の時代⑫日田をゆく　河村哲夫 魏志倭人伝を考える～鯨面文身について　塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ　第 8 回造山古墳の被葬者を探る（上） 「吉備海部の娘・黒日売命か」　石合六郎 ちょいワルオヤジの古代史エッセー第 4 回 「古代史を楽しんで」―違う景色―　大和川一路 記紀に隠された史実を探る⑨ヤマト王権の推移・その2 イリ系大王からワケ系大王へ～仁徳大王らによる河内王権の成立～ 飯田眞理
12 号	令和 5 年 9 月	巻頭言～銅鐸について　河村哲夫 邪馬台国の時代⑬投馬国は豊の国　河村哲夫 邪馬台国の時代⑭狗奴国は肥の国　河村哲夫 邪馬台国の時代⑮狗奴国と卑弥呼の死　河村哲夫 邪馬台国の時代⑯卑弥呼と台与　河村哲夫 魏志倭人伝を考える～数値について　塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ　第 9 回造山古墳の被葬者を探る（中） 「吉備海部は備中にいた」　石合六郎 ちょいワルオヤジの古代史エッセー第 5 回

		「古代史を楽しんで」―ミステリー？― 大和川一路 記紀に隠された史実を探る⑩ヤマト王権の推移・その 3 河内王権と倭の五王の真実～二王統による大王位争奪戦とその終焉～ 飯田眞理
13 号	令和 5 年 12 月	巻頭言～それぞれの尾張と伊勢 大和川一路 後期・邪馬台国の時代①英彦山と京都平野 河村哲夫 後期・邪馬台国の時代②神夏磯媛と豊比売命 河村哲夫 後期・邪馬台国の時代③英彦山と宗像 河村哲夫 後期・邪馬台国の時代④ニギハヤヒ 河村哲夫 魏志倭人伝を考える～投馬国について 塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ 第 10 回造山古墳の被葬者を探る（下） 「謎を解く肥後系古墳と血脈」 石合六郎 ちょいワルオヤジの古代史エッセー第 6 回 「古代史を楽しんで」――誰の上にも雨は降る 大和川一路 記紀に隠された史実を探る⑪ 天孫降臨と神武東征の検証 飯田眞理
14 号	令和 6 年 3 月	巻頭言～不適切にもほどがある！ 大和川一路 後期・邪馬台国の時代⑤スサノオと五十猛命 河村哲夫 後期・邪馬台国の時代⑥出雲の神々 河村哲夫 後期・邪馬台国の時代⑦スサノオとクシナダヒメ 河村哲夫 魏志倭人伝を考える～狗奴国について 塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ 第 11 回 播磨の戦はあった!! ―片山神社伝承が証明「稚武彦は再度播磨へ」 石合六郎 ちょいワルオヤジの古代史エッセー第 7 回 「古代史を楽しんで」―縁は異なもの 大和川一路 記紀に隠された史実を探る⑫最終回 天照大神の後継者・饒速日命は奈良盆地をヤマト（邪馬台）と名づけた！ 飯田眞理
15 号	令和 6 年 6 月	ちょいワルオヤジの古代史エッセー第 8 回 「古代史を楽しんで」―団塊の世代とともに 大和川一路 後期・邪馬台国の時代⑥隠岐の島 河村哲夫 後期・邪馬台国の時代⑦大国主命 河村哲夫 後期・邪馬台国の時代⑧大国主命の国づくり 河村哲夫 魏志倭人伝を考える～狗奴国について 塩田泰弘 吉備の古代史シリーズ 第 12 回 播磨の戦はあった!! ―片山神社伝承が証明「稚武彦は再度播磨へ」 石合六郎

筆者としては、この季刊「古代史ネット」の編纂に全力を傾注し、また筆者の目標である『日本古代通史』の完成に向けて一歩一歩歩きつづけていたところでした。また、石合六郎氏、塩田泰弘氏、飯田眞理氏などの執筆陣による力作連載はもとより、新たに加わった内藤一郎氏という軽妙洒脱な異色の執筆者によって、古代史雑誌としての存在感が大いに高まり、インターネットによる日々のアクセスも大きく増加していたところです。

しかしながら、やむを得ない理由により、本年 7 月 2 日をもって、筆者は日本古代史ネットワークを退会し、それに伴い、季刊「古代史ネット」の編纂についても辞することとなりました。

このため、これまで季刊「古代史ネット」に提供した私の著作について、日本古代史ネットワーク会長の丸地三郎氏に対し、引き揚げさせていただく旨の申し入れを行い、また他の著作についてもそれぞれの著作者の意向を十分に確認のうえ対処されるよう申し入れを行い、了解を得たところであります。

これまでどおりの季刊「古代史ネット」の編纂はきわめて困難となる――というか、おそらく実質的に廃刊となるでしょう。

このような事態となり、これまで連載いただいていた執筆者に引き続き発表の場を提供するため、本年 9 月より私どもが主宰する「ふくおかアジア文化塾」の事業の一環として季刊「ふくおかアジア」を創刊することといたしました。

その内容は次のとおりです。

① 9 月、12 月、3 月、6 月の年4回発行とし、ふくおかアジア文化塾のホームページ上で公表する。

② 必ずしも古代史に限らない、総合的雑誌として編纂する。

③ ふくおかアジア文化塾のなかに季刊「ふくおかアジア」編纂委員会を設置する。

④ 原稿の公募はホームページやチラシ等で行う。

⑤ 原稿の採否については、季刊「ふくおかアジア」編纂委員会の協議により決定する。

⑥ ただし、ふくおかアジア文化塾は財政基盤がきわめて脆弱なため、原稿料については当面無償とする。ただし、将来的な有償化のため、財政基盤の強化に努める。

以上のとおりです。

もちろん、筆者はこれまでどおり日本の古代史の解明に向けて、尽力してまいる所存ですが、季刊「ふくおかアジア」の編集方針としては、プロ・アマを問わず、どんなテーマでも構わない――要するに「総合的雑誌」が目標です。「文芸春秋」などの月刊雑誌をイメージされたらよろしいでしょう。小説もあればエッセーもある。文科系の論文もあれば理科系の読み物もある。スポーツや音楽、映画、経済や政治などさまざまな分野について論じることも可能です。哲学や宇宙論を論じることも可能です。

創刊号は 9 月下旬の予定なので、掲載希望の方は 9 月 15 日までに下記あて原稿を送付してください。

＜原稿の送付先＞

kokorozashi1128@gmail.com(河村)　naitou_ichirou@outlook.jp(内藤)

ちょいワルオヤジの古代史エッセー

第九回「古代史を楽しんで」―魔界へようこそ

大和川　一路

１．魔界へようこそ
２．スベクヒャン
３．高千穂峡と天岩戸神社

１．魔界へようこそ

光陽、順天、麗水、なんとも素晴らしい地名です。
その地へのお誘いを受け、二つ返事で一緒に行くことにしました。そこは釜山から西に２時間から３時間、全羅南道に向かう途中の田舎町。
栄山江流域には前方後円墳が何故かたくさんある所。ピーンと来たからです。
縁あって人と出会って縁を結ぶも、その縁が良縁か悪縁か分からない。人生が長く残されている時ならば、時に悪縁となってしまうこともなくはない。これからの出会いは全て良縁と考えることにしている。
博多駅前の韓国観光公社で見つけた地図で土地勘を付けておく。
光陽は「グッド・デイ・サンシャイン」こんにちは陽の光。至福のふたりがいる様です。
順天は「ザ・ロング＆ワイディングロード」君の扉に僕を導いて…というポールの曲。
麗水はもちろんオードリーの「麗しのサブリナ」、主題曲は「バラ色の人生」です。
他にも月灯面や花浦海辺などもあって「ミスタームーンライト」と紐づけします。
そう、好きな映画とビートルズのこじつけ記憶術です。

新郎のオモニが順天を案内してくれるということで、順天湾国家庭園や順天ドラマ撮影所、文化通りの一つでもリクエストしてみようかと調べて楽しむ時間を過ごした。
順天湾国際庭園博覧会なるものが 2023 年 10 月まで開かれていたそうで、ヨーロッパのバラ咲き誇る庭園に、日本は枯山水で対抗できるのか。
背振山系と有明海をかたどって、数寄屋門も設置して日本の趣を表現したそうである。
日本企業の出来ばえ品質は世界一。土壌も気候も違うのに、借景とできる山も森も無さそうなのに、佐賀県の造園会社はどんな工夫をしたのだろう。
順天ドラマ撮影所にヨンエ様のブロマイドがあるかもしれない。あれば田主丸の先輩へのお土産だ。いまどきブロマイド？　ある訳ないか…。
それに「チャングムの誓い」の撮影現場は楽安邑城民俗村の方でした。
文化通りでは絵画・染色・陶磁器・韓紙など郷土文化を体験できると情報誌に書いてある。
民画があるような予感がするし、むかしの地図があったなら、買っておくのも良いだろう。
最近やっと分かったことは、「写真を百枚撮るよりも、気に入った絵を一枚」
　むかし、仕事で仲良くなった鄭さんを頼って台湾に行った時、着くなりいきなり一族郎党

集が集まって、ウェルカムパーティが始まった。自己紹介も出来ないし、ドギマギしながらも鄭さんがいろいろやってくれるから、美味い美味いだけで時間は過ぎた。

これと同じで、光陽の韓風料理店で甥っ子か姪っ子か誰が誰だか分らぬ中で、カオリペックスク（鴨肉の水炊き）をご相伴にあずかりました。仮にミーちゃんと云っておきますが、細くてモジャモジャした人参や煮込んだ鴨肉を盛ってくれたり、チャミスルをどうぞって、昔からの知り合いのごとく。そして優しいご指導まで頂戴しました。
「単語だけじゃダメ、文章で覚えるの。食べた後だからマシソヨじゃないでしょ！美味しかった、でしょ。マシソッソヨってゆーのよ」
帰る時に、「さあ、やってみなさい！」と大きな目で云われ、店主に使ってみたら…。

　しとしと小雨降る朝、ハレの日に雨が降ることは良いことらしい。対岸にはポスコの工場群からモクモク煙が立っている。浦項製鉄所は拠点を光陽市に移したそうだ。
日韓基本条約から半世紀、ポスコは巨大化し韓国経済を支えたけれど、新日鐵と機密情報流出問題を起こした。八幡、富士、神鋼、鋼管、住金といろいろ覚えていたがもう分からない。鐵は金のなる王様だったのに、どうして金を失うに変えてしまったのだろう。まあ、こんなことはどうでもいいけれど。

順天に向かうタクシー、雨で景色が見えない。「そんなにとばさないで下さい」と云えない。歴史講座の先生が、韓国語で防火も放火も同じ発音だと云っていた。変な発音でパリパリと聞き間違えられたらたまらんし、チョンチョニと単語だけじゃダメと云われたし、大兄も中兄も私たち三人は、塩を振られたナメクジの様に存在感を消していた。

出迎えのオモニのチマ・チョゴリ姿はなんと素敵な。フラッシュライトを浴びて映画スターのように颯爽と登場し、ふたりのチュー。このまばゆき現実世界に私たち口をポカンと開けていた。両手を合わせて両親に深々と挨拶、久ぶりに見るハレの世界。
　二人は異国に飛び立って行きました。ハレの後にはケがやって来る。ファイティン！

これからの主役はオモニのミーちゃんに移りました。アトリエかな、カフェかな？

何だか不思議な空間に案内された。壁にかかる何十枚もの自作の絵。みんな猫の眼で、「おまえは何者だ」と存在理由を問うている。「あなたは遊行期に入っているから」と中兄に諭された。そう、深刻な解釈をするよりも「民族衣装の彼女たちに囲まれて日々の暮らしが楽しそう」でいいのである。
ミーちゃんは韓国語の通訳資格までとって、ここを

教室にして教えているらしい。モカやブルマンが美味いのはコーヒー豆の商売をしているからで、読み描き算盤とたいしたものだ。
すっかり陽も落ち、順天巡りは諦めた。再会は時に幼少の頃に戻り、時に時事放談となり、絵を絵本や絵葉書にした人生物語にも耳を傾ける。自分を語る必要のないひと時は心地よい。折れたコルクをワインの瓶から見事採りだしたことが、私がそこにいた証。

ギターもパソコンを開いて音符見て、すぐに弾いてしまうなんて、語学も絵描も音楽も尋常じゃない。
異国で一人、いや好きな人がソバにいたとしても、なおさらこんな自己表現は出来ないし、エネルギーの表出に圧倒され、吸い込まれて帰依したくなるような気分になってしまう。
ミーちゃんの生ギターを聴きながら、さて小生は何を歌おうか？イムジン川じゃ場違いだよなぁ。
「エーデルワイス」を次妹と一緒にハモってしまった。
大兄も中兄も初めて聞く妹の歌声に、ワインを甘く感じていたことでしょう。異国での体験は緒を引いて、部屋の絵をミーちゃんの絵に取り換えた。
こんないい魔界体験は独り占めしちゃいけない。再会の時はあるだろう。

２．スベクヒャン

韓国ドラマ「帝王の娘スベクヒャン」を知ってはいたが、108 話もあって見る体力はない。ところが、「帝王って、武寧王のことよ」と小耳にはさんでしまい、そうもいかなくなった。２倍速なんかにしないので消耗したが、一話 30 分だから 10 日で終えた。
ス/ベク/ヒャンとは守百香で百済を守る花のこと。当初は題名が手白香だったそうで、変えたらしい。そうでしょう、継体天皇のお后様じゃ歴史問題になるでしょう。
時代背景は高句麗の南下で都を熊津に移し、東城王、武寧王、聖王が王子の頃のドラマです。

加唐島で生まれた斯麻王は幼少の頃からとんでもなく利発で大人たちから称賛の声、武芸にも励み、高句麗をやっつけて将軍に上り詰め、そして武寧王となる。娘のスベクヒャンが新羅、伽耶諸国との外交で父を助け、倭との良き関係構築にも一役買って…まあ、こんなストーリーでしょうと思い見始めた。
ところが、うそつき・意地悪・すれ違いの連続で、嫌々ながらも見続けてしまうのは、さすがドラマづくりがお上手です。
姉妹が入れ替って、妹が偽スベクヒャンとなり王宮に入るも、バレない様に画策する。嘘と恨が満載で、これほどワルな少女がいるとは思えない。

本物スベクヒャンの姉は身分を落とし姿を消す。第 19 話で王女の居所は「サンダリかムルへかも」との会話のテロップに、「現在の麗水、光陽」と出ているではないか！
もうここで逃れられなくなりました。東城王の息子と武寧王の息子も入れ替り、よくぞここまで餅をこね、ビヨーンと延ばしても切れない展開を考えたものである。
スベクヒャンを九の一に仕立て上げ、玉の流通で裕福なキムン国の王宮に送り込み、王を篭絡して心に入り込み、見事に伽耶の一国を百済に併合した場面があるのです。
「もう MI6 のような組織があったのか？玉じゃなくて鉄じゃない？キムン国ってどこにある？自力で併合する力が残っているのか？」なんてこと言って腹を立てちゃいけない。
ここはやり過ぎ、ここは入れ替え、ここは捻じ曲げと、どれだけ分かるかが韓流ドラマの楽しみ方。108 話を通して「倭」が出て来たのはたった 4 回。
「倭を掌握する」
「倭におくる経文の準備をしておる」
「倭がキムンへの援軍を拒否しました」
「倭が長年、百済から先進文化を享受しています」

さて、『日本書紀』で確認しましょう。
・継体天皇七年六月「伴跛国は、私の国（百済）の己汶の領土を奪いました。どうか天恩によって、元通りに還付するようお計らい頂きますようお願いします」
・継体天皇十年五月「物部連らを己汶に迎えてねぎらい、ひきつれて国に入った。（土産物を）朝廷に積み上げ、ねんごろに慰問した。賜物も少なくなかった」
・継体天皇十年九月「百済は州利即次将軍を遣わし、物部連に従わせて来朝し己汶の地を賜ったことを感謝した。別に五経博士漢高安茂をたてまつって…（倭は）願いのままに交代させた」
・継体天皇一七年五月「百済の武寧王が薨じた」
継体天皇の在位は 507 年～531 年。武寧王の在位は 502 年～523 年。スッポリ同時代。
普通の人は「スベクヒャン」を先に観て、後で『日本書紀』を見るか、あるいは読まない。2015 年以来、民放で 6 回も放映されているが、この手のドラマがこれだけ流される
ことは不思議である。真逆の筋立てで、古代の日韓関係史をどうしたいのだろう？
書紀をすんなり読めば、武寧王が頼ってきたので、継体天皇は特別軍事作戦を展開し、領土を取り戻してあげた。武寧王は感謝して、宝物を沢山用意した。五経博士の派遣も継続した。まぁこんなところで、己汶（こもん）がキムンですね。
書紀を読む人は間違い探し、読まない人は恋愛ドラマ。

隅田八幡宮の人物画像鏡の銘文

未年八月日十大王年男弟王在意柴沙加宮時斯麻念長寿遣開中費直穢人今州利二人

等取白上同二癸百旱作此竟

これ、素人が解る訳ありません。『古代七つの金石文』林順治氏の本が手元にあり、石渡信一郎氏の解読文が載っていました。諸説の一つとして、さあ何が書いてあるのか。
「503 年 8 月、日十大王（昆支）の年、男弟王（継体）が（忍坂宮）に在す時、嶋麻（武寧王）は男弟王（継体）に長く奉仕したいと思い…この鏡を作らせた」

「難しいことは、もう考えたくない」と最近よく耳にするし、私もそう。
むかし「脳に汗が出るくらい考えてこい！」と云われ、必死のレポートを提出したら、
「全身の血を入れ替えてこい！」と怒鳴られ、昭和のパワハラ上司には閉口しました。
そんな事もあったなぁと思いつつ、
「503 年倭国の大王は昆支で、百済に還して王様（武寧王）になったばかりの息子に、継体の先物買いを指示しているようですなー」なんて凡人が解説したら、それこそまだ血の入れ替っていないパワハラ上司のような古代史おじさんに怒鳴られそうです。

昆支は 40 年も倭国の人質で、息子たちのお母さんは倭人だ、東城王や武寧王のお妃さまも倭人だと云う韓国の学者もいるし…。あれもこれもよく分かりません。
百済王家と倭の大王家には、親密な交流があったことは感じとれます。
やっと卑弥呼の時代の道筋が見えてきたのに、神武天皇や神功皇后、継体天皇や聖徳
太子と知りたいことが山ほどあるが、あとどれほど時間が残されているのだろうか。

さて、韓国ドラマのセリフは天下一品、面白い。スベクヒャンから得られたことを、
「難しいことは嫌、みんな面倒臭い」と云う歴史講座の友達クニさんに教えてあげよう。
「満月の夜、楼閣の前でそなたを待つ」ようなことを告白したくなる人が見つかったら、
「同心結び。そなたとは同じ日、同じ時間に死ぬのだ。99 歳と 96 歳で」
これをコピー改良して「山笠の朝、櫛田の前でそなたを待つ」と、云いなさい。
「比翼連理。そなたとは比翼の鳥、連理の枝で生きるのだ。決して離れない」と、たたみ掛けてみなさい！これなら難しくないでしょう！
「あんたがた、バカのかたまりじゃないの！　あー、サムボロが出てきた」
「男の一人暮らしは大変なんだ。出汁もとらずに味噌汁すすって、まあなんと可哀そう。母性本能をくすぐる練習をクニさんにさせようとしたんだ」
「あなた方ね、不毛なことばかり言ってないで！限界時速逓増の法則って知らないの？
残り時間が少ないほど加速度がつくのよ。どうして古代史の究明にもっと精進しないの」

３．高千穂峡と天岩戸神社

不思議なＭさんや古墳慕乙女たちも参加していた。熊本を抜け宮崎へと向かう旅。

山都町に入ると、バスの中で沿道の木々に咲く花を見て「百日紅の赤い花、白もあるのよ」と隣の席の“木花かぐや”さんは教えてくれた。

「幹がツルツルしてサルも滑る。幹を見ればすぐわかるのよ。あの花は？」

「ええっ？　サルスベリでしょ」

「ねむの木よ！」

「通潤橋が近くにあるから寄っていきます」との案内に、さて初めて聞くが九州の人には当たり前なのか。2，3枚撮ったが、なんでこの橋が国宝なのか分からない。

「何考えてるの？　あっちの森の、石のアーチの橋よ」（右の写真）

「肥後の石工よ！」

周りと同化して、放水していないと目に入らない。京都南禅寺の水路閣と同じ様に存在を消している。通潤橋の次は竜宮大橋、ヤマトの次はリュウグウ？

いかにも神話の世界に誘うかのような命名に、ちょっとやり過ぎじゃないのだろうか。

勉強熱心な古墳慕の乙女たちに古代史ペンネームを考えてあげたが、どうも九州の女性は三女神に愛着があるようで、“真床穂波”さんは、「畳屋の娘みたいでいやだわよ」

“高宮郎女小竹”さんは、「女郎みたい」と後ろの席でひそひそと。

じゃ、「“天宮傾城小竹”でどうですか」と打診してみたら、「傾城って高級遊女でしょ」

「あの娘だけ“木花かぐや”なんて、可愛い名前つけちゃって！」

君たち、云っちゃなんだけど、真床覆衾でニニギを覆って降臨させた、あるいは竜宮の座布団でしょ。海神とも関係あるし、変な言いがかりをつけて。

郎女ってカワユイ、傾城は超絶美女でしょうが。想像力の暴走ですよ。

ナイーブな私、傷つきますよ。

「ナイーブって粗野っていう意味もあるのよ。古代史おじさん、中学校で勉強し直し」

男子の世界にはあるまじき女子会話から逃れて、不思議なＭさんと話をすることとし

た。高千穂峡の洞窟の前は、しめ縄を背景に写真を撮ろうと人だかり。
縄からは紙垂と藁の束がぶら下がっている。さて、あれは何だろう？　勘定してみたら三本、五本、七本。七五三のお宮参りしか知らないが、その道の通は知っていた。
しめなわは七五三縄とも書き、「神代七代　地神五代　日向三代」を意味するそうである。そんなことは知らない。奇数は何故か、おさまりが良くて神秘な数字である。

宮司さんから、「神武天皇は瀬戸内のクニグニからコメを集めて…？　本州の人たちは九州の出来事を…」のくだりがあったが、神武即位 B.C.660 年を前提にしているから神話のような、観光小話のような。弥生時代はもう少し後の時代ではなかったのか、九州王朝説の建付けはどんなふうになっているのだろう。

真名井の滝は二度目だが、一度目は米寿の父親をボートに乗せて、転覆しやしないかと心配だけで景観を楽しむ余裕はなかった。
今回は不思議な M さんと柱状節理を観察し、方向が違う柱状節理の生成について理系もどきの話しができた。「阿蘇の四回目の噴火が、」と核心部分に入ったが、覚えきれない。
しかし、収斂していく会話に心が落ち着く。

「私、夜神楽見たわよ」
あれもこれもと本当に元気な女子たちです。
歌舞伎も神楽も見たことない。能は興福寺での薪御能を見たことが最初で最後で、面白くはなかった。今は中洲の博多座に、すぐに行くことが出来るのだが、『九十歳。何がめでたい』に足は向いてしまう。
高千穂の夜神楽『御神体の舞』にはこんな場面があるのかと、思わず撮ってしまった。ネットで調べてみると、藁筒で納豆を作っているのか、それともお酒を造っているのだろうか。イザナギ・イザナミの『国産みの舞』には見えないし、ただ所作と面に原始のおおらかさが感じられた。

歴史民俗資料館で木花かぐやさんが、「イノシシは何科か知ってる？」「はあ～ん??」
「偶蹄目イノシシ科イノシシよ。奇蹄目もあるのよ」異界で聞く話しの数々に、自分の目に見えるモノだけに拘泥して深堀していても、視界は狭いままなのかと感じてしまう。
「開敷す妙法蓮」これ、泥田で咲く蓮の花。深遠な真理がそこで教示されるかもしれないという意味らしい。高千穂の神様の世界で仏様の教えまで聞いてしまった。

マツコのひとり言

第１回　河村先生との出会い

河村先生との出会い

2020 年、長年続けた教職を定年退職した私は、市民講座の「西日本古代通史」に申し込むことにした。

これからの趣味の時間を充実させるためである。

古代分野はあまり得意ではないけれど、もともとは歴史好き。それに、古代通史のサブタイトル「邪馬台国」というキーワードにも惹かれた。

講師は河村哲夫先生。古代に留まらず、幕末の歴史小説なども書かれているらしく、プロフィールからその幅広さを感じた。初回授業の際、その博識さに驚く。河村先生の頭の中には日本に留まらず、中国韓国の地図が網羅されており、年号も古墳名もすべて記憶済み。何の資料も見ずに次から次へと図を書き、年号をあてがい、遺跡群が記入されていく。こんな凄い古代史の講師がいたとは驚きである。

だが、河村講師の凄さは充分理解できたものの、肝心の授業内容はまったく理解できなかった私。

肥前風土記に出雲風土記、景行天皇九州遠征経路。え？風土記って何？景行天皇って誰？まったくちんぷんかんぷんの 90 分が理解不能のまま終わった。それでも、河村先生の魅力だけが不思議と私の中に残った。この先生から放たれる言葉のひとつひとつを拾ってみよう。この先生が書かれる図のひとつひとつを書きとってみよう――そうして私の古代史講座の受講は始まった。今でも尊敬する河村先生ではあるが、邪馬台国近畿説の話になると、次第にボルテージが上がり平常心を失うことがある。そんな人間臭い河村先生もまた、私は好きである。

天国の父との再会

河村先生の講座を受講して半年が経とうとしていた時、銅鐸の講座があった。実用的な小さな銅鐸、祭事用の大きな銅鐸、その魅力にハマった。

熱心に質問する私に、河村先生が一冊の蔵書を貸してくれた。それは、松本清張の『銅鐸と女王国の時代』という本。へえ、松本清張はこんな本も書いていたのか、と数ページめくって私は驚愕した。そこに書かれていたのは「1977 年福岡県春日市大谷にて、銅鐸の鋳型発見される」の文字。そして、それを発掘したのが春日市教育委員会社会教育課チーム、とあった。

当時、私の父は春日市社会教育課に勤務しており、遺跡の発掘に携わっていたのである。

高校生だった私は部活に夢中で父の仕事には全く興味がなかったのだが、半世紀を越え、河村先生の蔵書によって亡き父と繋がった。

実家に戻り、改めて父の残したスクラップを見ると、そこには甕棺や銅鐸の写真がいくつも収めら

れていた。

改めて河村先生の話を聞くと、春日の地は奴国のテクノロジーポリスであり、奴国こそが日本最古のクニである、とのこと。

私が生まれ育ち、父が思いを込めて仕事をした場所こそが古代史にとってとても重要な場所だったのだと、感無量になる。私が古代史を学びたいと思い、河村先生と知り合えたことは必然だったのかもしれない。河村先生との出会いこそが亡き父からの贈り物のような気がしてならない。父の思いを受け継ぎつつ、古代史の勉強に励む日々である。

石囲いに守られていた金印

志賀島の金印についての授業があった。教科書にも掲載されている、漢委奴国王と印字された金印。

後漢書によると、漢の光武帝が西暦 57 年に奴国王に冊封の印として送ったもの、とされる。

日本の歴史書だけでなく中国の歴史書にも記述され、その事実が重なり、証明されていくことこそが古代史の真実だと河村先生は言う。

それなのに、この金印が偽物である、と主張する人々がいるらしい。

私は古代史を学び始めたばかりの初心者ではあるが、そもそも偽物説が出ることこそが疑問だ。

これほど精巧で優れた文化遺産を何故否定しなければならないのか、素人の私は理解に苦しむ。

偽物にしなければならない思惑がどこかに隠されているのだろうか、とさえ思う。

偽物説の人々は、出土した所が曖昧であると言うらしいが、当時の出土の様子は事細かに黒田藩や藩内の学者などに記録されており、河村先生が授業でその記録を紹介された。

志賀島の金印公園

金印が出土した石の構造に関する文献

文献資料	記　　事	
甚兵衛口上書(1784)	「小き石段々出候内、二人程の石有之、かな手子にて掘り除き申し候処、石の間に光り候物有之」 ※二人で抱えられる程度の蓋石 ※金梃で取り除ける程度の蓋石	C
曇栄自筆書(1786)	「上有石版、四角立石柱」	B
青柳種信『後漢金印略考』(1812)	「是を掘り除きしが、其の下に三の石側立て、物を囲繞に似たり」	A
皆川淇園 『漢委奴王金印図記』(1787)	「掘之石下以小石為柱」	C
梶原景熙自筆書(1803)	「有一巨石発之則三石周匝如匣状」	A
村瀬之熙「国号三条ノ一」(1807)	「四辺撑小石下空」	B
『筑前国風土記附録』(1798)	「土地中に一巨石あり。之を発したるに、下に三石周匝如匣の状をなせり。其下にて黄金金印一顆を得たり」	A
『歴史大辞典』	「三石を構ふて匣の如くにし、上に一巨石の蓋を為したるもの」	A
中山平次郎「漢倭奴國王印の出所は奴國王の墳墓に非ざるべし」(1914)	「三個の石を周して、其の間に空隙が造られたるを思はしむる」 ・中山博士は大正初期に現地調査	A

	石の数	計	
A	蓋石＋3 個の石	5	◎　有力
B	蓋石＋4 個の石	2	
C	不　明	2	

そもそも、私は金印が頑丈な石囲いに収められていたことを知らなかった。教科書ではまさに、お百姓の甚兵衛さんが鍬でぽろっと引き当てたかのように書いてあり、これでは大きな誤解を生む。石囲いに守られていた金印、と記述すべきだと思う。志賀島は、家族で海水浴に出かけた思い出深い島。ここに、日本最古のクニの証が眠っていたと思うと、本当に感慨深い。奴国王がなんらかの理由で志賀島に大切な金印を埋め、北上したのかも知れない。そんなストーリーに胸が躍る。これぞ古代史の醍醐味である。

司馬懿と卑弥呼の鏡

私は中国歴史ドラマをよく見る。一昨年「三国志同盟司馬懿」全 86 話を見た。

私はこのドラマで司馬懿なる人物を初めて知った。

司馬懿とは、曹操に始まり、ひ孫曹芳まで仕えた魏の天才軍師で、最後は孫、司馬炎が晋を興

す。

ドラマの終盤では 60 歳を超えた司馬懿が公孫淵と対峙する様が圧巻だった。

すると、古代史の授業で司馬懿が出てきた。河村先生曰く、西暦 239 年、司馬懿が公孫淵を破ったことを知った卑弥呼がその機を逃さず、魏までの使者を送ったとのこと。それまで遼東は公孫淵が支配しており、通路が開かなかったのだ。

卑弥呼は類まれなる情報網を持っており、その様子は、司馬懿が残した言葉「往路に百日、攻めるのに百日、帰路に百日もあれば公孫淵を討伐できる」からも分かるとのこと。洛陽から遼東まで 4000 里とされるので、この計算をもってすれば、情報を知ってから約半年で卑弥呼の使節団は洛陽に到着することになる。そして新皇帝が 8 歳の曹芳だったことを考えると、卑弥呼に沢山の贈り物をしたのは、実権を握った司馬懿ということになる。

私は思わず、「では、百枚の鏡を卑弥呼に贈ったのは司馬懿なのですか？」と質問すると、「おそらくそうでしょう。司馬懿は、やっと実権を手に入れて最初に訪問してくれた倭国の女王に大判振る舞いをしたのだと思いますよ」と河村先生は答えた。

私はその夜、大興奮しながら、司馬懿に出会う卑弥呼使節団をイメージしつつ、ドラマの終盤を見直した。

国宝級の鏡の位置づけとは？

大分の日田から出土した鏡の授業があった。それは、金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡。

三国時代の英雄、曹操の墓から出土した鏡と姉妹鏡であることが中国側から証明された国宝級の鏡である。

しかし、新聞には「なぜ日田に？」という見出しになっており、近畿から何らかの理由で日田に下げ渡したものではないか、という記述がなされていた。

河村先生はこの記述に激怒する。出土したのは日田であって、何ゆえ近畿から、と歪曲されるのか私も疑問だ。

さて、受講者仲間の U 女史。実家が日田なので、帰省した折に県の博物館で開催されていた鏡展を覗いたらしい。

鏡展では卑弥呼の鏡と称して三角縁神獣鏡がメインで展示されており、金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡は申し訳程度の小さな記載に留まっていたとのこと。

U 女史は長年河村先生の薫陶を受けているので、「この金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡こそが重要な鏡ではないですか？」と学芸員に尋ねるものの、返答はなく無視されたらしい。

私も黒塚古墳で、後漢鏡こそが遺体のそばに埋葬され、三角縁神獣鏡は全て外に投げ捨てられていた話を聞いていたので、卑弥呼の鏡は三角縁神獣鏡ではないと確信している。

河村先生も、三角縁神獣鏡は日本で作られた可能性が高く、卑弥呼時代の鏡ではない、と断言される。

はて？なぜ、県主催のイベントにも関わらず、こうも鏡の扱いが錯綜するのか、私たち受講者は首をかしげる。せっかくの国宝級の鏡、もっと前面に押し出して貰いたいものだ。

初代王・天御中主神

日本最古の王の講座があった。それは、天御中主神（あめのみなかぬし）。

『新唐書』には、日本は古の倭の奴であり、初代の王は天御中主神である、と記述されている。

『古事記』にも高天原の初代の神は天御中主神と記されており、双方符号する。

河村先生が言われる事実の証明だ。つまり、奴国王こそが日本民族のルーツであり、初代が天御中主神なのだ。

邪馬台国は西暦 180 年から 270 年までの約 90 年間とされるが、奴国はそのはるか前の時代に遡る。

西暦 57 年に漢から金印を貰ったことを考えると、その事実が伺える。

『古事記』の冒頭はイザナギとイザナミから始まり、左目からアマテラス、右目からツクヨミ、鼻からスサノオが産まれた。

そんな話は覚えていたものの、あめのみなかぬし、という王は初めて知った。河村先生から、天御中主神を祀る神社が那珂川地区にある、と聞き早速行ってみた。

なんと、そこは、母の実家の近くだった。母の実家は、上白水という所にあり、母の親せきは那珂川周辺に住んでいる。母の実家に帰省した時は、現人神社や那珂川でよく遊んだ。天御中主神社はその近くにひっそりとあった。

日本民族の初代王とすれば、あまりにも小さな神社だが、その意味はとても大きい。ここから日本民族が繁栄していったのかと思うと、とても感慨深い。

父が奴国がらみの発掘をしていたことも不思議だが、天御中主の神社が母の実家に近かったことにも驚いた。

私の両親は、奴国の末裔かもしれない。

平原遺跡の功績者

福岡糸島にある平原遺跡は日本を代表する大鏡が発掘されている。直系 46.5cm もある内行花文鏡が 5 枚も見つかっており、これは通称「八咫鏡」と言われているもので、これほど大きく貴重な鏡は他にはない。

河村先生はこの鏡の説明を始めるといきなり数学になる。

「金印の一辺が 2.3cm、これは中国の一寸にあたり、八咫鏡の半径が 23cm、つまり 10 倍。一咫とは、女性の親指から中指までの長さで、男性の 0.8 の長さで、これを円周率で表すと．．．」

とボードは数字や方程式で一杯になる。

数学はからっきしダメな私はすぐに頭がパンクする。

それでも、平原遺跡に携わった人の話になると講座は面白い。平原遺跡は原田大六という方が発掘されたらしいが、河村先生は、その大六先生の奥さんを紹介された。

考古学に没頭する夫を経済的にも精神的にもその奥さんがすべてを支えたらしい。つまり、大六先生は奥さんの支えによって遺跡発掘をしていた訳だ。

う～ん、私ならできないな、と思うとその奥さんに興味が沸いた。よく糟糠の妻などと言うが、現代ではそんな奥さんはおそらくいない。それでも、大六先生の奥さんは大六先生が亡くなった後、八咫鏡サイズの本を夫のために自費出版されたそうだ。

大六先生の奥さんは、好きなことに没頭する夫をこよなく愛してあったのかもしれない。そして、そんな愛があったからこその平原遺跡なのだ。

なぜか、平原遺跡の話になると、この大六先生の奥さんを思い出してしまう私である。

伝承とは？

河村先生が 1000 年は、長いようであるがそうでもないと言われた。

「90 歳の祖父母が 6 歳の孫に 90 年を語ると、その孫がまた 90 歳になった時に 180 年の歴史が語られる。そうなると、1000 年はわずか 6 人で繋がる」とのこと。

私は思わず、目から鱗が落ちた。そうか、先生が作る系図をそういう目で見ると、歴史はより身近に繋がる。

河村先生も、幼い頃、祖父母宅の縁側で聞いた話を今で鮮明に覚えているそうだ。

私の母は今年 90 歳になる。母の人生を孫に伝え、孫が、自分の孫にまた人生を伝えればそれでもう 200 年近くが伝わる。

卑弥呼の時代から、そうやって歴史を語り継いできたとすれば、古代史をより身近に感じることができる。

稗田阿礼みたいな人が十人いれば、充分に語り継げるではないか。そういった意味では、日本にはたくさんの言い伝えや記録が残されている。

昔話に始まり、風土記や日本書紀や古事記。しかし、河村先生が言われるには、考古学学会では、『日本書紀』や『古事記』は重要視されていないとのこと。歴史的事実に即していない、と判断されるらしい。

どうしてだろう。少々の間違いはあっても古代を知るのに、あらゆる伝承や歴史書は必要不可欠だろうに、と素人ながらに私は思う。

思えば、歴史だけでなく、いろんな知恵や生きていく力のようなモノを祖父母から学んだような気がする。子供たちが、夏休みに祖父母宅の縁側で古き良き話を聞くことこそが古代史勉強の第一歩なのかもしれない。

（次号へ、つづく）

連載　風の吹く丘

～第１回　バブルのおもいで～

H・IMAGINE

34 年前のバブル株高と現在の株高

2024 年 2 月 22 日、日経平均がついに史上最高値を更新した。
1989 年 12 月 29 日に 38,915 円（終値）を付けて以来 34 年振りの高値更新である。当時の日本は地価と株価が急騰し、空前の好景気が到来していたが、投資対象から受け取れる収益と形成された価格とのバランスがいびつで、とても居心地が悪かった。

東京都の不動産の時価総額が米国全土の不動産の時価総額を超えたとの報道に驚いた。多くの人の頭の中では、急騰する不動産の値動きに警戒警報が鳴っていた筈だが、投機熱に侵されてまともな感覚が麻痺していたのだろう。また、多くの上場企業が資金運用部を創り、本業と関係のない資金運用をしていた。運用する資金の原資は株式の時価発行増資のケースも多く、株式市場から吸い上げた資金は、また株式市場に投下された。
しかし上げが上げを呼ぶマネーゲームは、永遠には続かなかった。

企業収益が伸びなければ、発行株の増加に伴い、一株当たりの利益は減少する。大きさの変わらないパイを、より多くの人数で分配すれば、一人当たりの取り分が減少するのは当然の理屈である。市場から大量の株式を上場企業が自社株買いで吸い上げ、現金を投資家に還元する現在とは真逆の世界だ。
当時の投資家は『配当は少ないが、値上がりで儲かるから預貯金より良い』との理屈で株式市場に資金を投下していた。郵便局に預けたお金は 10 年で倍になったが、株の配当利回りは 0.5%程。今は、『配当は多いけど、値下がりしたら損するから株は買わない』とまだ様子見をしている人が多い。
日経平均は、スピード調整をしたが、金融緩和は継続中であり新 NISA 等の政策の後押しも有るため、再度上値を追う可能性が高いと見ている。株式投資に全く興味を持たなかった層が市場に参加した時に、最後の買い手の登場と共に天井を打つのがいつものパターンだ。今は、まだそこ迄は行っていないだろう。

日銀の物価目標

日銀は毎年２％の物価上昇の目標を挙げているが、国民のインフレ進行に対する不安の声は小さい。２％の物価上昇が実現すれば、現金の価値は毎年約２％ずつ目減りする。消費者にとっては、消費税を毎年２％上げられるのと似たようなダメージだが、まだこのからくりに気付いていない。現金を保有する人には打撃となるが、借金をしている人には朗報だ。最大の債務者は国家である。紙とインクで紙幣を大量にばら撒く政策に対応するための資産運用は、インフレをヘッジするための重要な手段だと思われる。天動説が信じられていた頃は、地球を中心として世界が地球の周りを回っていると皆がそう認識していた。資産運用を尻込みしている人達は、日本の銀行に預けてある円預金は価値が不動で、米ドルやゴールド及び株式は価格変動するから、危険だと感じている。現代の天動説だろう。視点を変えれば、変動しているのはむしろ円の価値である。未だに投資に尻込みをしている人には、早く目を覚まして欲しいと願う。

バブル期の証券界

当時の証券界は証券４社が仕切っていた。４社の社名は全て日本国に由来している。

＊日興証券は、そのまま日本を興す証券会社である。

＊大和証券はやまと証券。

＊山一証券の名前は、邪馬臺→邪馬壹→邪馬壱が由来らしい。

＊野村証券の社名はストレートに日本に結び付かないが、社章はひらがなの(へ)を二つ重ねた山の記号の下にカタカナの(ト)でヤマトと見える。

口の悪い投資家は、ヘトヘト証券と呼んでいた。

ベルリンの壁の崩壊

1990 年はソビエト連邦が崩壊し、ベルリンの壁が壊された年である。
米国との軍拡に疲弊し、ソビエトの経済が行き詰った。70 年もの間、皆が平等な理想社会の実現を目指したが、頑張った人と怠けた人の生活水準が平等だった為に、誰も努力をしなくなり国家は崩壊した。皆が平等で貧富の差の無い社会の実現は、残念ながら共産主義では叶わなかった。そして、米ソの冷戦は終焉を迎えたのである。

桃太郎(米国)の鬼退治の家来は、空を飛び情報収集が出来る雉（イスラエル）と自分で考えることのできる猿（ドイツ）と忠実な犬（日本）であった。
冷戦中の米国防総省の仮想敵国はソ連で、冷戦後の仮想敵国は可哀そうな日本となった。
ここからは、その後の日本の凋落のストーリー、中国の勃興のストーリーになりますが、長くなりますので、またの機会とさせていただきます。

冴えないペンネーム

定年のため生まれ故郷の福岡に戻り、知人の勧めで古代史の講座に顔を出したところを現在の師匠に捕まり、文章を書く羽目になりました。ここに寄稿するきっかけはその師匠のコネであります。そう、吾輩は、コネである。名前は未だ無い。正確には無かったのですが、無いでは困るので、暇人（HIMAJIN）と仮置きしました。ただの暇人では、本当に不善を為しそうなので、H・IMAGINE と若干のアレンジを加える事と致します。いつまで続くのか、今回が最終回になるのか分かりませんが、お付き合いのほどよろしくお願い申し上げます。

（次号へ、つづく）

『魏志倭人伝』を読み解く

ふくおかアジア文化塾理事・古代史研究家

愛川順一

第一章　私の「邪馬台国」試論

第一節　「魏志倭人伝」より「邪馬台国」を読み解く

1、はじめに

2015年3月、昭和天皇の生涯を記録した「昭和天皇実録」の公刊本が発売されました。

「昭和天皇実録」は宮内庁書陵部編集課に於いて、昭和天皇の87歳7ヶ月のご生涯を、平成2年より平成26年8月までを、24年8ヶ月の歳月をかけ、国が総力を挙げて、可能な限りの史料を用い編纂したものです。

『魏志倭人伝』と言われる「三国志　魏志　烏丸鮮卑東夷伝」も中国の二十四正史とされる、れっきとした国書ですが、国家の事業として編纂された正史が、いくら時代が古い、政治的な理由がある、日本から見れば他国の本である、からといって、嘘を書いたとか、書き間違いであるとか言って自分の都合の良いように、安易に読み替えていいものでしょうか。

皆さんは釣りをしたことがおありでしょうか？

釣り糸が絡まって、もつれてしまった時に、無理やり引っ張ったり、穴をくぐらせたりすると却ってややこしくなり、解きほどくのが難しくなります。

そんな時は絡まった糸の輪を、大きく、大きく根気強く広げてやります。元の状態に戻れば絡まった糸は自然にほぐれるのです。

現代の考古学者は、自分の掘った遺跡だけを見て、それだけを根拠にまるで絡まった糸の端をぐいぐい引っ張るように、文献も自分の都合の良いように解釈し辻褄をあわせているように思えます。

一方、文献学者の方も、昔の人の説を並び立てて、その比較に追われ、考古学者に迎合するような、例えて言えば絡まった糸を穴にくぐらせて、かえってもつれをひどくしているような状態ではないでしょうか。

ここはもう一度原点に戻って「魏志倭人伝」を読み直し、「編者が何を伝えたかったのか」、を考え直してみたいと思います。

2、『魏志倭人伝』について

それではさっそく「魏志倭人伝」についておさらいをしたいと思います。

『魏志倭人伝』とは、中国の後漢の混乱期から「魏」「呉」「蜀」の三国が争った時代の興亡を経て、西晋による三国の統一までを記した全65巻（魏書30巻、呉書20巻、蜀書15巻）からなる歴史書であり、正式には『三国志』と呼ばれる中国二十四正史の中の一書であります。

その中の魏書の30巻の最後に「烏丸、鮮卑、東夷伝」という項目があり、そのまた最後に「倭人」の事が記されています。それを俗に『魏志倭人伝』と呼んでいます。

中国の正史の中で、初めて日本に関するまとまった記事（2000字）が記されており、その中に倭人と共に「邪馬台国」の文字も見えます。

当時、海を隔てた海域に「倭」と呼ばれた地域があり、そこに住んでいる人々の事を「倭人」と呼んでいました。倭人は70～80年もの間相争っていましたが、「卑弥呼」と呼ばれる女王を共立し、連合国を形成しました。

「卑弥呼」は「邪馬台国」内に居住しており、その「邪馬台国」について、方角や距離（日数）、国名およびその官名や、また風俗について記されています。

3、『魏志倭人伝』の信憑性

『魏志倭人伝』については、新井白石（古史通）や本居宣長（古事記伝）の時代から、現代まで約300年の間に亘って論議されてきましたが、特に「邪馬台国」の位置が特定できないことから、いろんな推測がなされ意見の統一がなされないまま現代に至っています。

そして、自分の意見を正当化するために、次のような解釈が唱えられてきています。

①嘘説

当時魏国は、呉国と戦闘状態にあり、倭国の位置を特定されないようにわざと嘘の地理を記した。

又、倭国への出張者が、上司への報告に、わざわざ長い距離を行き来したように告げた。

②伝聞説

倭国への出張者は、現地まで赴いておらず、倭人の言うままを書き記した。

③書き間違い、写し間違い説

本書の中には、同じ意味でも異なる字が記されており書き間違えたか、写し間違えたものである。

④読み間違い説

「邪馬臺国」ではなく「邪馬壹国」である。「邪馬壱国」と読むべきである。

⑤距離、方角、日数の間違い説

「南」は「東」の間違い。「水行二十日」は十日の間違い、「陸行一月」は一日の間違い等々

⑥認識の間違い

倭国は南に長い国だ。会稽の東に位置する。（混彊理歴代国都図）等々、

今でも同じような論議がなされています。

しからば、『三国志』とは正史でありながら、そんなに信憑性が薄いのか？時代背景、編者の人物像、書かれた字句の妥当性について考えてみたいと思います。

4、陳寿の人物像と『三国志』の評価

①陳寿の人物像

『三国志』を著した「陳寿」とはどのような人物であったのか？

陳寿は（233～297年）、三国時代に蜀漢と西晋に仕えた官僚です。

『三国志』が完成した時、当時の人々は叙事に勝れ、良史であると褒め称えています。これを見た「夏候湛」（夏候淵の曾孫で夏候威の孫）が、自ら執筆中であった『魏書』を破り捨ててしまったという話が残っています。

しかし、あまりに正確に書こうとして、信憑性の薄い史料を排除したために、簡潔な内容となっており、他の歴史書にある「表」（年表）や「志」（天文・地理・礼楽）等の記述がありません。

それで、晋王朝を滅ぼした、中国南北朝の「宋」の三代皇帝「文帝」（劉義）はこれを残念がり、歴史家の「斐松之」に「注」を作る事を命じたほどであり、信憑性は高い文であったはずです。

陳寿自身の伝は『晋書』にあり、かつての師「譙周」は、「卿は必ずや学問の才能を以て名を揚げる事であろう。そして、きっと挫折の憂き目に遭うだろうが、それも不幸ではない。深く慎むがよい」と言ったというが、その通りの結果になったと『晋書』は評しています。

②陳寿への誹謗

しかし反面、悪い話も書かれています。

『晋書』陳寿伝には、「或云。丁儀、丁廙有盛名於魏，壽謂其子曰。可覓千斛米見與，當為尊公作佳傳。丁不與之，竟不為立傳」（ある人は云う。魏の時代に盛名をはせた「丁儀、丁廙（ていい）」の兄弟の子孫に，佳い伝記を書く見返りに米千石を要求したが断られたので、「丁氏」の伝記を書かなかった）とも、「班固受金而始書　陳寿借米而方伝。此又記言之奸賊。載筆之凶人。蜼肆諸市朝、投畀豹虎可也」（漢書を書いた）班固は金を要求したが、陳寿は米を要求した」と書かれています。

③陳寿の公正さ

しかし、陳寿は、出身の「蜀漢」もできる範囲内で称賛して書いています。

それは「曹操」「劉備」「孫権」の「死」に対して、「崩」「殂」「薨」を使い分けしている事です。

陳寿は「漢王朝」から禅譲を受けた「魏王朝」、「魏王朝」から禅譲された「晋王朝」を正統な王朝と認め、曹操の死には「崩」を使いました。

劉備の死に際しては、「漢王朝」の末裔と理由をつけて、曹操と同じ格の「殂」を用いましたが、孫権は自称の王であるとして「薨」の字を採用しています。

そこに出身地である「蜀漢」を意識していることが垣間見えます

要するに陳寿の悪評は、後世に『三国志演義』（いわゆる小説）が世に流布され、「蜀」が漢王朝の正統なる後裔としてあって欲しいとの筋書きの中で、「諸葛孔明」や「関羽」「張飛」への人気が高まった以降に、「魏」を正当な王朝とした国書『三国志』への反感が要因と思われます。

5、『魏志倭人伝』の原文

「邪馬台国」については、古今東西の文献学者が『魏志倭人伝』という同じ原文を読んでいるのに、九州説と畿内説に真っ向分かれて、今も論争が続いています。。

最近になって考古学者がこの「邪馬台国論争」に参戦してきて、諸々意見を述べていますが、元々は「魏志倭人伝」に書かれた作者（陳寿）の「春秋の筆法」を読み切れていないところに問題があります。

前述したように、自分の意見に合わすような読み方をしないで、原文の意図を真摯に読み解く事が問題解決の近道であり、唯一の方法であると考えます。

原文を素直に読んでみると、意外に解る所や、感じ取れるところが随所にあります。

まず「邪馬台国」の位置について、原文を読んでみましょう。

原文は次のとおりです。

a　倭人在帯方東南大海之中　依山島為国邑　舊百余国　漢時有朝見者　今使譯所通三十国。

b　従郡至倭、循海岸水行、歴韓国、乍南乍東、到其北岸「狗耶韓国」、七千余里。

c　始度一海、千余里至「対馬国」。方可四百余里。有千余戸。

d　又南渡一海。千余里、名日瀚海。至「一大国」。方可三百余里。有三千許家。

e　又渡一海千余里至「末盧国」。有四千余戸。

f　東南陸行五百里、到「伊都国」。有千余戸。世有王。皆統属女王国。郡使往来常所駐。

g　東南至「奴国」百里。有二萬余戸。

h　東行至「不彌国」百里。有千余家。

i　南至「投馬国」。水行二十日。可五万萬戸。

j　南至「邪馬台国」。女王之所都。水行十日陸行一月。可七萬余戸。

k　自女王国以北、其戸敷・道理、得略戴、其余旁国遠絶、不可得詳。

l　有「斯馬国」・・・・・・・・・・、次有「奴国」。此女王境界所蓋。

m　其南有「狗奴国」男子為王、其官有（狗古智卑狗）不属女王。

n　自郡至女王国萬二千余里。

o　参門倭地　絶在海中洲島之上　或絶或連　周旋可五千余里

6、「倭人伝」の中の「漢字」の解釈

漢字は表意文字であり、表音文字とは違い「字」そのものに意味があります。

同じような字で、同じような意味を持つ字でも、ニュアンスが違うものがあり、中国の筆法で微妙に使い分けられていますが、その意味をどう解釈するかが「倭人伝」を理解できるかどうかの大きなポイントになります。

下記に同じような意味で使われており、従来は無視されてきたか、書き間違いとされていた字句の解釈をしてみたいと思います。

①「従」と「自」の違い（～よりの意味、出発点を示す）

漢字	従	自
条項	b、従郡至倭	m、自郡至女王国萬二千余里
漢字の意味	付き従う、逆らわず言いなりになる、いろんなところに立ち寄る	みずから、起点を表す、それから出発点から目標地点へ到着する時に使う
使い方	郡より（従り）	郡より（自り）出発して女王国へ至るには出発点という意思を表している

②「至」と「到」の違い（経由地と到着点）

漢字	至	到
条項	b、従郡至倭 c、千余里至「対馬国」・・・方可四百余里 d、千余里至「一大国」・・・方可三百余里 e，千余里至「末盧国」 g、東南至 「奴国」 h、東行至 「不彌国」 i、 南至 「投馬国」 j、 南至 「邪馬台国」	b、到其北岸「狗耶韓国」 f、東南陸行五百里到「伊都国」
漢字の意味	ぎりぎりのところまで行き着く（必至） この上ない（至極） 太陽の回起点に達した日（夏至、冬至）	ある時間、時点になる（深夜に到る） 広い範囲に及ぶ（九州一円に到る） 自分の方へやってくる（到来）
使い方	通過地点、経由地点、途中立ち寄る 太陽の回起点に達した日（夏至、冬至）	旅の目標地点（到着） 「狗耶韓国」と「伊都国」のみに使われており、倭に入る前に「狗耶韓国」で旅装を整え、「伊都国」が目標地点であったことが窺い知れる

③「度」と「渡」の違い

漢字	度	渡
条項	c、始度一海　千余里至「対馬国」 e,又渡一海千余里至「末盧国」	d、又南渡一海。千余理至「一大国」
漢字の意味	物差し、目盛（尺度、温度、鮮度） 法、掟（制度、法度、度外視） 様子、態様（態度）	わたる、移動する
使い方	渡る意味ではあるが、「度」には起点として推し量る意味がある b,狗耶韓国が拠点として扱われる	単に渡る意味で使われる

④方角の後ろに「行」の有り無し

漢字	行と至、到の組み合わせ	（「行」「度」「渡」の漢字記載なし）
条項	f、東南陸行五百里　到「伊都国」 h、東行至「不彌国」百里	g、東南至「奴国」百里 j、南至「投馬国」水行二十日 j、南至「邪馬台国」水行十日陸行一月
漢字の意味	東南五百里で「伊都国」に到った（着いた）。 東に行くと「不彌国」が至る（存在） 「伊都国」へは行った。 「不彌国」へは行っていない。	「行」の字がない理由がある。「奴国」「投馬国」「邪馬台国」ともに大国である。行く方角や手法が多数あるため、方法を特定できない

⑤「戸数」表記の違い

漢字	戸	家
条項	c、「対馬国」有千余戸 e、「末盧国」有四千余戸 f、「伊都国」有千余戸 g、「奴国」　有二万余戸 i、「投馬国」可五万余戸 j、「邪馬台国」可七万余戸	d、「一大国」有三千許家 h、「不彌国」有千余家
漢字の意味	扉（片開きの扉、両開きは門） 家、律令制で行政上、社会組織の単位とされた家。 普通は2～4人の小家族を含む 20～30人の大家族 漢書地理志では平均5～7人 「余」は超えるときに使い 「戸」は行政の単位	人間が居住する建物（家屋） 同じ家屋に居住する血縁関係を基礎とする（家族、家制度） そのことに従事している人（芸術家） そうした性向が強い人（情熱家） 「許」は「～ばかり」 「家」は物理的な単位

⑥「有」と「可」の違い （前述の「戸」と「家」の欄に同じ）

漢字	有	可
条項	c、「対馬国」有千余戸 d、「一大国」有三千許家 e、「末盧国」有四千余戸 f、「伊都国」有千余戸 g、「奴国」 有二万余戸 h、「不彌国」有千余家	j、「投馬国」　可五万余戸 j、「邪馬台国」 可七万余戸
漢字の意味	存在すること（無から有を生じる） 持つこと（所有）	良い（可否）（不可）、よろしいと認める（可決） 出来る、成しうる（可能）（可燃性） するがよい、それに値する（可憐）（可及的） （この場合「押しなべて」の意味で使う）
		「投馬国」と「邪馬台国」のみ「可」の字が使われているのは連合国として大国であり総数の意味で使われている。

⑦方角、里程、国名の記載順の違い

記載順	方角→里程→国名	方角→国名→里程
条項	c、始度一海千余里至「対馬国」 d、南渡一海千余里至「一大国」 e、一海千余里至 「末盧国」 f、 東南陸行五百里到「伊都国」	b、乍南乍東 「狗耶韓国」七千余里 g、東南至　「奴国」百里 i、 南至 「投馬国」水行二十日 j、 南至　「邪馬台国」水行十日陸行一月
		この表記順は大国のみ使用されている。 「投馬国」と「邪馬台国」が、日数で表記されているのは、この二国が多くの国を抱えた「連合国」であるため、行く順番や、行き方や、行く方角が沢山ある。 連合国の広さの概念をあらわしている 其国、東西五月行南北三月行（隋書倭国伝）

7、「倭人伝」の解釈

前述したように、同じような字でも微妙に違うニュアンスや、同じような表記の仕方でも微妙に違う筆法に、どのような意味があるのかを考えます。

①「帯方郡」から「伊都国」へ

上記の①「従」と「自」の違い、②「至」と「到」の違い、③「度」と「渡」の違いから使者は「帯方郡」を出発していろんな国を経由して「伊都国」に到った事が解ります。（「伊都国」にのみ「到」が使われています）

②「千余里」は一日の航海距離

「狗耶韓国」から「対馬国」、そして「一大国」、「末盧国」への相互間の距離は、明らかに違うのにそのすべてが「千余里」と同じ距離となっています。

当時、陸上で距離を測る機械は「諸葛孔明」が発明した「記里鼓車」という機械で車輪の直径に円周率を掛け（2πr）1回転するごとに記録をする仕掛けです。

しかし海上の距離を測定する技術はなく、航海も地文航法といわれる地形や地上の物を目標にして航行する沿岸航法で、目視できる昼間しか航海が出来ませんでした。勿論正確な距離などわかりません。そこで「一日で航行できる距離を千里」と決めたのです。

『三国志演義』の中に、呂布が持っていた（後に曹操が関羽へ送った）赤兎馬は一日に千里を駆けたとありますが、赤兎馬が一日に走った距離を千里と言ったのです。

③倭国（九州）までが「水行十日」

「狗耶韓国」から「対馬国」までが千余里、「対馬国」から「一大国」までが千余里、「一大国」から「末盧国」までが千余里、合計三千余里ですから、（三日）かかるという事です。

また「帯方郡」から「狗耶韓国」までは七千余里ですから、（七日）の行程と言う事が解ります。そうすると、「狗耶韓国」から「倭人の本土の地」である「末盧国」ま では、一万余里ですから十日かかる事になるわけです。

船旅で十日、すなわち「水行十日」の距離であると言う事になります。

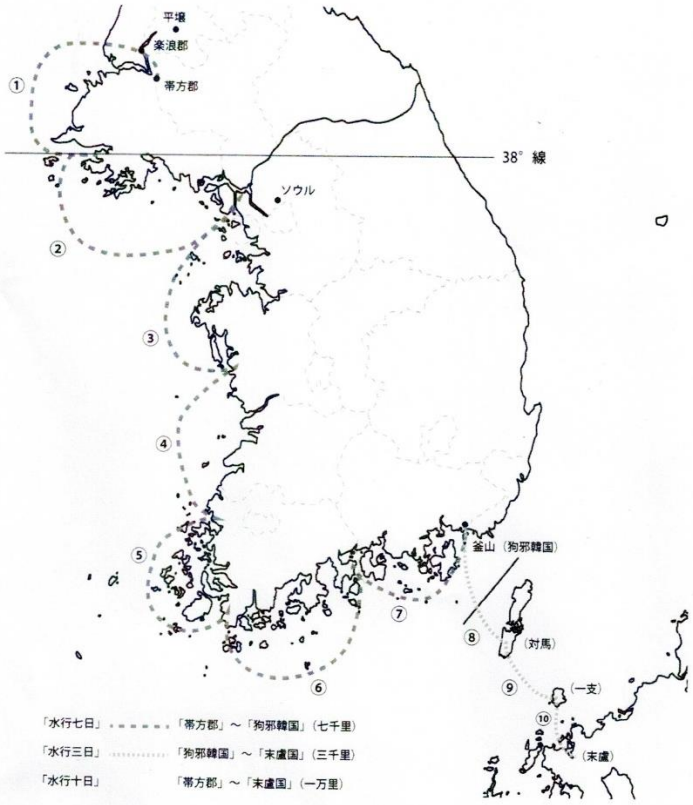


図１　「帯方郡」から「末盧国」までは「水行十日」

④「国」と「邑」の存在

「倭人伝」の冒頭に、「倭人在　帯方東南大海海之中　依山島為国邑　舊百余国」とあります。

当時、やっと国としての意識が萌芽しだした時代で、百余国の国々は独立して、争いながらも、一人の首長を掲げて、連合、同盟国を形成し出した時代でした。「国」と「邑」が併存している姿を見て「国邑」という表現をしたのではないでしょうか。

「国邑」の中には、「邪馬台国」七万余戸、「投馬国」五万余戸、「奴国」二万余戸のように、大きな「国」がある一方で、「対馬国」千余戸、「一大国」三千許家、「末盧国」四千余戸、「伊都国」千余戸、「不彌国」千余家というように、まるで「邑」と言うに相応しい国が併存しています。

⑤近隣諸国との人口比較

それでは当時、近隣諸国にはどれくらいの人口が居たのか比較してみます。

『三国志』では、次のとおり。

扶余	戸八万	方可二千里
高句麗	戸三万	方可二千里
東沃沮	戸五千	西南長可千里
濊	戸二万	朝鮮の東
韓	総十万余戸	方可四千里

・馬韓55国、弁辰12国、辰韓12国を含む。

『漢書』地理志では、

「玄菟郡」　四万五千戸　(221、000人)

「楽浪郡」　六万三千戸　(407、000人)

という記事があります。

⑥「邪馬台国」の戸数

女王が統治する「倭国」の人口は、今までの説では「邪馬台国七万余戸」、「投馬国五万余戸」「奴国二万余戸」、他に記載のある「対馬国千余戸」、「一大国三千許家」、「末盧国四千余戸」「伊都国千余戸」「不彌国千余家」と、併せて「十五万余戸」になります。

しかし、その他にも21国(詳らかにならない国)があります。

それらの国の戸数は解るすべがありませんが、仮に「1国の戸数」を「対馬」「壱岐」「末盧」「伊都」「不彌」国の平均と仮定すると(敢えて大国の「奴国」を除いた)「1＋3＋4＋1＋1＝10(千戸)÷5(国)＝2(千戸)」(1国当たりの戸数)となります。

詳らかにならない国が21国(女王国を除く)ありますから、平均値の2千戸を掛けると(21国×2千戸)≒40千戸を加えると、「邪馬台国、7万戸」「投馬国、5万戸」「奴国、2万戸」「対馬～不彌国、1万戸」「詳らかにならない国21ヶ国×2千戸≒4万戸」と、「倭国」は「19万余戸」の国となります。

この数を前項の近隣諸国の国と比較すると、「高句麗」の7倍、「韓」(馬韓55国、辰韓12国弁辰12戸、計79国の連合国)の2倍の戸数となります。

私は、「邪馬台国」は連合国家。「投馬国」も連合国家。その上「邪馬台国」と「投馬国」は「同盟

国家」と想定しています。（根拠は後で述べます）

そうすると「連合国家・邪馬台国」は7万戸ですから、その内訳は次のとおり。

対馬国	1千余戸
一大国	3千許家
末盧国	4千余戸
伊都国	1千余戸
不彌国	1千余家
奴国	20千余戸
その他21国	40千弱戸
邪馬台国」（連合国）	可70千余戸
投馬国（連合国）	可50千余戸

倭国（同盟国）（方五千里）は「120千余戸」の国となり、韓（馬韓・辰韓・弁晋同盟国）の「総100千余戸」（方四千里）に比較しても、ほぼ妥当な数値になります。

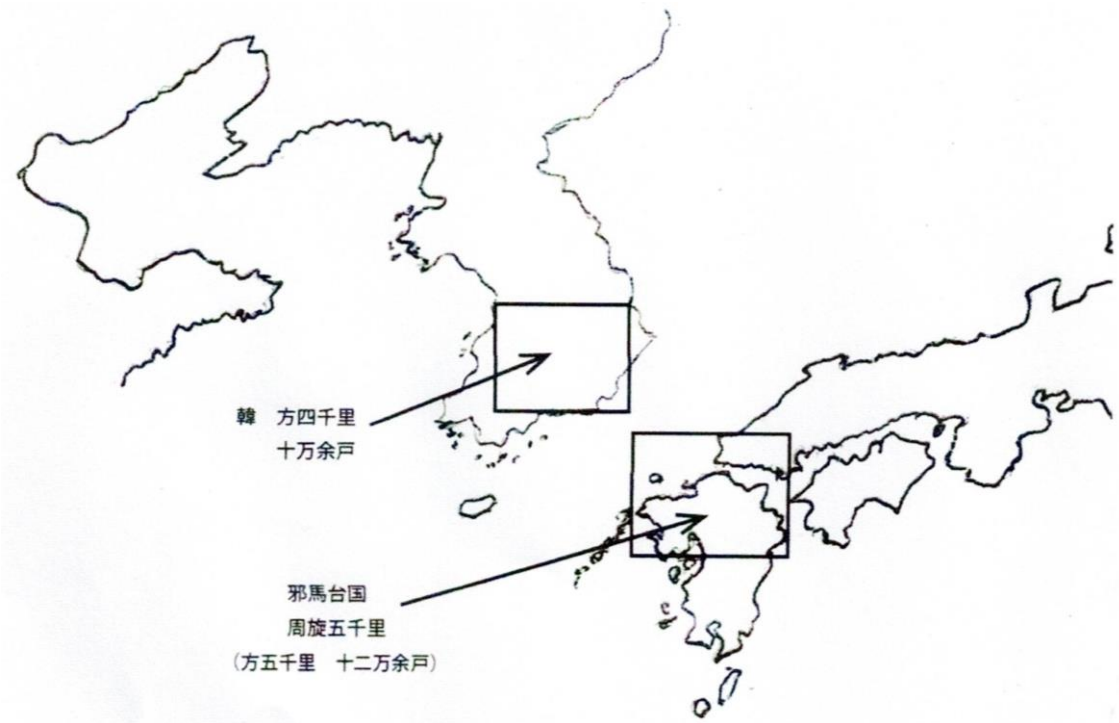


図２「韓」と「邪馬台国」の比較

8、戸数から見た邪馬台国連合説

前の試算から「邪馬台国」を単独国と見ると、7万戸の人口は42万人。

①弥生時代の日本の人口

㋑鬼頭宏氏の「人口から読む日本の歴史」

内閣府の中のなかの「子供子育て本部」の「平成16年度版少子化社会白書」の第1節「日本の人口の変化という項目」の中で第 1-1-1 図「有史以来の日本の人口の推移」が図表で示されています。そのコラムに、歴史人口学の研究者である鬼頭宏氏の「人口から読む日本の歴史」の記述が載せられていて、

「縄文時代には約 10 万人～約 26 万人であり、弥生時代には約 60 万人であった。奈良時代には約 450 万人、平安時代（900 年）には約 550 万人となり、慶長時代（1600 年）には約 1,220 万人となった。江戸時代には 17 世紀に人口が増加し、18 世紀には停滞して、おおむね 3,100 万人から3300万人台で推移した」

とあります。

㋺小山修三氏の「縄文時代」

国立民族学博物館名誉教授の小山修三氏も「縄文時代」題する書籍の中で、同様に60万人と算出されていましたが、後の講演で「弥生時代の人口は遺跡からの計算では約60万となったが、弥生時代の遺跡の重み付けを関東地方の遺跡からとったため、全体量が低くなりすぎたようである。その後の発掘によってわかった吉野ヶ里跡をはじめとする西日本における弥生集落の大きさを考えると、弥生末期には 100万人を越えていたのでは ないかと考えている」と修正されています。

②現代の人口との比較

現在の日本の人口は 1 億 2 千万人ですが、当時の人口、60万人と比較すると200倍の開きがあります。日本の領土の範囲や推定の曖昧さを考慮したとしても「約100倍の人口」と仮定して、現在「邪馬台国」と比定される「市」と比較してみます。

「邪馬台国九州説」の中で「邪馬台国」に比定される有力な市（町）の人口は、次のとおり。

「福岡県」　511万人
「福岡市」　150万人
「北九州市」　95万人
「朝倉市」　5万人強、
「糸島市」　10万人弱
「久留米市」　30万人
「吉野ヶ里町」 1万6千人（旧神崎郡を含めても5万人弱）

当時の「邪馬台国」が7万戸、42万人とすると、当時の人口の100倍を有する現代の「市町村」だけでは収まり切れないのは明らかです。（これは「畿内」にも言えることで、奈良は、戦後大阪のベットタウンとして人口急増していますが、戦前は日本の県の中でも40番目位の過疎地でした）

当時の人口が単純比率とはいえ現在の1／100であった事を考える、人口密度と照らし合わせ

ると、とても現在の市町村の枠組みには収まり切れない広さであると思えます。ここからも「邪馬台国」が単一の「国」ではなく「連合国」である事の証明になると思います。

7万戸を抱えた「邪馬台国」を一つの国と仮定すると、一戸当たりの人数を6人と仮定すると42万人の人口を抱えた都市という事になります。当時の人口は今の1／100です。

邪馬台国九州説で最大の候補地と思われている朝倉市の人口は現在5万人。朝倉市に隣接する福岡県3番目の市、久留米市でさえ人口30万人です。

この事からも「邪馬台国」を一つの国（現在の郡、市）と考えるのはあまりにも不適当です。

前にも述べたように、『魏志倭人伝』に同じような国家形態の国があります。

「韓」の国は、馬韓（55国の連合国）辰韓（12国の連合国）、弁辰（12国の連合国）の同盟国です。「韓」も同じ人種が「馬韓」「辰韓」「弁辰」という連合国を造り、それぞれが同盟し「韓国」という同盟国を形成しています。

「倭国」も、それぞれが「邪馬台国」や「投馬国」として連合し、同盟国として成り立っていると考えれば齟齬なく受け入れられます。

もちろん人口上の問題、地勢的問題だけではなく文献の問題、好悪学的な問題での裏付けは必要です。

8、『魏志倭人伝』の謎

文献上に表れている「邪馬台国連合国」説

①春秋の筆法

文献上「邪馬台国」が連合国家とであるとは、直接的にはどこにも書かれていません。

西洋の文化は油絵でもわかる通り、キャンパスすべてに絵の具を塗りたくり、自分の意思をあまねく表現することを、良き伝達手段としていますが、中国の絵画は「南宋画（墨絵）」の如く、余白を残し書かれていあい場所から観賞者が感じ取るという作風です。

文章も同じく、孔子が最初に書き始めたと云われる、物事の事象を文章には直接的には書かないでその背景を推理して読者に分かってもらうという「春秋の筆法」と呼ばれる書き方があります。書く方は勿論、筆力が要りますが、読む方にも「読解力」が必要になってきます。

②「魏志倭人伝」の問題点

『魏志倭人伝』に書かれている「邪馬台国」の所在地の特定を難解にしている原因はいくつかあります。

最初の、帯方郡を出発し「狗耶韓国」を経て、「対馬」「壱岐」「末盧」「伊都」へ到るまでの行程は現在の「市」と照らし合わせて、「対馬市」「壱岐市」「唐津市」「糸島市」に比定されることに対し、ほとんど全ての方々が同意できています。それから後の「奴国」「不彌国」についても、詳細は意見の違いながらも「奴国」は「福岡市内」、「不彌国」は「福岡市糟屋郡内」にある事は、多くの方々も認める処でしょう。

㋑「伊都国」の後

「伊都国」へは「到（到着する）」が使われており、他の文も含めてとどまっていることが解ります。

しかし「対馬」～「伊都」迄は「方角、距離、国名」の順で記されていたものが、「奴国」「不彌国」では「方角、国名、距離」と変わり、「投馬国」「邪馬台国」では「距離」が「日数」に変わる。そうすると、魏の使者は「奴国」以降の国へ出向いたのかどうか疑問（不明）です。

㋺「南至投馬国水行二十日」、「南至邪馬台国水行十日陸行一月」

「投馬国」以降は「距離」が「日数」へと変わります。

㋩出発の起点

「不彌国」迄は「方角」「距離」が記載されており、相互に整合性が取れるので、前の国を出発点と考えて間違いないと思えます。

ただ「投馬国」と「邪馬台国」については単純に、直列的に「不彌国（前の国）」を出発点と考えると、南を東と読み替えた「畿内説」と、一月を一日とよみかえる「九州説」のように自分の解釈に合わせて原文を読みかえるというようになってきます。

ここで「春秋の筆法」を読み解く読解力が必要になってきます。

そこで東京大学の故榎一雄博士が「伊都国放射状説」を唱えましたが、全面的な賛成には至っていません。

9、「魏志倭人伝」は正確に書かれている

①「伊都国」に滞在

魏使の一行は「帯方郡」を出発しています。帯方郡から「狗耶韓国」迄は、七千里。狗耶韓国から「対馬国」迄が千里、そこから「壱岐国」迄が千里、又「末盧国」迄が千里。計一万里を費やしています。7項②に「航海千里は一日」ですから、帯方郡から末盧国へ到着するまで10日掛かる事になります。そこから五百里かけて「伊都国」へ到着しますが、そこまでは「方角、距離、国名」の順で書かれています。そこから先の「奴国」「不彌国」へは、「方角、国名、距離」へ語順を変えて書かれている意味を読み解かねばなりません。

ここが「春秋の筆法」であり、読者は書き手の意思を読み解かねばなりません。

ただ気まぐれに語順を変えているわけではないのです。

「魏使」は「伊都国」へ到着して「伊都国」に留まっているのです。

次の文から「伊都国」は特別な国だという事が分かります。

a「郡使往来常所駐」（郡使往来し常に駐する所なり）

b「自女王國以北　特置一大率檢察　諸國畏憚之　常治伊都國　於國中有如刺史」

（女王国より以北は、特に一大率を置き、検察する。諸国はこれを畏れ憚っている。（一大率は）常に伊都国に治す。国中における刺史の如きでものである）

c「王遣使　詣京都、帯方郡、諸韓国、及郡使倭国　皆臨津捜露　傳送文書賜遺之物詣女王　不得差錯」

（王が使を遣し、京都、帯方郡、諸韓国、及び郡使が倭国に詣る際、皆が津に臨んで（荷物を）捜露（点検）する。文書や賜遺の物を伝送し女王に詣らすのに差錯（間違える）ことはあってはならない）

以上の文から「魏使」は「伊都国」へ留まっていることが解ります。

「奴国」「不彌国」から「方角、国名、距離」へ語順を変えたのは、その国へは行っていない事を表しているのです。

同様に「方角、国名、（日数）」で書き表されている「投馬国」「邪馬台国」へも行ってない事になります。

②「距離」から「日数」への変更

「伊都国」迄は「方角、距離、国名」の順で記され、「奴国」「不彌国」は「方角、国名、距離」へと語順が変わった理由は、「伊都国」へ留まった後、「奴国」「不彌国」へは訪問していないと推測した事は、「春秋の筆法」が簡潔さを求めて、いちいち説明することを嫌い、語順を変える事により読者が察知する事を期待した手法です。

次の「投馬国」「邪馬台国」では、それにも増して、「距離」から「日数」に変わっている事です。

「方角、国名、距離（日数）」の順ですから、語順は「奴国」「不彌国」と一緒ですから訪問していない事は明らかです。問題は、㋑「距離」が「日数」に変わっている。 ㋺（では）そこからの「日数」が以上に長い ㋩（畿内説では）そこからの「方角」が説明つかない事が問題になっており、それぞれが各々間違い説を述べています。

前で「春秋の筆法」は読解力が必要と書きましたが、や三雲の推測するのではなく必然的にルールがあります。

当たり前の事ですが、「同じ字」は「同じ意味」を持ち、「違う字」は「違う意味」を持ちます。語順が違うという事は当然「違う意味」を持ちます。気分や体裁で勝手に変えている訳ではありません。

併せて文を簡潔にするために「主語や目的語変わる度に、何度も繰り返さないという事を念頭に置いて読まねばなりません。

繰り返しになりますが、「伊都国」迄の語順と、その後の「奴国」「不彌国」での語順が違っているのは、その地を訪れたのか、訪れなかったかの違いでした。

しからば「投馬国」と「邪馬台国」が距離から日数へ変わったのは何故でしょうか。

それは「不彌国」迄の距離起点は、前の国を直列的に引き継いでいますが、「距離」から「日数」に変わった「投馬国」と「邪馬台国」は、前の国を引き継いでいません。「距離」は前の国を起点とし、「日数」は出発地点に置き替えているのです。

すなわち「日数」は「帯方郡」からの日数です。

「投馬国」と「邪馬台国」は「連合国」ですから、必然的に他の単独の国（邑）の領土や戸数も圧倒的に大きいのは当たり前です。

その国を訪問するには、どういう順で訪問するのか（例えば左回りで行くか、右周りで行くかで）方角も距離も全然違ってきます。（現に詳らかにならない国を比定する作業の際でも、人によって違っている）

㋥日数の起点は「帯方郡」

㋭「投馬国」と「邪馬台国」は連合国

㋬「連合国」は領土の大きさ故、距離でなく、日数で表す

を前提にすれば、

㋣「投馬国」は帯方郡から「水行二十日」

ですから、「末盧国」迄の水行十日を除いた、「水行十日」がその範囲となり、「投馬国連合国」は沿岸沿いの「水上国家」という事になります。

㋚「邪馬台国」についても、「水行十日　陸行一月」

ですから、同じく「末盧国」水行十日を除いた「陸行一月」がその範囲となり、「邪馬台国連合国」は「陸上国家」という事になります。

「帯方郡」から見れば、「投馬国」も「邪馬台国」も「東南の方角」に位置し、「魏志倭人伝」は「方角」も「日数」も正確に記してあるのです。

10、「邪馬台国」と「投馬国」

①「邪馬台国」は「甕棺文化圏」

㊀出発地は帯方郡、㊁「邪馬台国」は連合国　㊂「連合国」は日数表記

㋚「陸行一月の陸上国」㋛帯方郡からの方角は東南――とみなせば、「邪馬台国」は「（肥前の一部を含む）筑紫の国」の領域になります。

『魏志倭人伝』に具体的に出てくる国の名は、詳らかになる国、「対馬国」「一大国」「末盧国」「伊都国」「奴国」「不彌国」の6ヶ国と、詳らかにならない国、「斯馬国」「己百支国」「伊那国」「都支国」「弥奴国」「好古都国」「不呼国」「姐奴国」「対蘇国」「蘇奴国」「呼邑国」「華奴蘇奴国」、「鬼国」「為吾国」「鬼怒国」「耶麻国」「射臣国」、「巴里国」、「支維国」、「烏奴国」、「奴国」の21ヶ国の計27ヶ国です。

それに連合国であろうと推定した「投馬国」「邪馬台国」。

それに「女王国」「狗奴国」です。

この27ヶ国プラスαが、『魏志倭人伝』を参考にしたといわれる『後漢書』に、

「今使譯所通三十国許」（許はばかりの意味であり余とは対比して使われている）

としたのも案外この辺を敢えてあやふやにしているのかもしれません。

「狗奴国」を南にし、一部の肥前国を含む筑紫の国の範囲はとは、まさに「甕棺文化圏」そのものです。

「墓制」というのは、古墳時代の「前方後円墳」でも見てとれるように、「国家の象徴」としての制度です。朝鮮半島からの渡来系の人々が伊都国を中心に「支石墓」という墓制を持ってきた後に、北部九州の人々が「甕棺墓」という新しい墓制を作り出し、それを共通の文化として連合国と云う共同体を作り上げていったであろうことは遺跡の流れからも証明出来ます。

『延喜式』で、「筑前国」は「怡土郡」「志摩群」「早良郡」「那賀郡」「席田郡」「糟谷郡」「宗像郡」「遠賀郡」「鞍手郡」「嘉麻郡」「穂波郡」「夜須郡」「下座郡」「上座郡」「三笠郡」の15郡が存在しますが、「遠賀郡」は、考古学的にも「豊前」との関係が深く、「邪馬台国連合国」からは除外し14郡。

「筑後国」は御原郡」「生葉郡」「竹野郡」「山本郡」「御井郡」「三潴郡」「上妻郡」「下妻軍」「山門郡」「御池郡」の10ヶ国が存在します。

これに加えて、「肥前国」は11郡、「佐賀郡」「神埼郡」「基肄郡」「養父郡」「三根郡」「小城郡」「杵島郡」「藤津郡」「松浦郡」「彼杵郡」「高来郡」の11郡の中から、筑紫と縁が深いと思われる（甕棺文化圏）の「佐賀郡」「神埼郡」「基肄郡」「養父郡」「三根郡」「松浦」の6郡を「邪馬台国連合」の国としたいと思います。

その結果、偶然にも「筑紫」14郡、「築後」10郡、「肥前」6郡を合わせると「後漢書」の唱える「今使譯所通三十国許」と同数の30ヶ国となります。

当時の国割と現在（近世）の郡制が必ずしも一致するものではないとは思いますが、「当たらずとも遠からず」の数値ではないかと思います。

②「投馬国」は「豊国」

「邪馬台国」と同じく「投馬国」を連合国家と見た場合、「末盧国」から「水行十日」の所に在る「沿岸国」となります。

帯方郡から東南ですから、「末盧国」から玄界灘を東に行った海岸沿いの陸地が領域となります。その領域は現在（近世）「豊前」と呼ばれています。

「豊前国」は「豊（トヨ）国」ですから、「投馬国」は現在の「豊前」の領域にある連合国家と考えます。

「投馬国」の「馬」と「与」の字は草書体で書くと大変よく似ています。

現在「投馬国」と読まれている国は、元々「投与国」と書かれていたものが、ある段階で誤写されたのではないかと思います。

「馬」の草書体　　「与」の草書体

（「与」と「馬」の草書体は似ている）

「卑弥呼」の後を継いだ「台与」は、筑紫から豊へ拠点を変えてのではなかろうかと考えられていますが「台与」にも「与」の字がついています。

冒頭から『魏志倭人伝』に忠実に読め。書き間違い、写し間違い、嘘説は証明にならないとしつこくいってきましたが、ここだけ唐突に写し間違いというのは筋が通らぬのではないかとおしかりを受けそうですが、実は固有名詞は問題があります。

「日数」や「方角」等は、検証すれば分かりますが、固有名詞（個人の名や役職名、国の名）などは、聞いた人が書く、書いたものを写す際に検証の仕様がありません。

「対馬国」の時に、倭人は「津の島」といったものを、聞く人が「ついのしま」と聞いたために「対馬」となったと推測しましたが、「壱岐国」も「一大国」と書かれているのは「一支」と書かれていたのに、草書体の「支」と「大」が似てるために写し間違えたというのは、大方が納得しているものです。

ここだけ（固有名詞）は、写し間違い説をご容赦ください。

そういう訳で「投馬国」を「豊国」と推定しましたが、「水行十日」は、「玄海灘」、「響灘」、関門海

峡を越えて「周防灘」にまたがる沿岸地域で、延喜式で「豊前国」は（田川郡、企救郡、京都郡、仲津郡、築上郡、上毛郡、下毛郡、宇佐郡）の8国で構成されています。このうち「田川郡」は山合いの町で、海に面していませんし、

景行天皇の熊襲征伐の際の抵抗勢力として「狗奴国」に近い勢力と考え除外します。

『延喜式』では「筑前国」に入る「宗像郡」や「遠賀郡」は、歴史的に素戔嗚や大国主の出雲勢力とつながりが強く、「邪馬台国」の「甕棺文化圏」とも一線を画しており、「投馬国」との繋がりが強いのかな？とは思っています。

周防灘を挟んだ対岸の「長門国」「周防国」瀬戸内側の地方は、言語（方言）に関して、「しちょる」「やっちょる」「見ちょる」等の現在進行を表す時の表現方法はイントネーションも含めて、北九州地方と強い共通性が見られます。

『延喜式』でいう「長門国」は（阿武郡、見島郡、大津郡、 美祢郡 、厚狭郡、豊浦郡）の6国、「周防国」は（大島郡、熊毛郡、玖珂郡、都濃郡、佐波郡、吉敷郡）の6国で構成されていますが、下関市（豊浦郡）、宇部・小野田市（厚狭郡）、防府市（佐波郡は地勢的、経済的、政治的にも北九州地方とつながりが深く、古代では景行天皇が熊襲討伐の際、陣を敷いたのは娑麼（現防府市）で、仲哀天皇は豊浦宮（現下関市）です。

特に豊浦郡は明治22年町村制施行の際、郡内のほとんどの村に「豊」の字がついている「豊の国」の主みたいなところです。

（豊東村、豊東郷村、豊東前村、長府村（豊浦村、豊浦町） 豊東上村、豊東下村、豊西下村、豊西中村、豊西上村、豊西村、豊西東村、豊田上村、豊田中村、豊田奥村、豊田下村、豊田前村）平成17年（2005年）に「旧下関市」と「菊川町・豊田町・豊浦町・豊北町」が合併して「新下関市」が発足し、「豊浦郡」は消滅しました。

「豊前国」7ヶ国＋α（長門国）が「投馬国」の範囲と見ています。

また仲哀天皇（神功皇后）が熊襲征伐に出向いた際、地元の「熊鰐」がいち早く娑麼の港まで出向いて恭順の意を表し、自分の陣地である、「穴門（長門）」から「宇佐」までを東の境にし、西は「名護屋大済（現戸畑）」までを献上したとの話がありますが、この範囲が「投馬国」の範囲であった事は想像がつきます。

③「邪馬台国」、「陸行一月」の正体

㋑「陸行一月」を読み解く

「投馬国」は「直線的に沿岸地帯を巡邏する」ので比較的理解がし易いと思いますが、「邪馬台国」の場合は、「南へ陸行一月」となると、一月も南に歩き続けると海の外にまで行ってしまうという思考になってしまいます。

そこで、この問題を解決するために、九州説は「一月を一日に読み替え」、畿内説は「南を東に読み替え」て、自説の正当性を主張してきました。

しかし中國王朝の正史24書に数えられ、名著であると称えられた『三国志』が、読みようにとってはどうにでも取れるような曖昧な表現で書かれているのを、読む側も許したのでしょうか？。

当時の中国人は、この文章が何を意味しているのかは、はっきり分かったのだと思います。

その背景が解っていないと、「一月は一日だ」とか「南は東だ」とか、「季節によって太陽の昇る位置が変わるので方角を修正せねばならない」という風に思考し、「原文が間違っている」とか「写し間違えた」とか究極は「嘘を書いた」とか、結局は九州説も畿内説も,結論は違っていても「自分が正しくて原文（陳寿）が間違っている」という点だけは一致しています。

前にも述べたように「春秋の筆法」には「しきたり（規則、取り決め）」があり、その「しきたり」を理解していることが前提です。「書く側も読む側も」相応の力が必要なのです。そのしきたりは、冒頭に述べた

a 同類語の微妙な意味の違い（「従と自」「度と渡」「至と到」「有と可」「余と許」「家と戸」）

b語順の配置の違い（「方角、距離、国名」、「方角、国名、距離（日数）」）

c 主語を省く（起点を変える時）

（繰り返す言葉を使わない＝語順の変更で知らせる＝起点（出発地）の変更）

であったりします。

㊐「邪馬台国」を巡邏する

先ほどから述べてるように、「邪馬台国」は連合国ですから、その中にいろんな　国や邑が内在しています。「邪馬台国へ行く」という事は、「それらの国へ行く」という事になります。

「その巡邏に要する日数が一月かかる」という事です。

単独の国なら「方角、距離、国名」で表せるけど、広い領土を持つ連合国をわざわざ「方角、国名、日数」と語順を変えて表現したのです。

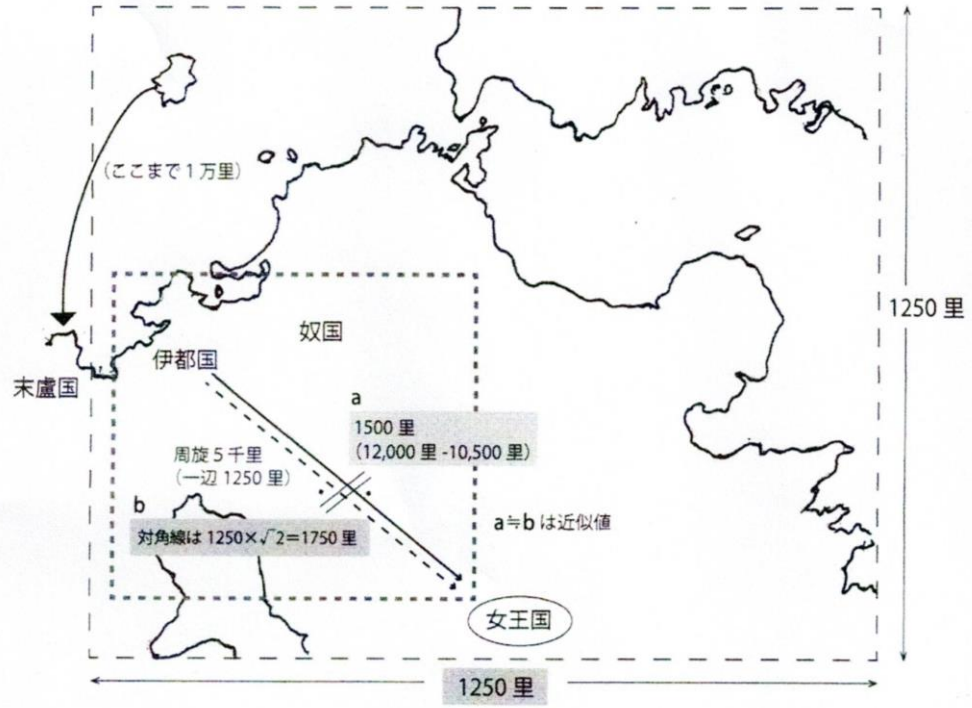


図３　「女王国」の場所

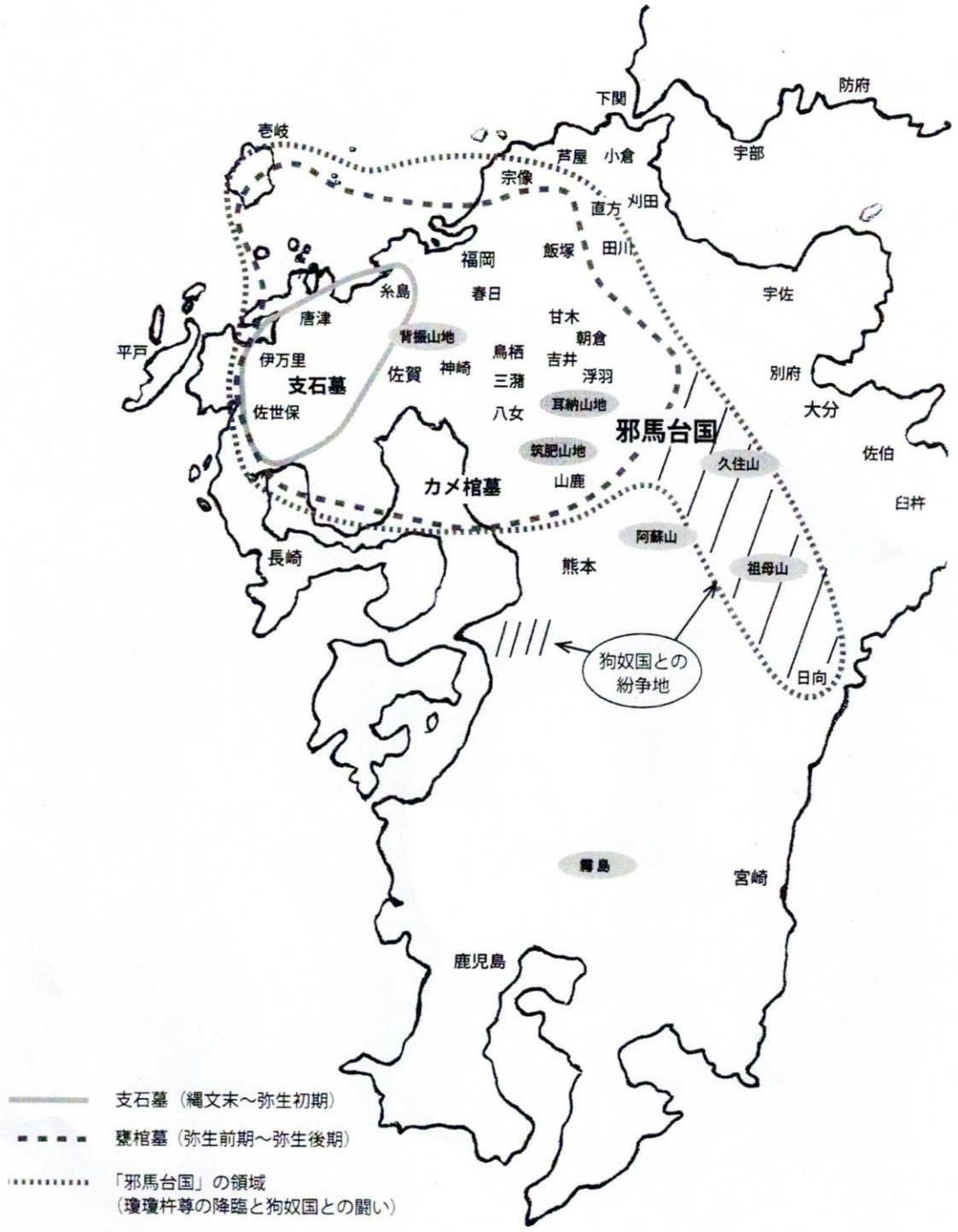
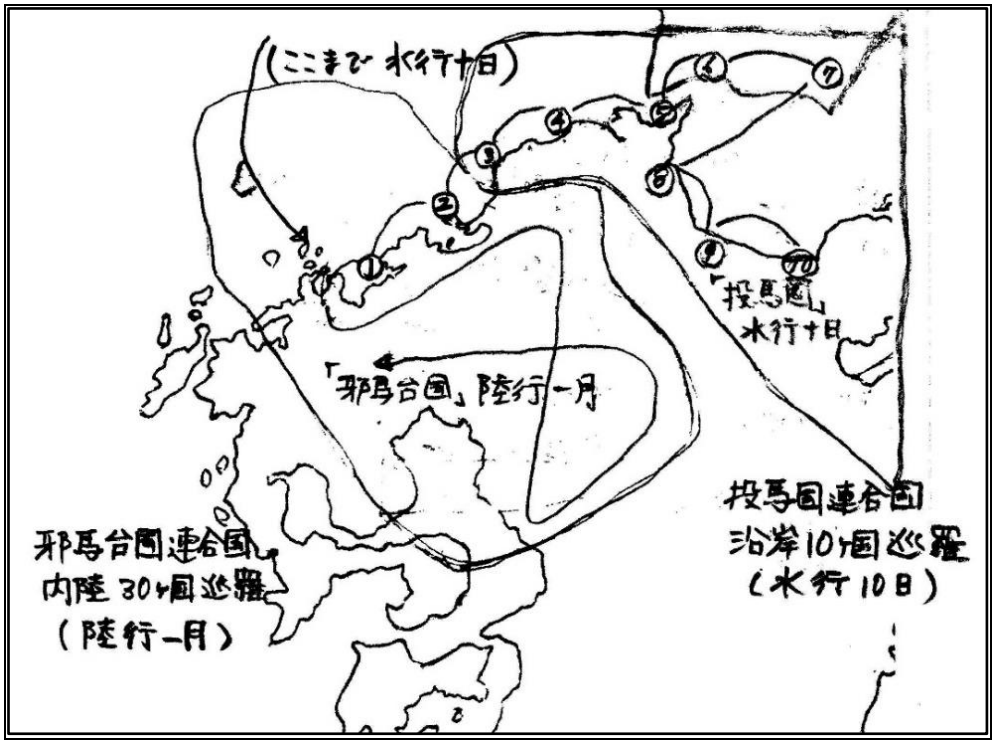


図４　「邪馬台国の墓制変遷」と文化圏

（図05 「陸行一月」と「水行十日」）



11「邪馬台国」と「女王国」

① 「魏」から見た「倭」

「倭人在帯方東南大海之中　依山島為國邑　舊百餘國　漢時有朝見者　今使譯所通三十國」

（「倭」「倭種」「倭国」「邪馬台国」）

a「倭」とは、「帯方郡の東南の大海に在り」

b「倭種」とは「その山や島に依って住む人々」

c「倭国」とは「昔は百余国あった」「漢の時代に朝貢してくる者があり」

d「邪馬台国」とは「現在通訳を通して言葉が通じる所が30ヶ国在る」

② 「邪馬台国」と「女王国」

『魏志倭人伝』の中で、「邪馬台国」書かれている箇所は一回しか出てきません。

「南至　邪馬台国　女王之所都　水行十日陸行一月……可七万余戸」

不彌国を説明した後です。

なぜ姿を消しているのでしょうか？

これと似たような現象は我々現代の社会でもあるのです。

例えば知らない街へ車で旅に出たとします。

今でこそ、旅行案内のパンフレットやインターネット、車ではナビが丁寧に教えてくれますが、一昔前までは道路標識に頼って運転をしていました。

福岡に行きたければ「福岡○○Km」と書かれた道路標識を目安に、もう少しだとかもうそろそろ

だとか心の準備をして行きます。

しかしいよいよその地に入った途端「福岡」という標識が消え失せてしまうのです。

「博多駅」だとか「県庁」だとか「天神」だとか、施設や町名が出てくるようになります。俺は福岡に行きたいんだけど！と、通りすがりの人に「福岡はどこですか？」と尋ねると、「福岡のどこですか？」と尋ね返される始末です。

翻って、外国人が日本の文化にあこがれて「日本へ行こう」と思い立ち、羽田に着いたとします。羽田について「日本はどこですか？」と尋ねれば、優しい人は「日本のどこですか？」と聞き返してくれるでしょうが、普通の人なら相手にしてくれないでしょう。

「邪馬台国」と「女王国」の関係は、この「日本」と「東京」のような関係ではなかったのでしょうか。外から見れば「日本」だけど、中に入ってみれば「東京」.同じく総称は「邪馬台国」だけど、中に入ってみれば「女王国」に名前を変えてしまっている。先ほどから述べているように、これが実態だったと思います。

「邪馬台国」とは、人口七万余戸を抱える連合国家としての総称であり、女王の住んでいる場所「女王国」とは違っているのです。

これが『魏志倭人伝』中で「邪馬台国」が一度しか出てこない理由です。

「邪馬台国」は外から見た場合の総称で、個別の国の連合体です。この現象が、逆に「邪馬台国」が連合国家であることの証明している事でもあるのです。

③ 「女王国」の場所

「邪馬台国」が連合国とした場合、単独の「女王国」はどこに在るのでしょうか？

『魏志倭人伝』には、

a「自郡至女王国　萬二千余里」（帯方郡より女王国に至るには一万二千余里）

b「参問倭地……周旋五千余里」（倭地を問い答えると、周囲を回ると五千余里）

と二つの数値が日数ではなく距離で記されています。

「女王国」の場所を逆算すると帯方郡から女王国まで12000余里ですが。

帯方郡から狗耶韓国までの7000余里。狗耶韓国から末盧国までの3000余里、末盧国より伊都国迄500里とここまで、計10500余里かかっています。（私案では奴国100里、不彌国100里は訪問していないので含めない）故に、

a「伊都国から女王国迄の距離」は1500里未満という事になります。一方で、

b「参問倭地・・・周旋可五千余里」とあるので、「倭地」を四角形と仮定すれば、一辺が1250里の土地という事が判明します。

一辺が1250里の対角線は、1250×√2ですから1750里になります。

「魏使」が滞在した場所で、女王国への起点である伊都国をこの四角形の頂点とすれば、「女王国」は最大でも1750里以内に存在する事になります。いみじくも上記、

(a)「女王国」への距離

(b)「倭地」の形状

と異なる測定からしめされた数値が一致（近似値）することは、お互いに裏付け合う結果となり信

頼性の高い記述であるといえます。

④ 「倭種」

『魏志倭人伝』に、「女王国東渡海千余里　復有国　皆倭種」とあります。

『後漢書』では「自女王国東度海千余里　至狗奴国　皆倭種」と記述されていますが、狗奴国は邪馬台国の東の海を越えたところではなく南ですので、范曄（著者）の勘違いであろうと思われます。

海を渡って千里の国は「出雲国」でしょう。南で敵対している「狗奴国」も含め倭地（列島の認識できる範囲）は全て倭人と想定しています。

（地図06 「倭種」）

12、中国における倭人関連の史料

わが国で有名な『三国志』の『魏志倭人伝』以外の史料はほかにもあります。

歴史的な順序を踏まえ、文献を当たってみたいと思います。

①「山海経」（第12　海内北経）

「蓋国在鋸燕南　倭北　倭属燕」（蓋国は鋸燕の南で倭の北にあり、倭は燕に属す）

（倭は朝鮮半島南部にあるとの認識です）

②「論衡」（選者　王充　AD27～97年）

「周時天下泰平　倭人来　献暢草」（異虚篇18）

（周の時天下泰平　倭人来りて　暢草を献ず）

「成王時　越裳献雉　倭人献暢」（恢国篇58）

（成王の時　越裳は雉を献じ　倭人は暢を献ず）

「周時天下泰平越裳献白雉　倭人貢暢草　食白雉服暢草　不能除凶」（儒僧編26）

（周の時天下泰平　越裳は白雉を献じ　倭人は暢草を貢ぐ　白雉を食し　暢草を服すれども　凶を除くを能わず）（倭人は暢草を献じたことが記されています）

③「漢書　地理志」（選者　班固　AD32～92年）
「前漢「然東夷天性柔順、異於三方之外、故孔子悼道不行、設浮於海、欲居九夷、有以也夫。樂浪海中有倭人　分爲百餘國　以時歳時來獻見云」
（然して東夷の天性柔順、三方の外に異なる。故に孔子、道の行われざるを悼み、もし海に浮かば,,九夷に居らんと欲す。故あるかな。楽浪海中に　倭人あり、 分かち百余国と為し、 歳時をもつて来たりて献見すると云う。）
（孔子の言葉に東夷（倭人）が礼を知っているといったことが記されている）
④「後漢書」（選者　范曄 AD398～445）（但し漢書の成立は三国志よりも新しい）
「建武中元二年　倭奴國奉貢朝賀　使人自稱大夫　倭國之極南界也　光武賜以印綬」
（建武中元二年（57 年）、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。奴国は倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てなす）
（光武帝より金印を授けられたことが記されている）
「安帝永初元年　倭國王帥升等獻生口百六十人　願請見」
（安帝、永初元年（107 年）倭国王帥升等、生口 160 人を献じ、請見を願う）
「倭在韓東南大海中、依山嶋爲居、凡百餘國。自武帝滅朝鮮、使驛通於漢者三十許國、國皆稱王、世世傳統。其大倭王居邪馬臺國」
（倭国は韓の東南の大海の中にある。山や島に依って住む。おおよそ百余国で
ある。武帝が朝鮮を滅ぼしてから、漢と言葉が通じる国が三十ヶ国ばかりある。国はみな王と称し、代々継がれている。その大倭王は　邪馬台国にいる）
「桓　霊間　倭国大乱　更相攻伐　暦年無主　有一女子　名日卑弥呼
年長不嫁　事鬼神道能以惑衆　於是共立為王」（東夷列伝85－75）
（桓帝・霊帝の治世の間（146 年 － 189 年）、倭国は大いに乱れ、さらに互いに攻め合い、何年も主がいなかった。卑弥呼という名の一人の女子が有り、年長だが嫁いでいなかった。鬼神道を用いてよく衆を妖しく惑わした。ここに於いて共に王に立てた）
⑤「宋書　倭国伝」(選者　沈約 AD441～513年)
　倭王　武の上表文　（讃、珍、済、興、武の時代）
「自昔祖禰　躬擐甲冑　跋渉山川　不遑寧處　東征毛人五十国　西服衆夷六十六国渡平海北九十五国」
（昔から祖禰（そでい）躬（みずか）ら甲冑を環（つらぬ）き、山川を跋渉し、寧處（ねいしょ）に遑（いとま）あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服する事六十六国。渡りて海北を平らぐること九十五国）
「詔除　武使持節　都督倭　新羅　任那　加羅　秦韓　慕韓　六国諸軍事・安東大将軍・倭王」
（倭王武は478年に宋の順帝に上表文を送り、上記「武使持節倭王」の称号を得る）（これ以前が空白の4世紀と呼ばれる、国交断絶の時代）
⑥「隋書」（魏徴 AD580～643年）、長孫無忌（　～659年）」
「倭国在百済・新羅東南　水陸三千里、於大海之中依山島而居、魏時、譯通中国。三十余国皆自

称王。夷人不知里敷、但計以日。其国境東西五月行　南北三月行、・・・謂之倭奴国…」
（「韓」から「倭国」本土（末盧）まで三千里（魏志倭人伝の記述と同一。

「倭国」の領土は東西五月行、南北三月行と「魏志倭人伝」時代の、「邪馬台国」の陸行一月や「投馬国」の水行十日の領土に比べるとはるかに広がっており、畿内の「大和朝廷」として盤石な基盤を整えたことが窺えます。

図７　東西五月行　南北三月行

⑦『旧唐書』倭国伝（劉昫 AD887～946年）

「倭国者古倭奴国也　去京師一万四千里　在新羅東南大海中　依山島而居　東西五月行　南北三月行…」（倭国は、いにしえの倭の奴国である。唐の都長安より一万四千里の所にある。新羅の南の大海の中にあり山や島に居住する。東西は五ヶ月、南北は三ヶ月かかる）

（魏の時代との差二千里は、都が洛陽から長安へ代わったためと考えられます）

「日本国者倭国之別種也。以其国在日辺　故以日本為名。或日倭国自悪其名不雅、改為日本。或云　日本旧小国、併倭国之地……又云其国界東西南北各敷数千里、西界・南界或至大海、東界・北界有大山為限。山外即毛人之国」

（日本国は倭国の別種也。其の国日の当たるのを以て　故に日本を以て名を成す。倭国自らその名の雅ならざるを悪みて、改めて日本と成す。或いは曰く、日本旧くは小国なれども　倭国の地を併せたり、西・南は大海に至り、東・北は大山があって限りを成す。山外は毛人の国なり）

（倭国が日本へと改名したと書かれてあり、或いは日本国が、倭国を併合したと記されている）

⑧『新唐書』日本伝（欧陽脩 AD1007～1072年）
（旧唐書では、倭国と日本が並立した状態で書かれているが、新唐書では「日本伝」として、まとめられている。
「日本　古倭奴也。・・・・其王姓　阿毎氏　自言初主号　天御中主……居筑紫城。神武立、更以天皇為号、従治大和州…」
（日本は、いにしえの倭の奴国である。其の王の名は「阿毎氏」といい、初代は「天御中主」という。…筑紫城に居た。神武立って天皇と号し、大和の州を治める。…）
もともと倭国は、奴国（九州）で、筑紫城に居た。ここから神武東遷し、大和を治めたと記してある。これらの記事は『魏志倭人伝』と比較して読むことにより、「邪馬台国」を解釈するうえで、大きな参考となります。

13 まとめ

以上述べてきたことを、重複しますがまとめてみると、
①「帯方郡」から「邪馬台国」までの距離は萬二千里である。
②「帯方郡」から「伊都国」までの距離は萬五百余里である。
③「伊都国」から「邪馬台国」までの距離は、萬二千里から満五百余里を差し引いた、千五百里未満である。
④直線で千五百里未満の距離は、「周旋可五千里」の地図の概念と一致する。
⑤出発地は「帯方郡」であり、特定がない場合は、距離や日数の基準は「帯方郡」からとなる。
⑥「帯方郡」から「末盧国」（倭国の本土）までの日数は「水行十日」である。
⑦女王に従う「倭国」とは「邪馬台国連合国」21国プラス6国（対馬、一大、末盧、伊都、奴、不彌）と「投馬国」である。これを「邪馬台国同盟国」とみる。
⑧「邪馬台国」と「投馬国」の日数は、それぞれが連合国家である故、其の国を巡邏する旅程を記している。
故に、「邪馬台国」の「水行十日、陸行一月」は、「帯方郡」から「末盧国」までの、「水行十日」を差し引いた「陸行一月」であり、同様に「投馬国」の「水行二十日」とは「水行十日で国を巡邏する旅程である。
⑨当時の近隣諸国と比較すると、国家形態や大きさ、人口が「邪馬台国」を連合国家として捉えた方が妥当である。
⑩女王国の境は「第2の奴国」であり、南は「狗奴国」と接しており戦闘状態にある。
⑪東の海を渡って、千余里（以東）の所にも国があり、それも倭人である。
（東の海とは、関門海峡か瀬戸内海。出雲の国の事か）
⑫後の中国の史料では、畿内の大和王朝は「日本」と名乗っており、筑紫城に居た「倭の奴国」の後裔としている。
⑬中国の他の史料と突き合せて読むことによって、3世紀以前の邪馬台国は「倭国」 であり、空白の4世紀以降は日本と名前を変えており、近畿に拠点を置く大和朝廷となっている事が窺える。

以上、推論の組み立てにより「邪馬台国」は連合国として、九州の北部、律令時代の国の区分によるといわゆる「筑紫の国」にあり、「豊の国」の「投馬国」と同盟関係にあり、「倭人の国」を形成していた。そして「魏」からは、その周辺国家も、倭種であることには変わりないと認識されていた。

14、最後に

「邪馬台国」が連合国家なら、それでいいとしても、それでは卑弥呼はどこにいたか？という問題は残ります。残念ながら、『魏志倭人伝』にはこれ以上の具体的事実は記載されていないため、不明としか言い様がありません。「記紀」の編者も「卑弥呼は神功皇后ではないか？」と疑っているように他の文献との比較、そして考古学による遺物との整合性を絡めた研究が必要でしょう。

しかし、卑弥呼がどこにいたかは大きな問題ではないように思います。「邪馬台国」が連合国として特定されると、その後の神武東遷、出雲の国譲り、倭国から日本への変遷等、日本の建国の歴史がすっきりと見えてくるでしょう。

本論文を細かく見れば、自分でも気づく矛盾点もあります。しかし、あまりに細部を突き詰めていくと、冒頭に述べたように、釣り糸の縺れをほぐすために、無理やり引張ったり、穴をくぐらせて、却って難しくする事にもなりかねません。大きな観点と、大きな流れを把握しつつ、常識的判断で考える事が必要だと思います。

今後、もっと推敲を重ねていかなければならないことを自覚しつつ、一考察と致します。

（以下、次号へつづく）

愛川 順一（あいかわ じゅんいち）

昭和二十二年生。四十五年、電機メーカーに入社後、山陽・山陰地区にて従事。現在、福岡市在住。

古代史マニアのひまつぶし
第１回　古代朱のベンガラを作る鉄バクテリア

徳永　隆司

１．はじめに

日本で使用されてきた古代朱として、ベンガラ（酸化第二鉄、Fe_2O_3、弁柄、写真２）、水銀朱（硫化第二水銀、ＨｇＳ、写真３）及び鉛丹（四酸化三鉛、Pb_3O_4、写真４）があり、ベンガラが最も古く縄文早期から利用されている。ついで、水銀朱が縄文後期後半から用いられている。また、例数は少ないが、鉛丹も利用されている。

ベンガラは写真２にあるように、やや黒っぽい紅色であり、日本全土の至る所から採掘できる。一方、水銀朱の採掘地は限られており、中国産も多く、写真３のように鮮やかな深紅色をしている。鉛丹の使用例は少なく、写真４のように、オレンジがかった紅色をしている。利用例はベンガラが最も多く使用されており、水銀朱の使用例はベンガラの 10～20%である。また、ベンガラは縄文時代の晩期には、調製された粒子状ベンガラが流通の対象になっている。場所によってはベンガラと水銀朱の両者が利用されている遺跡もある。

この報告では、土壌に大量に常在する鉄を利用し、最も古くから使用されてきたベンガラについて、特に鉄バクテリアの働きについて報告する。

写真１．彩色土器、古墳

写真２．ベンガラ

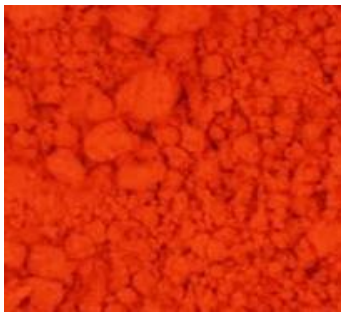


写真３．水銀朱

写真４．　鉛丹

２.水銀朱

水銀朱については、3000～4000 年前の縄文時代後期の遺跡である徳島県阿南市の加茂宮ノ前遺跡が水銀朱の生産拠点であったことが報告されている。ここからは水銀朱が塗られた土器や土製の耳飾りが発掘されている。

魏志倭人伝には「出真珠青玉　其山有丹」という記述があり「其の山から丹がとれる」ことが記載されている。丹は水銀朱のことと思われる。水銀朱は「丹、に」とも呼ばれ、「丹生、にう」とは水銀朱を産する場所であり、その地名は日本の数箇所にある。

また、倭国時代の生産地として次の場所が報告されており、邪馬台国の比定論争のひとつともなっている。

① 大和水銀鉱床群（伊勢から紀の川河口）
② 阿波水銀鉱床群（阿波の吉野川沿い）
③ 九州南部水銀鉱床群（大分市坂ノ市から姶良郡溝部町丹生）
④ 九州西部水銀鉱床群（佐賀県多良岳から嬉野町）

中国から手にいれた水銀朱も２～４世紀に多く使用されており、北九州市の弥生時代終末期の城野遺跡では石棺の朱が中国の貴州省産であることが報告されている。

３．ベンガラ

古くから利用されてきたベンガラによる土器への赤色彩色例としては、縄文時代の早期（9500 年前）の鹿児島県上野原遺跡や縄文前期（5500 年前）の青森県三内丸山遺跡がある。その後、現代まで「岩絵の具」として頻繁に使用されてきた。

写真５．赤鉄鉱

ベンガラの製法としては、鉱物の赤鉄鉱（写真５）や褐鉄鉱（写真６）を原料とする場合と鉄バクテリアが作った酸化鉄（水路や沼地に溜まった黄褐色の沈殿）を原料とする二つの方法がある。化学的にはいずれも酸化鉄（Fe_2O_3）であり、自然界に常在する鉄バクテリアの代謝物である酸化鉄の方が、手に入りやすいことから、それらを利用した場合が多かったと思われる。

写真６．褐鉄鉱

ベンガラの製法は赤鉄鉱や褐鉄鉱の場合は砕いて、①柔らかな部分をすりつぶす、②水に溶かして大粒の粒子やゴミ、屑などを沈殿させて除去する（水簸）、③煮沸または天日干しで水分を飛ばす、④容器に入れて焼く、の工程であり、鉄バクテリアが作った酸化鉄を利用する場合は③、④の工程のみであったと考えられる。

焼成温度と色相は次のようになる。

１．600～700℃　黄色みを帯びた赤
２．700～800℃　赤みが強くなる
３．800℃以上　　深紅色

縄文時代の土器の野焼きの温度は約 600℃であり、時代が進んで、須恵器の焼成温度は1100～1200℃なので、古墳時代前期になるとの深紅色のベンガラを作製できたと考えられる。ベンガラの色にはケイ酸(SiO_2)などの不純物の量も影響しており、時代と産地によって色相が異なっている。

ベンガラの利用方法は焼成後の土器に顔料として塗布する他、粉末にしたものを表面に練りこみ、それから焼成して赤色に発色させた場合があった。

３.１　ベンガラの原料となる鉄

鉄の土壌での含有量は表１のようになっており、ベンガラの原料は水銀朱や鉛丹の原料に比べて極めて多量に存在している。頁岩で比較すると、土壌 1kg 当たり鉄が４万７千 mg 含まれるに対し鉛は 2300 分の１の 20mg、水銀は約 12 万分の１の 0.4mg であり、これからも水銀朱の貴重性が分かる。

表１．土壌の鉄、鉛、水銀の含有量

	頁岩	砂岩	火成岩
鉄	47200	9800	56300
鉛	20	7	12
水銀	0.4	0.03	0.08

（単位は mg/Kg）

このように鉄を多く含む土壌に降雨があると、地下水や土壌浸出水に鉄がイオン（二価）として溶け出てくる。自然界の水辺には、この鉄イオンを酸化（二価から三価へ）してエネルギーを獲得する鉄バクテリアが生息しており、その代謝産物として、ベンガラの原料となる黄褐色の酸化鉄（Fe_2O_3）を生成する。

３．２　鉄バクテリア

著者はダム、水路などのコンクリート構造物からの漏水問題や黄褐色の沈殿物による景観の悪化問題から鉄バクテリアの同定を長年に渡り実施してきた。検体は九州全域から採取され、結果を記録に留めている件数は 24 例である。鉄バクテリアは、ほぼ３種(①Leptothrix レプトスリックス　７例、②Gallionella　ガリオネラ５例、③Siderococcus シデロコッカス４例)に分類できた。その他は Sideromonas シデロモナスが１例、観察されただけで、残り７例は同定できなかった。硫酸第一鉄の培地を用いて、土壌から鉄バクテリアを

集積培養した結果では、シデロコッカスが培養できた。

① Leptothrix レプトスリックス

この種は田や沼地などのたまり水に多く認められ、写真７に示すように金属光沢色で「油膜」と見間違える状況を呈する。これはパイプ状の代謝産物が表面を覆うことから生じる現象である。代謝物は写真８（普通顕微鏡)、写真９（電子顕微鏡）のように筒状の糸状体を形成している。

写真７．沼地のレプトスリックス

レプトスリックス由来の黄褐色の沈殿物を沼地などから採取し、精製、焼成して作製したものがベンガラの代表である「パイプ状ベンガラ」である。

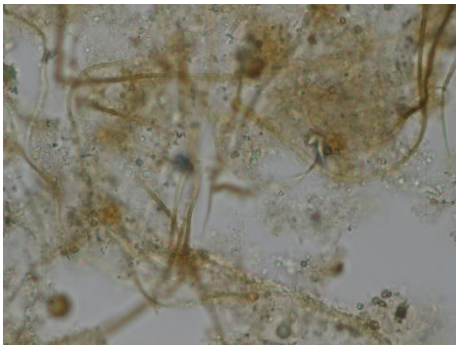


写真８．田から採取したレプトスリックス

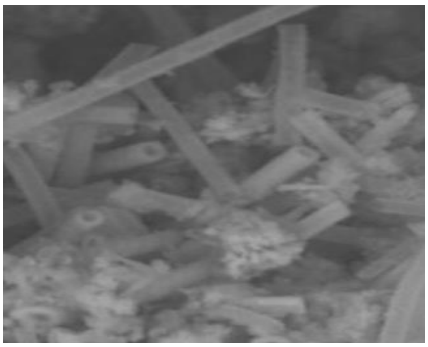


写真９．パイプ状ベンガラの電顕写真

② Gallionella ガリオネラ

この種は地下水や伏流水で多く見られ、写真１０．のように、黄褐色の沈殿物を伴って浸出する。

この沈殿物を顕微鏡で観察すると、写真１１．に示すように、ねじったような形または２本の紐をより合わせた形状を持つ鉄バクテリアが観察される。ベンガラの文献の中では「リボン状ベンガラ」として記述されている。

写真１０．酸化鉄の浸出

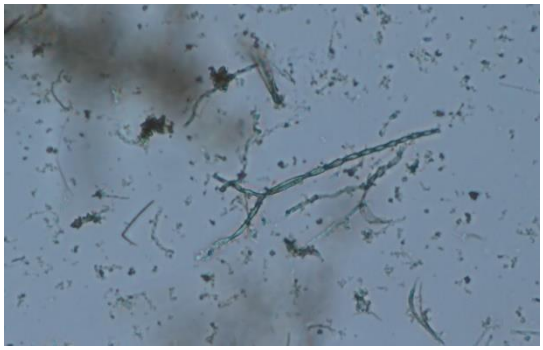


写真１１．ガリオネラ

③ Siderococcus シデロコッカス

シデロコッカスは地下水の浸出場所や湖沼の底泥に分布し、底質表面に黄褐色の層をなして大量に繁殖する。また、導水路の浸出水がある壁面に繁殖し、黄褐色の沈殿物を作る。

写真１２．にシデロコッカスの顕微鏡写真を示す。写真は 400 倍なので、確認が難しいが、小さく透明の球菌がシデロコッカスであり、写真の黒い部分は酸化鉄である。

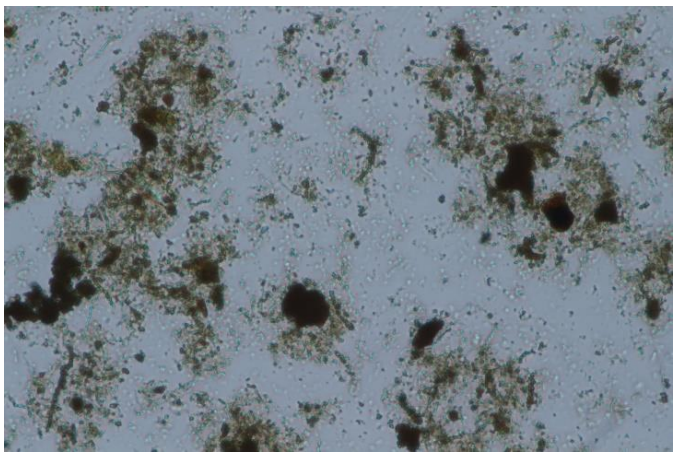


写真１２．シデロコッカス

３.３　鉄バクテリアのまとめ

地下水や浸出水中に溶け出してきた鉄イオンは主に３種の鉄バクテリアによって黄褐色の沈殿となって底泥に溜まる。鉄バクテリアがいない自然界においても、透明で、溶けている鉄イオンは空気中の酸素で酸化され、白いモヤモヤの水酸化鉄から、さらに黄褐色の酸化鉄となる。しかし、その反応速度は遅く、流水中で黄褐色の沈殿を生成し、蓄積することは困難である。

一方、鉄バクテリアが持つ鉄酸化酵素であれば、鉄イオンを水中から補足し、容易に代謝物の黄褐色の鉄の沈殿を作ることができる。その反応速度は自然沈殿の数十倍から数百倍の速さである。また、古代のベンガラの材料とされる赤鉄鉱や褐鉄鉱は柔らかい岩石であることが報告されている。これらの岩石を含めて、鉄バクテリアの代謝物（黄褐色の沈殿）がベンガラの原材料になったと考えられる。

文　献

１）内山伸明ら：赤色顔料の原料採取地を求めて，縄文の森から，５, 47―54 (2012).

２）上條朝宏：縄文時代から古墳時代の赤色顔料について，色材, 77(2), 86－90 (2004).

３）鶴田栄一：「魏志倭人伝」と色料（顔料・染料），色材, 75(7), 330－341 (2002).

４）李　素妍：赤色顔料のパイプ状ベンガラにおける微生物の影響,
J.Jpn.Soc.Powder Power Metallurgy, 65(5), 233―239 (2018).

５）南　武志：遺跡出土朱の起源，地学雑誌, 117(5), 948―952 (2008).

６）児玉大成：亀ヶ岡文化を中心としたベンガラ生産の復元，日本考古学，20, 25―45 (2005).

７）H.J.M.Bowen: Trace Elements in Biochemistry, ACADEMIC PRESS (1966).

徳永　隆司（とくなが　たかし）
1947 年　福岡市生まれ　福岡市在住
現在　（株）ENJEC　技術顧問
　　工学博士　　技術士（水質管理部門）
趣味　テニス　陶芸　家庭菜園　古代史
菜園が吉武・高木遺跡（日本で最初に一つの木棺墓から剣、鏡、勾玉がみつかった）の近くであったことから、古代史に興味を抱き、10 年近く古代史の講義を受講している。

第 14 回　吉備の古代史シリーズ
吉備と出雲＜上＞銅鐸文化　「大国主命の祭祀受け入れる」

NPO 法人福岡歴史研究会理事　石合　六郎

＜はじめに＞

吉備と出雲は古代からいくつもの街道で結ばれている。文化も物もこの道で運ばれた。古代のわが国の文化の“光”は北部九州から東へ向かった。出雲から越へ。この文化の流れについて、吉備の古代史シリーズの「卑弥呼の剣と楯築の王」で「筑紫から出雲を経て、吉備へと分岐する日本海ルートもあった。もちろん地理的に瀬戸内経由の流れも併存したが、主流ではなかった」との考えを述べた。今回はその結論を深化させたいと考えている。すなわち大国主命と吉備のかかわりを考えてみたい。

安本美典氏は銅鐸については大国主命の祭祀の道具との見解を述べている。筆者もその意見に賛同を表したい。吉備の立場から論じてみよう。

＜1＞大国主命を祀る神社

岡山県神社誌から岡山県内の神社のうち大国主命を祀るものを抽出してみた。吉備全体では大国主命を祀る神社は１９７社であった。これは同神社誌に掲載されている神社 1、616 社の 12 パーセントをしめる。他県と比べるデータがないので多いとか少ないとは言えないが、美作国の 22%は 5 社に 1 社以上なので多いのであろう。

播磨国風土記には大国主命の伝承は、数多く記録されている。（註 1）

しかし、大国主命が播磨の国に向かうには出雲―伯耆―美作―播磨を通ると考えられがちだ。ところがそのルートには伝承がない。

美作市の鷺神社の池田弥寿江宮司は、「大国主命が播磨へ行くには志戸坂峠を越え、英田郡の北の方（岡山県の角）を通っている。大国主命のお話にも白兎神社が出ているじゃないですか」。地図を見ると一目瞭然だ。

大国主命を祀る神社が、英北支部（西粟倉村と美作市の一部＝旧東粟倉村と旧大原町）では、８６パーセントを占める。祀る神社が多いことが、大国主命の来

訪ルートに関わる保証はないが、一つの傍証かもしれない。

岡山県の神社うち大国主命を祀る神社数				
備前国	岡山支部	10	89	11.24%
	玉野支部	0	28	0.00%
	児島支部	3	36	8.33%
	御津南支部	3	41	7.32%
	御津北支部	5	29	17.24%
	御津東支部	3	33	9.09%
	赤磐市部	13	113	11.50%
	和気・備前市部	2	59	3.39%
	邑久・西大寺支部	5	75	6.67%
	上道・西大寺支部	1	27	3.70%
備前国合計		45	530	8.49%
備中國	倉敷支部	7	56	13%
	玉島支部	8	24	33%
	都窪支部	1	37	3%
	浅口市部	5	88	6%
	笠岡市部	1	60	2%
	小田支部	2	45	4%
	井原・後月支部	1	60	2%
	吉備支部	12	71	17%
	高梁・上房支部	6	72	8%
	川上支部	6	57	11%
	阿新支部	16	128	13%
備中国合計		65	698	9%
美作国	津山支部	30	102	29.41%
	真庭市部	20	99	20%
	勝田市部	10	56	18%
	英田支部	6	43	14%
	英北支部	12	14	86%
	久米支部	9	74	12%
美作国計		87	388	22%
三国計		197	1616	12%

（岡山県神社誌から）

それらの神社にも直接的な伝承はないが、隣接の英田支部（旧勝田郡勝田町、旧英田郡美作町・作東町・英田町・東粟倉村）の旧美作町には、美作三湯の一つ「湯郷温泉」の発祥に関わる伝承をもつ神社が二つある。

一つは、美作市位田の鷺神社で「当社は神武の頃『鷺の森明神宮』として勧請された。往古、神の森より足を病んだ白鷺が、昼は沢田にたたずみ、夜は神の森に立ち帰った。郷人が白鷺のたたずむ跡にいってみれば、地中より薬湯がわきで

静かにたたずむ鷺神社

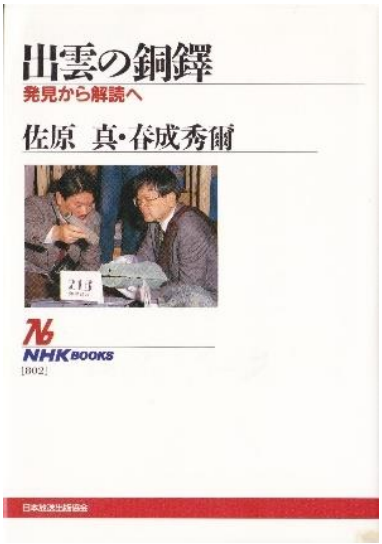
ており、郷人は温泉場となし塩湯郷と称した。

諸人、入浴を試み始めた頃より白鷺が姿をみせなくなったので、これは神の森の祭神である少彦名命が白鷺を使わして薬湯を人々に知らしめたとして霊験を感じ、以降鷺の森明神と称され尊崇された。」（岡山県神社庁ホームページ、神社検索による）という。

一方、同市湯郷６６４の湯神社では「当社は往古、大己貴命・少彦名命を祭神に奉り御湯神と称したが、８世紀当初（和銅８年頃）律令制の国・郡・里（後に郷）制により美作国が置かれ、地名は『塩湯郷』に、御湯神も『塩湯社』となった。」（同）となっている。伝承としては鷺神社の方が古そうである。

どちらの神社も大国主命の来訪はもちろん、関係性も具体的に述べていない。御祭神に大国主命と少彦名命を祀っていることを根拠とする。後の世に播磨に多くの伝承があることに影響を受けたことは否定できない。この地の伝承は、鷺に関わる湯温泉として古くから愛され、古い伝承と重なって成立したのかもしれない。

＜２＞衝撃!! 銅剣と銅鐸大量出土



「一九九六年一〇月 一四日午後三時過ぎ、田中琢（みがく）さん（奈良国立文化財研究所 ）から、春成秀爾は電話を受けとった。出雲の岩倉というところで銅鐸がみつかった、二八個ある、という内容である。

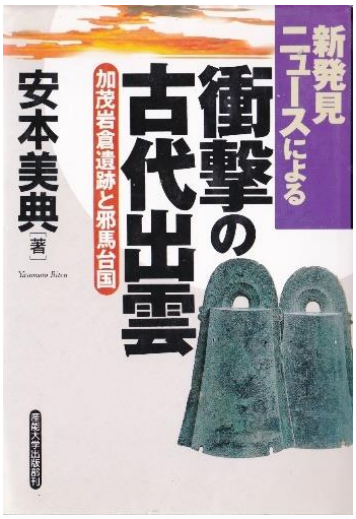
宮小路賀宏（みやこじよしひろし）さん（福岡県教育委員会）に言わせると、琢（タク）さん（通称 ）の電話は、話すためにあるのではなく、まるで切るためにあるかのようにそっけない〔宮小路一九九四〕。挨拶や無駄口はなく、用件だけですぐ切る。さすがの琢さんも、このときだけは『えらいこっちゃなあ』くらいは言ったかもしれない。」

……（略）春成氏は電話をさらに受けていた。

「銅鐸の数は三一個（筆者、その後３９個に）にふえていた。外縁付鈕式(II式)、扁平鈕式（III式）があり、突線紐式１式(IV－1 式)もあるかもしれない。紋様は四区袈裟襷紋、六区 袈裟襷紋、流水紋がある。九州・東海の銅鐸ではありえない、近畿の銅鐸だ。発見地は神庭荒神谷から三キロメートルほどしか離れていない場所だ、という。」

発見された翌年（１９９７年１０月)、銅鐸編年の作成者として知られる佐原真氏（国立歴史民俗博物館長）と春成秀爾氏（同考古研究部長）の共著「出雲の銅鐸　発見から解読へ」＝**写真**＝が出された。その書き出し部分だ。いかにも混乱した様子がわかる。考古学者らには、近畿が中心の銅鐸が、各年代入り混じって出雲で大量に埋納されていたことは、想像できずパニック状態になっていたのだろう。

同じ年（1997＝平成９年）の１２月に安本美典氏も「新発見ニュースによる衝撃の古代出雲　加茂岩倉遺跡と邪馬台国」（産能大学出版部刊）＝次ページ**写真**＝を出版している。



◎安本氏の論点

安本美典氏はいう。「『古事記』の神話およそ三分の一は、『出雲神話』がしめている。その『出雲神話』の中心的テーマは、大国主の命の『国譲り』の話である。命の命の領していた『葦原の中国』を、高天の原勢力に譲ったという話である。

『出雲の国譲り』の話は、『古事記』に記されているばかりでない。『日本書紀』『出雲の国風土記』『出雲の国造神賀詞』などでも語られている。

出雲の神庭荒神谷遺跡から、三五八本もの大量の銅剣が出土し、さらに加茂岩倉遺跡から三九個もの大量の銅鐸が出現した。素朴に、大きく考えるとき、『出雲の国譲り』神話と関係して いるのではないか、とだれしも考えそうなものである。 が、『専門家』は、そうは考えない。いたずらに複雑に考えて、問題を不透明にしているよう にみえる。 一つには、銅鐸の製作年代や埋納年代の問題がある。銅鐸は、年代をきめる手がかりにとぼしい。たとえば、銅鐸が、弥生時代の土器といっしょにでてくれば、土器が年代を決める有力な手掛かりとなりうる。しかし、銅鐸は、ほとんどのばああい、銅鐸だけが出土する。」

学者によって銅鐸の年代が数百年も違う状態が続いていることを指摘し、さらに述べる。

「佐原氏の編年では銅鐸は、紀元前３世紀から紀元後３世紀まで続く長い間使われてきたことになるが、実は邪馬台国時代に最盛期を迎え、古墳時代の始まりとともに終わる、比較的短い時代に盛行したものであろう。」（前掲書から要約

筆者）

そして「沈黙を守る銅剣や銅鐸は、雄弁になにかを語ろうとしているのではないか。

銅剣や銅鐸が、千数百年の長い長い沈黙を破って、古代の『あの日』に起きた『事件』を、それにまつわる物語を、語ろうとしている。それを聞きだす一つのきっかけになり、突破口となることを願い、私は、この本を書いた。」

二つの書籍は、片や“大混乱”、片や水を得た魚のように語る。対照的な語りかけだ。

表30　青銅器の編年（安本案）

西　暦	銅　鐸		
西　暦 元年前後	菱環紐	1式	Ⅰ-1式
		2式	-2式
	外縁付紐	1式	Ⅱ-1式
		2式	-2式
後200年	扁平紐	1式	Ⅲ-1式
		2式	-2式
	突線紐	1式	Ⅳ-1式
		2式	-2式
		3式	-3式
		4式	-4式
後300年		5式	-5式

表29　銅鐸の分類と西暦の世紀(安本案)

銅鐸の分類	西暦世紀
最古段階 Ⅰ—1式（菱環紐1式）	紀元前一世紀から主に一～二世紀
Ⅰ—2式（菱環紐2式）	主に二世紀
古段階 Ⅱ—1式（外縁付紐1式）	二世紀後半？
Ⅱ—2式（外縁付紐2式）	三世紀
中段階 Ⅲ—1式（扁平紐1式）	三世紀
Ⅲ—2式（扁平紐2式）	三世紀
新段階 Ⅳ—1式（突線紐1式）	三世紀
Ⅳ—2式（突線紐2式）	三世紀
Ⅳ—3式（突線紐3式）	三世紀
Ⅳ—4式（突線紐4式）	三世紀
Ⅳ—5式（突線紐5式）	三世紀

発掘された３９個の銅鐸

発掘されたた当時の銅鐸

出土地に接して作られた
ガイダンス棟

◎佐原氏の銅鐸編年

表１　銅鐸の分類と弥生時代の時期区分（佐原真氏による）

銅鐸の分類	西暦世紀	弥生土器編年
最古段階 Ⅰ－1式（菱環鈕1式）	前三～前二世紀	弥生Ⅰ期
Ⅰ－2式（菱環鈕2式）	前二世紀	Ⅰ期
古段階 Ⅱ－1式（外縁付き鈕1式）	前二世紀	Ⅱ期
Ⅱ－2式（外縁付き鈕2式）	前二～前一世紀	Ⅱ～Ⅲ期
中段階 Ⅲ－1式（扁平鈕1式）	前一～後一世紀	Ⅲ～Ⅳ期
Ⅲ－2式（扁平鈕2式）	一世紀	Ⅳ期
新段階 Ⅳ－1式（突線鈕1式）	一～二世紀	Ⅳ～Ⅴ期
Ⅳ－2式（突線鈕2式）	一～二世紀	Ⅳ～Ⅴ期
Ⅳ－3式（突線鈕3式）	二世紀	Ⅴ期
Ⅳ－4式（突線鈕4式）	二世紀	Ⅴ期
Ⅳ－5式（突線鈕5式）	二～三世紀	Ⅴ期

銅鐸を語る時、避けてとおれないのが編年の問題である。考古学者の間でも年代が 300 年もの差がある。異様な状況である。このことを確認しておかなくては、無用な混乱に陥る。

そこで、混乱の要点をまとめてみた。

佐原氏は「祭りのカネ銅鐸」のなかで次のようにいっている。「私の年代観をあげておく(表 1＝右)。(中略)

弥生時 代の土器の編年でのVI期は、庄内式土器の時代であり(都出 一九七 四)卑弥呼の時代である。

【銅鐸の型式と弥生各期との対応】弥生時代各期が今から何年前にあたるかについて、私の現在の考えは、かつての考えと大きく変わっている。しかし、銅鐸の型式と弥生各期との、対応については、三五年来変わっていない(佐原 一九六四)。その最大の根拠は、古段階(Ⅱ―1 式)の流水紋銅銅鐸の流水紋の一部は、Ⅱ期の弥生土器の櫛描き流水紋を採用したものだ、とみる点にある。なお、銅鐸の 製作年代は、銅鐸の鋳型といっしょに見つかった弥生土器、絵を描いた弥生土器、他の青銅器形祭器との比較を総合して、弥生各期と対応させて考えたものである。」（佐原真著「祭りのカネ銅鐸」ｐ８６～８７）

表 2　青銅器の編年（春成秀爾氏による）

銅		鐸	銅剣	銅戈	銅矛	時　期
150	菱環紐	1式 Ⅰ-1式	細形	細形	細形	弥生Ⅰ期新
		2式 -2式				Ⅱ期
前100	外縁付紐	1式 Ⅱ-1式	中細a	中細a	中細a 中細b	Ⅱ～Ⅲ期古
		2式 -2式	中細b	中細b	中細c 中広a	Ⅲ期新
1	扁平紐	1式 Ⅲ-1式	中細c 平形Ⅰ	中細c	中広b 中広c	Ⅳ期
		2式 -2式	中広 平形Ⅱ	中広	中広d 広形a	
	突線紐	1式 Ⅳ-1式				
後100		2式 -2式	-	広形		Ⅴ期
		3式 -3式	-		広形b	
		4式 -4式	-	-		
200		5式 -5式	-	-	-	

コラム　銅鐸の始まりと終わり

佐原眞氏らの銅鐸編年は「弥生時代前期（前３世紀～前２世紀）とする。その要点は「流水文銅鐸の流水文は、近畿の第Ⅱ様式（紀元前１００年ごろ）の土器と、文様の付け方のルールが同じである。したがって、流水文銅鐸は第Ⅱ様式中期の初めの銅鐸である。」とし、流水文銅鐸よりも古いタイプの銅鐸があるので、銅鐸のはじまりは弥生時代前期と考える。」というものである。

ところが、「銅鐸に付いているような流水文は、第Ⅱ様式の土器だけでなく、もっと新しい第Ⅲ様式や第Ⅳ様式（紀元後１世紀頃）の土器にもある。流水文があるから古いという証拠にはならない。」（唐古・鍵遺跡の文様を研究者の藤田三郎氏）の反論がある。

土器の流水紋は２度ある

考古学者、森浩一氏は、「（銅鐸の年代について）ぼくは、九州の方が今のところはるかに年代の基点になると思う。また、近畿の年代の出し方が、基盤が弱いような気がする」（「衝撃の…」ｐ５７）とする。

佐原眞氏は、銅鐸の鈕（紐孔）の形式などの分析により、銅鐸の相対的な編年を明らかにした功績は大きいが、

佐原氏の説く銅鐸の絶対年代については、まだ異論が多く定説とは言い難い。佐原氏が館長を務めていた国立歴史

民族博物館の解説などでは、佐原氏の所説をもとに銅鐸の年代が記述され、新聞なども、佐原氏の年代観で記事が書かれることが多いので、事情のわからない人たちはそのまま信じてしまう懸念がある。

銅鐸の終わりについての森浩一氏の見解は大局的には弥生時代とともに銅鐸は終わったといえる。２００年代の後半、典型的な前方後円墳がどんどん出てくる前に銅鐸は終わっている。銅鐸の埋められた時期を推定する手がかり、近年、銅鐸を埋めた穴の中や、穴を覆う土中に土器が発見された事例が４、５例ある（矢野、櫻井市の大福、羽曳野市の西浦、跡部）。土器の年代から、これらはすべて弥生後期か、すぐあとの庄内式の時代といえる。

（邪馬台国の会のホームページ「第２０４回大国主の命伝承と大量の銅剣・銅鐸の出土」から）

図２　銅鐸と土器の流水文（桜ヶ丘１号鐸と唐古・鍵遺跡出土土器）
（森浩一・石野博信共著「銅鐸」学生社刊による）

銅鐸の流水紋と土器の流水紋が一致することを根拠としたが、年代観に誤りがあった

◎誤解に基づく議論

この結論に対して、安本氏は「佐原真氏の作成した表１（前頁）でも、春成秀爾氏の作成した表（同左下）でも、邪馬台国の卑弥呼の時代である弥生土器編年のＩ期や西暦三世紀よりもまえに銅鐸の最後がきている。

加茂岩倉遺跡からは、「Ⅱ-1」の形式の銅鐸から、「Ⅲ－2」（ばあいによっては、「Ⅳ－1」の形式までの銅鐸が出土している。

これを、佐原真氏の表１の編年表で、西暦の世紀に換算すれば、『西暦紀元前二世紀』から、『西暦紀元後百年』ちかくまでとなる。」と指摘、同氏の年代観より２００年古い。

＜３＞見えてきた新しい編年

◎根幹揺るがす事実

佐原氏の編年の根幹は「Ⅱ期の弥生土器の櫛描き流水紋」と同じ文様が、「古段階銅鐸であるⅡ-1 式(外縁付き鈕 1 式)」に描かれていることだ。だから同時代だという主張に対して、安本氏は「そのような流水文は、もっと新しい紀元後１世紀頃の土器にもある。流水文があるから古いという証拠にはならない。」と指摘している。

もっともなことだ。弥生土器の流水紋は長く使われたのだろう。流行というものがあるなら、土器の文様として流水紋は２度の盛期があったということだ。

さらに安本氏と森浩一氏は銅鐸の起源は九州だといっているのだ。その主張は、河村哲夫氏の「季刊古代ネット」巻頭言（１２号、2023 年 10 月）でも指摘している。

この論文は画期的である。

◎「続日本紀」の記録

河村哲夫氏は「銅鐸について」という論文で「『続日本紀』和銅六年(713)の条に次のような記事がある。『七月六日大倭宇太郡波坂郷の人、大初位上村君東人、銅鐸を長岡野の地に得て献る。高さ三尺、口径一尺、その制、常に異にして、音、律呂に協う。所司に動して蔵に たまふ』

訳すれば次のとおり。

『七月六日大倭宇太郡波坂(なみさか)郷の人、大初位上の村君東人(むらのきみあずまひと)は、長岡野の地で銅鐸を得て献上した。高さ三尺・幅一尺で、その造りは、 普通と異なっており、音色は音楽の規則にかなっている。そこで担当の役所(雅楽寮)に命じて 保管させた』。現代でも用いられている「銅鐸」という名称は、この記事に由来する。」

最古の記録である『扶桑略記』（天智天皇七年＝668）では、「奇異なる宝鐸を掘り出す」と記し、謎の遺物とされたが、『続日本紀』（和銅六年＝713）では、楽器として認識されてる。

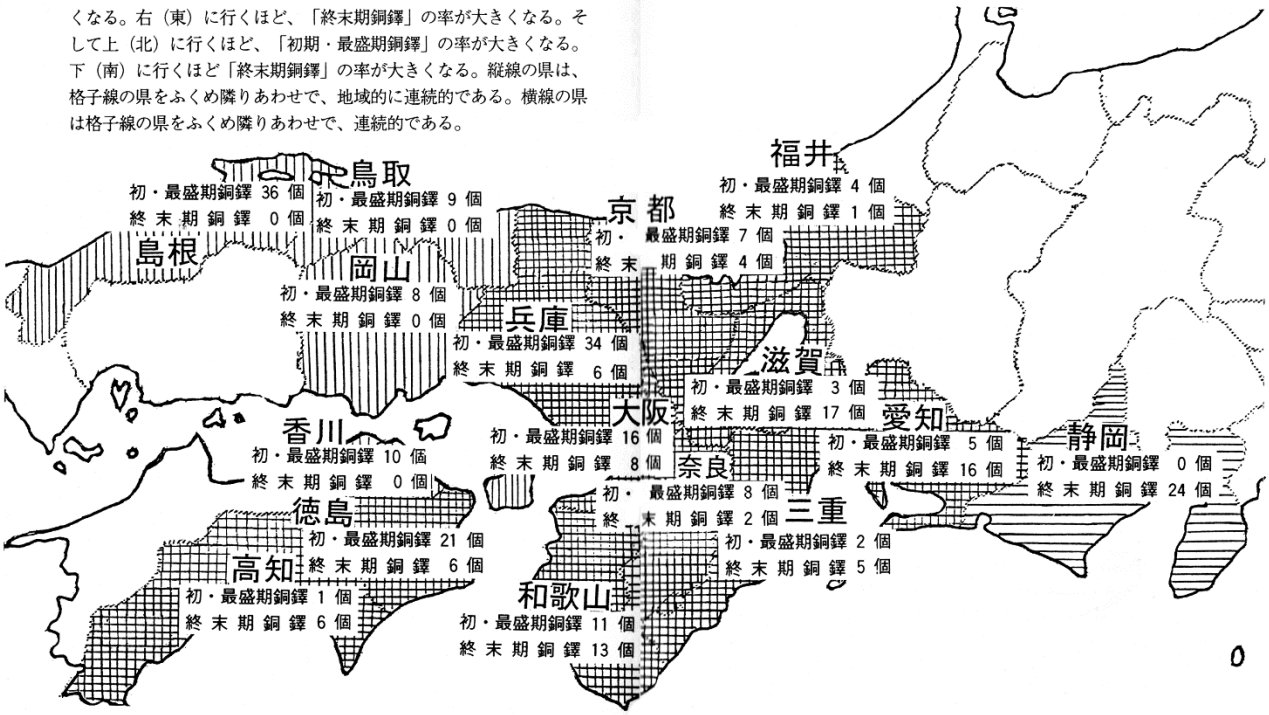
２０１５年兵庫県南あわじ市で採土した土置き場から、銅鐸が見つかり、さらに土をすべて点検したところ、最終的に７つ見つかった松帆銅鐸では、すべての銅鐸に青銅製の舌がついていた。ベルだったのだ。「音、律呂に協う」は、現代語にすれば「音色は音楽の規則にかなっている」となり、楽器以外の何物でもない。佐原論では、「後期の大型は見る銅鐸」とされるが、この『続日本紀』の和銅六年奈良県宇陀市（現在）で見つかった銅鐸は、高さ三尺と記され、メートル法では１０６．８センチメートル～８８．８センチメートル（高麗尺と唐尺の違い）と大型で突線鈕Ⅳ～Ⅴ、見る銅鐸に属する。

大きな銅鐸だから吊るすことはないとの思い込みかもしれない。見る銅鐸などなかったのではなかろうか？　今後検討されるべきである。

◎銅鐸分類と地域の特色

地図９　「初期・最盛期銅鐸」と「終末期銅鐸」との分布

★傾向として、左（西）に行くほど、「初期・最盛期銅鐸」の率が大きくなる。右（東）に行くほど、「終末期銅鐸」の率が大きくなる。そして上（北）に行くほど、「初期・最盛期銅鐸」の率が大きくなる。下（南）に行くほど「終末期銅鐸」の率が大きくなる。縦線の県は、格子線の県をふくめ隣りあわせで、地域的に連続的である。横線の県は格子線の県をふくめ隣りあわせで、連続的である。



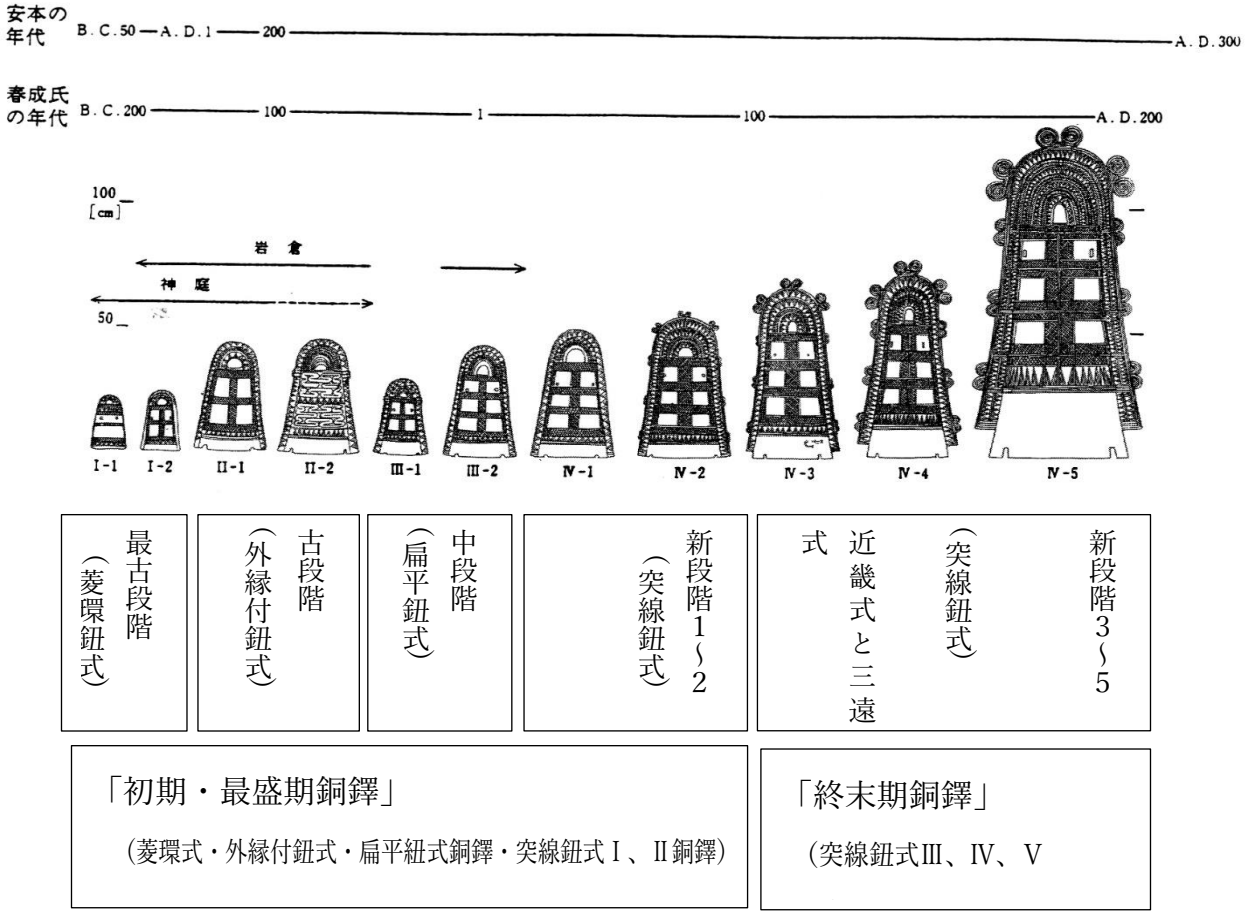
銅鐸の分類と地域には特別の関係があるようだ。安本美典氏は、この項の最初に紹介した「衝撃の古代出雲」に「初期・最盛期銅鐸」と「終末期銅鐸」のタイトルで上記のような図（同書ｐ１４４―１４５）を掲載している。

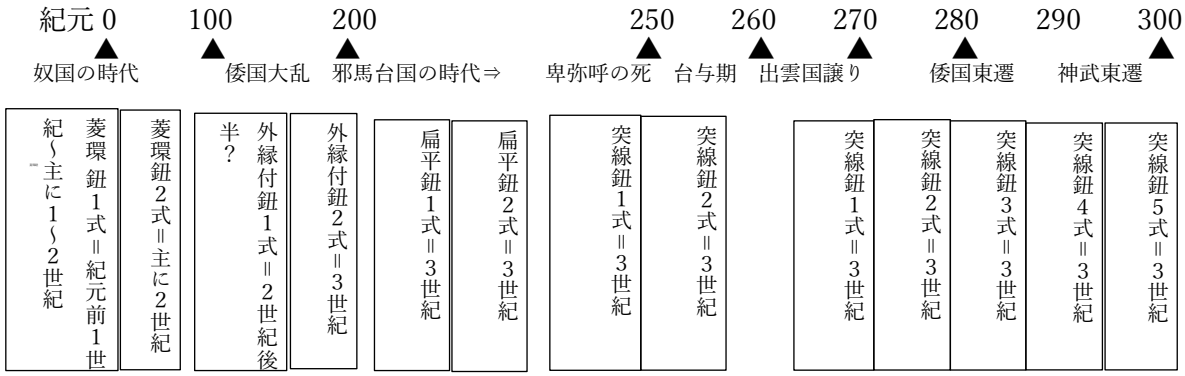
佐原編年のⅡ類型の銅鐸を「初期・最盛期銅鐸」（菱環式・外縁付鈕式・扁平紐式銅鐸）と「終末期銅鐸」（突線鈕式銅鐸）に分けた。それは初期・最盛期が大国主命の時代、終末期を饒速日命の時代とみたからである。この認識が安本氏の銅鐸についての基本的な考えであるからだ。

そういう目で見れば銅鐸論は極めて明解に見えてくる。すなわち、上の図の縦線地域が「初期・最盛期銅鐸」で大国主命の支配地域だ。横線地域が「終末期銅鐸」で、静岡県など横線地域は大国主命が進出していなかった地域に饒速日の命らが新たに進出したとみることができる。メッシュ地域は大国主命と饒速日命一派の両方が進出した地域とみれば、縦線地域は大国主命の支配の後、

大和政権が受け継いだことを表している。単純明快だ。

図24　安本の考える年代（森浩一氏・石野博信氏の考える年代に近い）は、佐原真氏・春成秀爾氏の考える年代とは、ときに300年という目のくらむような差がある（図は、佐原真・春成秀爾共著『出雲の銅鐸』［日本放送出版協会刊］の春成秀爾氏作成の図に、比較のため、安本案を書き加えたもの）





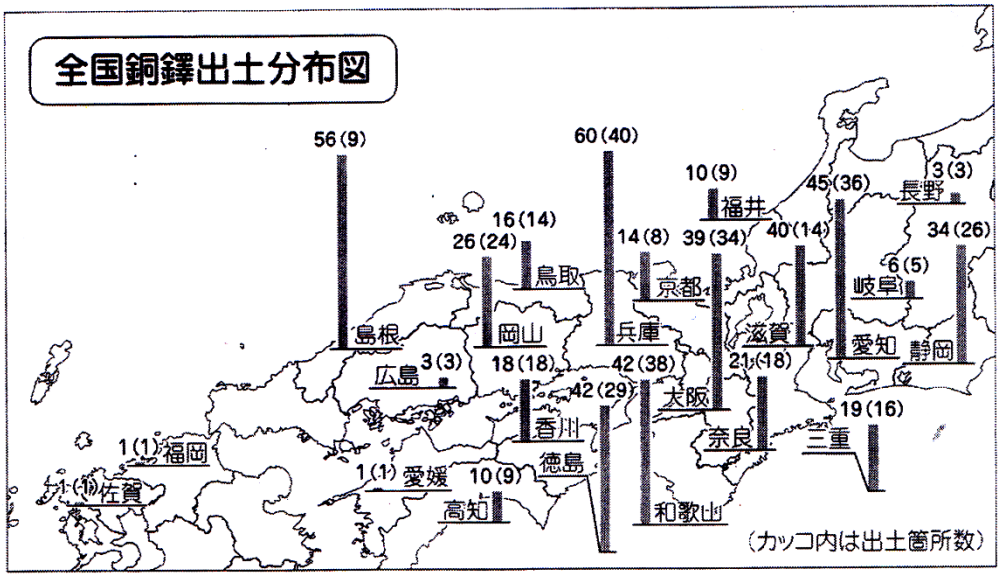
◎銅鐸は九州起源

上の表のように、紀元前に九州で誕生し、３世紀を通じて祭祀の道具として発展した。九州起源なのだ。そして弥生時代と共に終末期を迎える。

少し詳しく述べると、九州の奴国で邪馬台国の時代を中心に発展する。その後、素戔嗚尊の後継者大国主命の時代になると、中つ国（西日本）で、本格的に儀式の道具として使われるようになる。それが２６０年ごろの国譲りで突然廃棄（埋納）される。しかし、大国主命の文化を受け継いだ饒速日命の子孫らは、近畿、東海地区に逃れ、より大型の終末期銅鐸を作り、その文化を守ったが、神武東遷で一気に終了する。このことは銅鐸の鉛の同位体の分析でも証明できるがここでは触れない。

＜４＞銅鐸でみえる吉備と出雲の関係

◎ベスト１０に入る銅鐸県



岡山県出土の銅鐸は２７個だ。次ページの全国銅鐸出土数と型式分類表に」よれば全国９番目の多さである。ベストテン入りを果たしている。

右の地図は１９年前に筆写が執筆した時に作成したもので、当時は２６個であった。岡山県の場合・２０１５年に総社市福井の神明遺跡から１個が発見され１個増えたが順位は変わっていない。この間、最も大きい発見は、２０１５年の淡路島の松帆銅鐸であろう。土砂採取場からショベルカーですくいあげ、社内の蓄積場所で２個発

見され、その後５個増え７個になった。

現在、全国の銅鐸の出土数は約５５０個とされている。５７０個との情報もある。筆者がインターネットの公開データをもとに整理し、独自に集計（註２）した結果が次の表だ。全銅鐸数は531個となっている。

全国銅鐸出土数と型式分類表					
順位	県　名	出土数	型　式　分　類		
			初期・最盛期	終末期	不明
1	兵庫	67	49	12	6
2	島根	56	55	0	1
3	愛知	55	13	23	19
4	大阪	41	24	13	4
5	滋賀	40	11	23	6
6	徳島	39	28	5	6
7	和歌山	38	21	10	7
8	静岡	35	0	33	2
9	岡山	27	26	0	1
10	奈良	24	18	2	4
11	三重	20	5	14	4
12	香川	20	15	0	5
13	鳥取	19	14	3	2
14	京都	14	7	4	3
15	福井	12	3	6	3
16	岐阜	8	6	2	0
17	長野	7	1	2	4
18	広島	3	3	0	0
19	愛媛	2	2	0	0
20	石川	2			
21	福岡	1	0	0	1
22	佐賀	1	3	0	0
		531	304	152	78

次いで大国主命の最盛期銅鐸について、安本美典氏の見解に基づいて「初期・最盛期」と「終末期」に分類分けしてみた。

１９９８年と１９９９年に鳥取市青谷遺跡で３個の近畿式（突線鈕式でⅢ～Ⅳ）が出ており、前頁の表で、「初期・最盛期（縦線地区）のみ」となっている鳥取県は、終末期銅鐸のゼロ地域から抜けることになる。

とはいえ、３個のみで、島根県に接する微妙な地区だ。今回は例外として鳥取県は終末期銅鐸がない地域として扱うことにする。いずれ解決できる発見があるかもしれない。

安本氏は、この終末期銅鐸のゼロ地域について次のように述べている。

「『鳥根県(出雲)』『鳥取県(伯耆)』『岡山県』『広島県』など、中国地方を中心とする地域は、『最盛期銅鐸』が相当数出しているにもかかわらず、『終末期銅鐸』は、ただの一個も出土していない。『兵庫県』からは、『最盛期銅鐸』はかなり出土しているが、『終末期銅鐸』は、それほど多くない。全体的に、『最盛期銅鐸』は、『終末期銅鐸』にくらべ、東に分布している。大国主命の地盤だったかとみられる地域のうち、高天の原勢力(北九州勢力)の天菩比命がうけついだかとみられる地域からは、『終末期銅鐸』は、出土しない傾向があるようである。」（「衝撃の古代出雲」１４６-１４７）という。

◎吉備の銅鐸たち

やっと弥生時代の出雲と他国との関係が見えてきそうだ。銅鐸祭祀の中心は大国主命だろう。銅鐸出土数が即親密度とみることはできないが、一定の交流の深さを表しているのではなかろうか？　隣の兵庫県の６７個（県別では１位）には及ばないが、鳥取県の１９個よりは多い。全国一の兵庫県（丹波、摂津、但馬、播磨、淡路）は終末期の物が１１個（筆者・集計時期の差で１２個）ある。圧倒的に最盛期型が多い。播磨国風土記にも、大国主命の逸話が登場する。一定の関係の深さを現わしているのだろう。広島県は備後領域で２個（福山市神村町十区萬福寺跡地と世羅郡世羅町黒川・下陰地)。それと安芸国に属する広島市東区福田町から出土し、鐸面に邪視紋のある福田型がある。あとでふれるが、この同范鐸に岡山市の伝足守鐸がある。

岡山県出土の銅鐸の年代別を見ると、最盛期型が２６個で不明が１個だ。最盛期型の内訳は古い順に外縁付鈕式が３、扁平鈕式が９、福田型が１、突線鈕式１，２型が９、で、最盛期型だが詳細不明が４となっている。

紀元前後にも遡るような最古級の菱環鈕式はないものの、２番目に古い外縁付鈕式が３個出土している。確実な実年代は出しにくいものの、邪馬台国時代前期にもおよび、大王・素戔嗚尊の時代にかかるものかもしれない。

大国主命時代の主流である福田型が１をいれ、扁平鈕式が１０個に達する。これは吉備が大国主命と友好関係が良好的だったことを示している。

次の終末期型がゼロだったことは、天菩比命の時代になれば、饒速日命系の新天地を求めた人物は、受け入れなかったことを表している。

余談だが変わり身の早さ、あるいは、手のひら返しはその後の吉備の生き方をなんとなく示しているようで興味深いものがある。

◎「カモ」「ミワ」地名

銅鐸を探るうえで大きな指針となるのが、「カモ」「ミワ」地名である。日本の古代史研究の第一人者のひとりでもある元国学院大教授の大場磐雄氏(故人)の発言に関するものがある。それは島根県の加茂岩倉遺跡で一度に 39 個もの銅鐸が発見された直後の平成 8 年(1996 年)の毎日新聞夕刊に掲載された記事（編集委員・岡本健一氏署名）だ。次のように書かれている。

「大場さんは戦後間もない 24 年、銅鐸の出土地 36 ヶ所と付近の神社や古地図名を調べた。その結果、銅鐸の出土地は①古代の有力氏族・カモ氏とミワ氏が進出した地域と密接に関係する。しかも、②その近くに巨岩があって、磐座(聖なる大岩)として信仰されてきた」というもので、この事実は香川県の坂出市加茂町の鴨神社旧社地の巨岩の下から見つかった例をはじめ、兵庫県の豊岡市の気比銅鐸などをあげ、「大場さんはカモ・ミワ両氏こそ、各地に進出して畿内的な『銅鐸のまつり』をつかさどった氏族集団と考えた」（と紹介している。(安本美典著「邪馬台国と出雲神話」ｐ３１４―３１６）

この視点から岡山県内を見てみると、カモ地名は旧加茂川町(吉備中央町)、旧加茂町(津山市)、旧鴨方町(浅口市)、岡山市加茂地区、ミワは倉敷市の美和、瀬

戸内市の美和、総社市の三輪がある。このほか、岡山県神社庁の神社検索によると、鴨あるいは賀茂、加茂の名前の付く神社は 33 社ある。地名とあわせると、全県下に広がりを持っている。

しかし、銅鐸の制作年代は、弥生中期（西暦紀元 1 世紀前後)に登場、弥生時代の終わりに近いころまで続いたとされてきた。カモ・ミワ氏は大国主命の後裔とされる一族。安本美典氏の年代論に 基づき大国主命の時代を推定するなら、西暦 260 年 ごろ。カモ・ミワ氏はさらにこのあとの時代である。この年代の違いについて安本氏は「大場氏の 述べたことは、銅鐸の埋納年代をくり下げれば、説明が付くのではないか。つまり、銅鐸は大国主命 の命の時代(ほぼ邪馬台国の時代)に、大国主命の命の影響下の土地で(銅鐸祭祀が)行われていた」と銅鐸編年の見直しの必要性を主張する。平成元年 8 月、岡山市高塚で高速道路(岡山自動車道)の工事にともなう発掘調査中に銅鐸が見つかった。これまで銅鐸は平野部より山中の磐座といわれるようなところからの発掘例が 多いが、この高塚では平野部で、集落の中からだった。

吉備の銅鐸のうち最も新しい 2014 年発見の神明遺跡銅鐸も、国道バイパスの事前発掘調査中みつかっている。ここでも埋納されている状態が、研究者によって記録された珍しいケースだ。

この二つは製作年代も異なるが、同じように集落から出ている。井原方面の銅鐸も平地であった。何か埋納場所が他地域と異なっているかもしれない。吉備の特色として検討したいと思っている。

◎同范関係を探る

同范関係とは同じ鋳型で作ったもののことで、今回使った銅鐸出土地名表では、岡山関係では、倉敷市粒江 （種松山）の扁平鈕式が徳島市入田町安都真の同型と一致している。

「勝田郡勝央町植月北 （池尻南小字念仏塚 435)」が雲南市加茂町岩倉 （加茂岩倉遺跡）の扁平鈕式古段階と一致した。まさに大国主命と直結していたのだ。

岡山市埋蔵文化財センターの安川満氏は市内の銅鐸について「岡山市内からは伝承や残っていないものも含め、13 例以上の銅鐸が知られています。文様は

伝足守鐸、百枝月の銅鐸片が横帯文、高塚１号鐸が流水紋である以外は袈裟襷文です。姫路市今宿丁田遺跡、名古山遺跡で扁平鈕鵜古段階の四区袈裟襷紋銅鐸とみられる石製鋳型片が出土しており、播磨で鋳造されたものかもしれません。伝足守鐸は福田型と呼ばれる鐸面に邪視紋を表現したもので、九州産と考えられています。

最も古いものは百枝月採集の銅鐸片で外縁付鈕１式、最も新しいものは高塚１号鐸で突線鈕２式のものです。全国の銅鐸出土数では突線鈕３式以降のものが約１２０例と全体の２５パーセントを占めていますが、市内、吉備では出土していません。高塚１号鐸は後期初頭の土器が伴出しており、この時期に吉備の銅鐸祭祀が終焉したものと思われます」（平成 29 年度同センター講座第 4 回）と興味深いことをのべている。

これらの銅鐸の埋納時期は、制作年代は異なってもほぼ大国主命の「出雲国譲り」のあったと思われる西暦２６０年ごろを設定すれば、銅鐸文化が見えてくるのではなかろうか。

◎「鴨別命」はなぜ「カモ」なのか

４世紀になり吉備臣（吉備津彦たちの子孫）たちの時代が来る。朝廷から孝霊天皇の皇子ふたりが遣わされる。大吉備津彦命と稚武彦命である。日本書紀によれば弟の稚武彦の後裔が支配者となる。後に、朝廷内でも大きな地位を固めた笠の臣の祖とされた鴨別命は、波区芸縣を賜り、神功皇后と共に九州に降り、熊襲退治に活躍する。彼の名がなぜ「鴨別命」なのか？　明確な答えを聞いたことがない。先の大場氏「カモ」「ミワ」と関係あるのか？　筆者なりの仮説を述べてみようと思う。

吉備の地である「波区芸縣」は笠岡・井原方面に旧小田郡、旧浅口郡を加えた領域だろう。この地域には「旧鴨方町」の大地名があり、鴨神社（井原市美星町）、鴨方神社（浅口市鴨方町）、美和神社（笠岡市）、美和神社（井原市芳井町）が散在する。

この地区での銅鐸出土地は４カ所（井原市下稲木町 、井原市木之子町猿ノ森黒岩、井原市下稲木町兼安字明見 、浅口郡船穂町柳井原）ある。

どう解釈するかであるが、鴨別命の受け継いだ地域には「カモ」族の有力者がいたことに起因するのかもしれない。今後検討が必要だろう。

＜おわりに＞

大国主命の伝承を岡山県下で発見したいといろいろ資料集めをしたが、確実なものは出てこなかった。これからも努力は重ねたいと思う。

今回、銅鐸を中心に出雲と吉備を見てきたが、銅鐸の年代を古くしたことで何を得たのだろうか。いたずらに学問の発展を阻害したように思われてならない。「古事記」「日本書紀」を素直に読み年代観を正しく持てば、われわれの歴史を再現できるはずである。吉備と出雲の関係について次号では「吉備の謎の土器である分銅型土器と特殊器台を供献する墳墓群等」をテーマに執筆してみようと思う。

《註釈一覧》

・註 1 **播磨国風土記での大国主命の活躍**　『播磨国風土記』において、大国主命が関わる主な場所は、次の場所が事績、伝説として挙げることができる。

1. 印南郡（いんなみのこおり）　印南郡の「伊和里（いわのさと）」では、大国主命が訪れたという伝承が残っている。この地域は、現在の兵庫県姫路市周辺に位置しており、播磨国でも特に重要な地域である。大国主命がこの地に住まい、国土を開拓したという話がある。

2. 神前郡（かんざきのこおり）

神前郡には、大国主命が荒れた土地を耕し、豊かな農地を作ったとされる伝説がある。特に、大国主命が土地の水利を改善して、作物がよく育つようにしたとされている。播磨国においては重要な農業地帯となっている。

3. 賀古郡（かこのこおり）

賀古郡は現在の兵庫県加古川市周辺、大国主命が加古川周辺の土地の整備に関わったとされている。ここでは、川の流れを整え、土地を開墾したとの伝承がある。

4. 宍粟郡（しさはのこおり）

宍粟郡は、現在の兵庫県宍粟市に位置し、大国主命の事跡が残る場所としてよ

く知られている。この地域には大国主命が国土を開拓し、自然の恵みをもたらしたという伝説となっている。

5. 赤穂郡（あこうのこおり）

赤穂郡では、大国主命がこの地に巡行し、土地の神々と協力して開拓事業を行ったとされる。この地域は現在の兵庫県赤穂市付近にあたる。

6. 美嚢郡（みのうのこり）

美嚢郡（現在の兵庫県三木市周辺）でも、大国主命が地形や土地に影響を与えたという伝承が存在する。

これらの場所における大国主命の行動は、播磨国の豊穣と国土の整備に深く関わるものであり、地域の神話や伝説に強く結びついている。

註２　独自の集計のうち岡山県の銅鐸出土一覧を収録した

	岡山県出土銅鐸一覧					
	出土地	型式（島根埋文）	型式（難波洋三）	文様	高さ等	安本年代
1	岡山市東区百枝月 （西畑 円福寺裏山） 旧 上道郡角山村 百枝月 （西畑）	外縁付鈕１式	扁平鈕式新段階	４区袈裟襷文		2
2	（伝） 推 備前国	不明		袈裟襷文	7尺3寸5厘	2
3	勝田郡勝央町植月北 （池尻南小字念仏塚435）旧 勝田郡植月村大字北	外縁付鈕１式	扁平鈕式新段階	４区袈裟襷文	29.6	2
4	総社市福井、神明遺跡出土	外縁付鈕式	突線鈕２式		高さ約３０、裾部の長径１５	2
5	井原市下稲木町 （金安山フカタ池ノ上寺屋敷） 旧 小田郡稲倉村	扁平鈕２式	突線鈕２式か３式	６区袈裟襷文	43.6	3
6	井原市木之子町 （猿ノ森 黒岩） 旧 後月郡木之子村大字猿ノ森2195	扁平鈕２式	扁平鈕式新段階	１２区袈裟襷文	42.7	3
7	岡山市北区高塚 （高塚遺跡 フロヤ調査区）	突線鈕２式		３区流水文	57.7	3
8	井原市下稲木町 （兼安字明見）	扁平鈕２式		６区袈裟襷文	44.3	3
9	岡山市東区西大寺一宮 （安仁神社裏山） 旧 邑久郡大宮村藤井	扁平鈕１式	２か３式	４区袈裟襷文	31.2	3
10	倉敷市粒江 （種松山） 旧 児島郡粒江村大字粒江 種松山	扁平鈕式	扁平鈕式古段階	４区袈裟襷文	28.5	3
11	岡山市中区兼基 （鳥坂山） 旧 上道郡幡多村大字兼基	扁平鈕２式		６区袈裟襷文	42.3	3
12	岡山市東区百枝月西畑 旧 上道郡角山村 百枝月 （西畑）	扁平鈕式		４区袈裟襷文	29.8	3
13	岡山市東区百枝月西畑 旧 上道郡角山村 百枝月 （西畑）	扁平鈕式	扁平鈕式古段階	４区袈裟襷文		3
14	岡山市中区雄町137	扁平鈕式	扁平鈕式新段階	４区袈裟襷文	31.3	3
15	倉敷市真備町妹（池ノ上 蓮池尻） 旧 真備郡真備町妹 蓮池尻 旧 吉備郡呉妹村大字妹字池ノ上	突線鈕２式	？	６区流水文	48.3	4
16	岡山市北区高塚 （高塚遺跡 角田調査区）	不明		袈裟襷文		4
17	和気郡和気町和気 （寺屋敷） 旧和気郡和気村	突線鈕２式	扁平鈕式古段階	近畿ⅡＡ	62.4 ２尺６寸	4
18	岡山市東区草ヶ部 （小廻山） 旧 上道郡上道町草ヶ部小廻山	突線鈕１式	扁平鈕式古段階	６区袈裟襷文	53.8	4
19	玉野市沖海底	突線鈕式	扁平鈕式古段階		現14.2	4
20	（伝） 岡山市東区吉原・西庄 付近	突線鈕式	３Ｉｂ～３Ⅱ式		鈕８寸	4
21	（伝） 瀬戸内市邑久町周辺 旧 邑久郡邑久町周辺	突線鈕２式		近畿式	現23.3	4
22	（伝） 苫田郡鏡野町	突線鈕式？	外縁付鈕２式		60以上	4
23	（伝） 苫田郡鏡野町	突線鈕式？			60以上	4
24	（伝） 岡山市北区足守 （上足守） 旧 吉備郡足守町大字上足守 旧 賀陽郡足守町	福田型		３区横帯文	現17.8	3
25	（伝） 総社市三須 旧 都窪郡三須	不明				
26	岡山市中区兼基 （笠井山山麓） 旧 上道郡幡多村大字兼基	不明		袈裟襷文	約42～45 1尺4～5寸	
27	岡山市中区兼基 （鳥坂山） 旧 上道郡幡多村大字兼基	不明			約36～39 1尺2～3寸	77

プロフィール

いしあい・ろくろうNPO 法人福岡歴史研究会副理事長　石合　六郎　昭和 20

年 4 月、岡山県倉敷市児島田の口に生まれる。児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年に卒業。同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と出合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。

「吉備津彦命と温羅」　　AMAZON で販売中

（ペーパバック＝1200 円　Kindle 版＝デジタル６５０円）

季刊「古代史ネット」のページ

季刊「古代史ネット」執筆記事一覧

創刊号と２号は未参加でした。

3 号　第１回　二人の天皇が行幸された谷（2020.07）

4 号　第２回　巨大古墳を考える（上）吉備津彦の時代（４世紀）（2020.10）

5 号　第３回　巨大古墳を考える（下）御友別の時代（５世紀）（2021.01）

6 号　第４回　温羅伝説を考える（上）―こんな物語だった（2021.04）

7 号　第５回　温羅伝説を考える（中）―成立過程とその起原

「神仏習合の中から誕生」（2021.07）

8 号　第６回　温羅伝説を考える（下）―桃太郎伝説の誕生

「日本人の心映す鏡」（2021.10）

９号　第７回　素戔嗚尊の剣（上）―吉備のどこにあった？
「十握の剣流転の真実」（2022.01）
１０号　第８回　素戔嗚尊の剣（下）―どんな形だったか？
「邪馬台国時代の北部九州と類似」（2022.04）
１１号　第９回　造山古墳の被葬者を探る（上）
「吉備海部の娘・黒日売命か」（2023.07）
１２号　第 10 回　造山古墳の被葬者を探る（中）
「吉備海部は備中にいた」（2023.10）
１３号　第 11 回　造山古墳の被葬者を探る（下）
「謎を解く肥後系古墳と血脈」（2024.01）
１４号　第 12 回　播磨の戦はあった!!―片山神社伝承が証明
「稚武彦は再度播磨へ」（2024.04）
１５号　第 13 回　卑弥呼の剣と楯築の王
「日本海ルートでつながる筑紫と吉備」（2024.07）
１６号　第 14 回　播磨の戦はあった!! ―片山神社伝承が証明
「稚武彦は再度播磨へ」（2024.07）
１７号　第 16 回　第 15 回　吉備と出雲＜上＞銅鐸文化
「大国主命の祭祀受け入れる」（2024.10）

日本古代通史・第 32 回

後期・邪馬台国の時代⑪
～出雲の国譲り①～

河村哲夫

大王となった大国主命

大国主命は、高天原から派遣された少彦名命とともに、本州の各地域に遠征を行い、勢力拡大に邁進した。その主な伝承地については、前号までに紹介したところであるが、概要をまとめれば次のとおりである。

調査不足により漏れた伝承があるにちがいないが、出雲・島根を中心に、日本海に沿って北陸から北部九州(響灘・玄界灘)方面に広がるとともに、瀬戸内海・近畿方面にも広がっている。

実に広大な領域で、まさに大国主命という名にふさわしい。

下表をみれば、日本の統一に向けた確かな一歩が感じられるではないか。

府　県	大国主命伝承地		備　考
島根県	○	『出雲国風土記』	中心地
鳥取県	○	『古事記』	日本海側
兵庫県	○	『播磨国風土記』	日本海側
京都府	○	籠神社『勘注系図』	日本海側
石川県	○	能登生国玉比古神社	日本海側
富山県	○	高瀬神社、気多神社	日本海側
新潟県	○	糸魚川の奴奈川姫	日本海側
岡山県	△	中山神社など	瀬戸内海
徳島県	○	八桙神社など	瀬戸内海
愛媛県	○	『伊予国風土記』逸文	瀬戸内海
奈良県	△	『古事記』	近畿
福岡県	○	宗像三女神	日本海側(響灘・玄界灘)
計	11		

『出雲国風土記』には、

「所造天下大神(あめのしたつくらしし・おおかみ)」

と、古代天皇の「治天下大王(あめのしたしろしめす・おおきみ)」あるいは「治天下天皇(あめのしたしろしめす・すめらみこと)」に匹敵する称号が用いられている。

なお、参考のために、古代天皇の「治天下」の称号のいくつかの例を紹介しておこう。

「大王」および「天皇」という称号は、戦後史学においては 5～6 世紀以降のわりと遅い時代から用いられたとする見方が大勢でのようであるが、『六人部連本系帳』など新しく発見された資料や大国主命との対比からみて、初代神武天皇にまで遡る可能性は十分にあり得よう。

治天下天皇等の例

年　代	治天下天皇	天皇名	出　典
4 世紀	始馭天下之天皇 （はつくに・しらす・すめらみこと） 可志原宮治天下天皇	神武天皇	日本書紀 六人部連本系帳
4 世紀	掖上池心大宮治天下天皇	孝昭天皇	和珥部氏系図
4 世紀	御肇国天皇 （はつくに・しらす・すめらみこと） 師木水垣宮治天下天皇	崇神天皇	日本書紀 六人部連本系帳
4 世紀	巻向玉城宮治天下天皇	垂仁天皇	六人部連本系帳
5 世紀	治天下獲□□□鹵大王	雄略天皇	熊本県江田船山古墳出土鉄剣銘
607 年	池邊大宮治天下天皇 小治田大宮治天下大王天皇	用明天皇 推古天皇	法隆寺金堂薬師如来像光背銘
629～641 年	高市岡本宮治天下大王天皇	舒明天皇	万葉集

大国主命の拡張政策は、タカミムスビ・万幡豊秋津師比売命・天忍穂耳命など高天原勢力の支援のもとに行われていることは明らかである。

宗像三女神とニギハヤヒとの連携強化やカミムスビの子の少彦名命の派遣などもその一環であり、カミムスビが出雲に常駐していた可能性すらあることについてもすでに述べたとおりである。

高天原へ戻った少彦名命

ところが、そのような関係に亀裂が生じ、高天原による大国主命への支援が急速に弱まり、最終的には「出雲の国譲り」という軍事的な強奪ともいうべき大事件に発展していく。

そこには、高天原と出雲側の思惑のズレがあったとしかおもえない。

まず、大国主命と少彦名命の関係である。

大国主命と少彦名命はともに協力して国づくりに邁進したことは、これまで縷々述べたとおりである。彼らの治政は、人間のみならず動物にまで及んだとされている。

『日本書紀』には、

「顕見蒼生(うつくしきあおひとくさ・人民)のみならず畜産(けもの・家畜)の病気治療の方法を定め、また鳥獣や昆虫の害を防ぐための呪術の法を定めたので、今に至るまで人民はその恩恵を受けている」

と、書かれている。

ところが、その記事につづけて大国主命と少彦名命との奇妙な問答が記されている。

大国主命が少彦名命に対して、

「我らがつくった国はよくできたといえるだろうか」

と、尋ねたところ、少彦名命は、

「よくできた所もあれば、そうでない所もある」
と答えたというのである。
『日本書紀』の編集者も、「その談(ものがたりごと)、幽深(ふか)き致(むね)有らじ」――すなわち、「この問答には深いわけがありそうだ」と意味ありげな一文を添えている。
大国主命の発言は、出雲の支配領域が拡大したことへの自己満足感を率直に表明したものであったろうが、それに対して少彦名命は不満を表明した。
少彦名命の不満は、もちろん高天原の不満でもある。
その具体的な不満の内容については記されていないが、推測をまじえて述べれば、
「高天原が全面的に支援しているにもかかわらず、出雲のみが領土を広げているではないか」
というようなことであろうか。
当然のことながら、高天原の目的は、高天原の勢力拡大であって、出雲の勢力拡大ではない。
ここに絶対的なズレが生じている。
このあとにつづく高天原と出雲との数度にわたる交渉および、その後の武力による「出雲の国譲り」に至る経過をみれば、少彦名命の高天原への引き揚げは、高天原による大国主命に対する締め付けの第一弾とみなすことができよう。

常世郷(とこよのくに)

『日本書紀』には、少彦名命が熊野の岬から「常世郷(とこよのくに)」に立ち去ったと記され、別伝にも、少彦名命は粟島で粟茎(あわがら)によじ上り、粟茎にはじかれて「常世郷」に行ったと記されている。
少彦名命を小人とみる伝説は、長年月の口伝えに伴う誇張とみていいであろうが、「常世郷(とこよのくに)」については、「死後の世界」とも解釈できる余地がある。このことについて検討してみよう。
すでに述べたとおり、『先代旧事本紀』にはニギハヤヒの近畿東遷に際して 32 人の重臣らが随行したと記されているが、そのなかの 1 人に、
「少彦根命(すくなひこね)」
という人物が加わっており、しかも、
「鳥取連(ととりのむらじ)らの祖」
とされている。
ニギハヤヒの九州における最後の拠点は、遠賀川下流の鞍手郡方面とみられるから、少彦根命＝少彦名命であれば、「死後の世界」ではなく、無事に出雲から九州へ帰還していたことになる。
加えて、そのことを補強するのが、少彦根命を「鳥取連(ととりのむらじ)らの祖」とする『先代旧事本紀』の記事である。
「鳥取(ととり)」とは、沼や沢の多い鳥取平野で水辺に集まってくる鳥などを専門的に捕らえる狩猟集団のことである。もちろん、鳥取県や鳥取市の由来である。
『古事記』にも、第 11 代垂仁天皇の時代に「鳥取造(ととりのみやつこ)」が置かれたと記され、『日本書紀』にも「鳥取部(ととりべ)」が置かれたと記されている。

その統率者が「鳥取造（ととりのみやつこ）」（古事記）あるいは「鳥取連（ととりのむらじ）」（先代旧事本紀）である。

島根県の出雲にゆかりのある少彦名命の末裔が、隣接する鳥取県の地方長官――鳥取連に任じられたことには必然性があるというべきである。

したがって、「常世の国」についても、「死後の世界」ではなく、単に、「海の向こうの高天原（筑紫）」に帰還したという程度の意味に解釈すべきことになるわけである。

ついでながら、少彦名命の例を除いた『古事記』『日本書紀』『万葉集』における常世の国の使用例は次のとおりである。

常世の国の使用例について

常世国の意味	人　名	説　　明
死後の世界	御毛沼命	・ウガヤフキアエズの子で、神武天皇の兄 ・「御毛沼命は波の穂を跳みて常世の国に渡った」（古事記） ・神武天皇の東征に従軍して熊野に至った折、暴風に遭い、波を踏んで常世郷に行った（日本書紀）
海の向こうの世界	田道間守	・垂仁天皇が田道間守を常世国に遣わして、「非時香菓（ときじくのかくのみ）」を求めさせたが、その間に天皇は崩御した（日本書紀）。 ・「非時」は、「いつでも香りを放つ木の実」すなわち「橘（みかん）」といわれる。 ・菓子とする説も根強く、田道間守は和菓子屋の守護神として祭られている。
不老不死の世界 海中の理想郷	浦嶋子	・浦島太郎伝説のルーツ ・浦島子が漁に出て、七日帰らず海を漕いで「常世」に至り、海若（わたつみ）の神の宮で神の乙女らとともに暮らした。神の宮では老いも死にもせず、永世にわたって生きることができたにもかかわらず、浦嶋子は帰郷し、自分の家がすでになくなっていることを知って、開けてはならぬ玉笥を開けてしまう（『万葉集』巻九・1740）。

なお、『伯耆国風土記』逸文には、

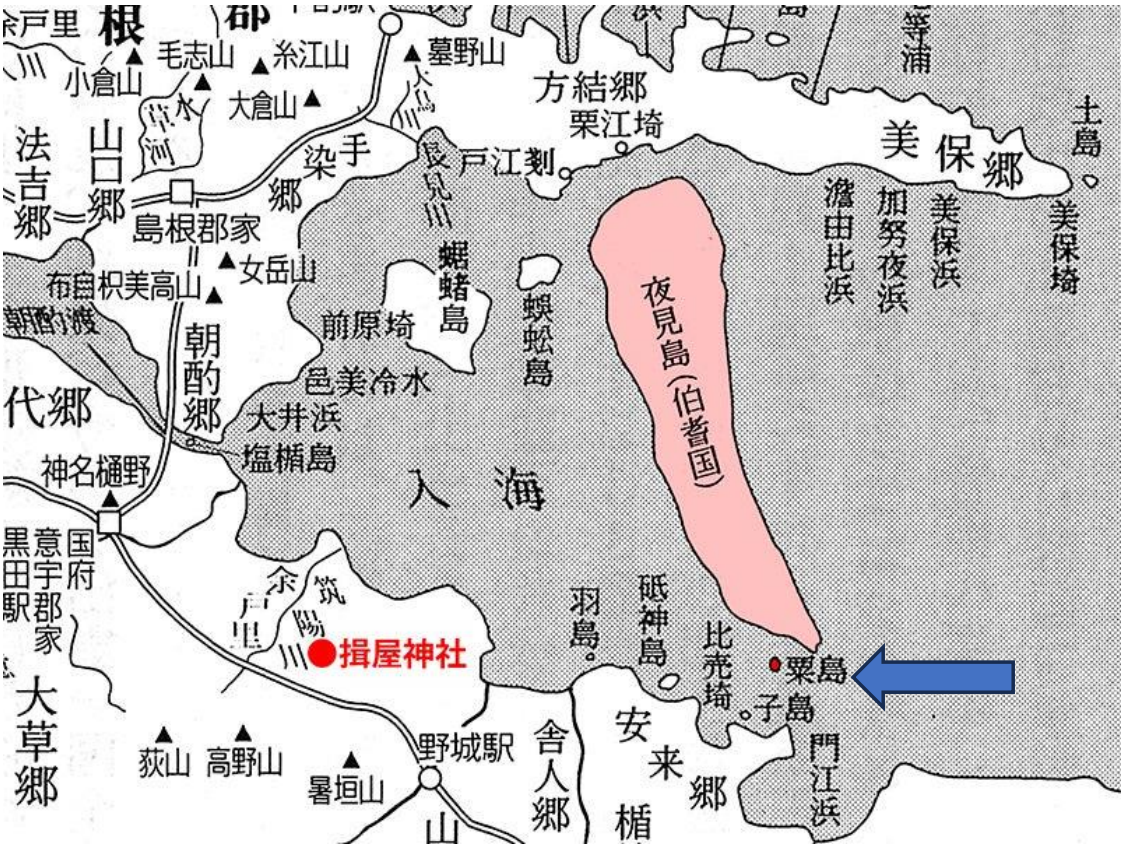
「少日子命（すくなひこのみこと）が粟の穂に乗り弾かれて、常世の国へ渡られたため、粟嶋（あわしま）という」

と記されている。

粟島は、今では米子市内と陸続きであるが、江戸時代までは中海に浮かぶ小さな島であった。

そこには、粟島神社（鳥取県米子市彦名町）があり、少彦名命が祭られている。

少彦名命は粟島に寄留していたため、この地から船出して、九州に向かったのであろう。


毛志山
糸江山
墓野山
小倉山
大倉山
方結郷
栗江埼
美保郷
土島
法吉郷
山口郷
手染郷
戸江刻
美保浜
加努夜浜
濱田比浜
美保埼
島根郡家
女岳山
布自枳美高山
朝酌郷
前原埼
蝦蟇島
蜈蚣島
夜見島（伯耆国）
邑美冷水
大井浜
塩楯島
代郷
神名樋野
入海
国府
意宇郡家
黒田駅
筑陽川
揖屋神社
羽島
砥神島
比売埼
粟島
子島
門江浜
大草郷
荻山
高野山
暑垣山
野城駅
舎人郷
安来郷

第一回目の使者は天穂日命(天菩比命)

少彦名命を引き揚げた高天原は次の手を打った。

このころ、高天原勢力――後期・邪馬台国の政権の中枢は、九州の豊前地方ないし遠賀川流域にあった。

タカミムスビと娘の万幡豊秋津師比売命および娘婿の天忍穂耳命で構成され、万幡豊秋津師比売命は天照大神の称号を継承していたとみられる。

『魏志倭人伝』によれば、卑弥呼の後継者の台与の時代である。すなわち、西暦 248 年から 270 年ごろの時代である。

天照大神＝卑弥呼、タカミムスビ(高皇産霊尊)＝難升米(ナムスビ)、豊秋津師比売＝台与(とよ・豊)とみて、高天原(後期・邪馬台国)と出雲の双方の活躍年代を推定すれば、一応次のようなグラフになろう(現時点での暫定的な試算)。

		240	250	260	270
天照大神＝卑弥呼	180～247				
タカミムスビ＝難升米	239～？				
豊秋津師比売＝台与	248～270				
天忍穂耳命	248～？				
スサノオ	248～255				
大国主命	255～260				
ニニギノミコト	260～265				
ニギハヤヒ	260～265				

・260 年ごろ①出雲の国譲り→②日向への天孫降臨→③ニギハヤヒの東遷

・266 年に台与が西晋に使節団を派遣

少彦名命を引き揚げた高天原が放った次の一手は、出雲へ使者を派遣し、「出雲の国譲り」を迫るというものであった。

『古事記』によると、高天原の天照大神は、「葦原中国は私の子の正勝吾勝勝速日天忍穂耳命（あめのおしほみみ）が治めるべき国である」と天降りを命じたが、天忍穂耳命は天の浮橋から下界を覗き、

「葦原中国は大変騒がしく、手に負えません」

と天照大神に辞退を申し出たという。天忍穂耳命はここぞというときに常に消極的であり、影の薄い存在である。舅（しゅうと）のタカミムスビに実権を剥奪され、無気力な人間になり果てていたのであろう。

タカミムスビが天照大神（娘の豊秋津師姫のこと）の命令を受けて、天の安の河原に八百万の神を集めて評議を行ない、タカミムスビの子の思金神（オモイカネ）が次のように提案したという。

「この葦原中国は、我（天照大神）の御子（天忍穂耳命）の知らす国（治める国）と定めている。にもかかわらず、出雲は粗暴な土着の神（大国主命）が治めている。これを平定したいと思うが、誰を派遣したらよいだろうか」

そうして選ばれたのが天照大神の次男とされる天穂日命（あめのほひ・天菩比命）である。

しかしながら、『古事記』によると、天穂日命は大国主神の家来となり、3 年経っても高天原に戻らなかった。

『日本書紀』第二神代下・第九段にも、

「ところが、遣わされた天穂日命は国津神の長の大己貴神（大国主命）に媚びて、3 年たっても戻らなかった」

と、書かれている。

懐柔されてしまったのである。

第二回目の使者は大背飯三熊大人（おおそび・の・みくまの・うし）

『日本書紀』によると、次に派遣されたのは、天穂日命の子の大背飯三熊大人（おおそび・の・みくまの・うし）またの名は武三熊大人（たけ・みくまの・うし）であったが、彼もまた父と同様に懐柔され、高天原に戻ってこなかった。

『延喜式』巻第八（祝詞の巻）にも、「天穂日命の子、建三熊之命」として出てくる。

大人（うし）は命（みこと）とおなじく尊称とみられ、背飯（そび）は、鳥の名であるという（『日本書紀（一）』（岩波書店）補注）。

第三回目の使者は天稚彦（天若日子）

『日本書紀』によれば、次に派遣されたのは天国玉（あまつくにたま）の子の天稚彦（あめの・わかひこ）である。『古事記』では天若日子と書かれる。父の天国玉の来歴は不明である。

タカミムスビは、天稚彦に天鹿児弓と天羽羽矢を授けて出雲に派遣した。

弓と矢は高天原からの正式の使者であることの印であり、武力討伐も辞さないとする決意のあら

われでもあり、魔除けの品でもある。

しかも、それを授けたのはタカミムスビである。

まるで、高天原＝邪馬台国の代表者はタカミムスビのようではないか。

安本美典氏の分析によると、天照大神が死去したとみられる天の岩戸以降、天照大神が単独で行動することはほとんどなくなり、タカミムスビ(高皇産霊尊)が最高主権者的に行動することが多くなるという。

表 5　『古事記』における最高主権者的存在の変化

	天の岩屋事件以前	天の岩屋事件よりあと	計
天照大御神がひとりで行動	16	6	22
高御産巣日の神とペアで行動	0	7	7
高御産巣日の神だけが最高主権者的に行動	0	2	2
計	16	15	31

●テキストは、日本古典文学大系『古事記　祝詞』（岩波書店刊）による。

表 6　『日本書紀』における最高主権者的存在の変化

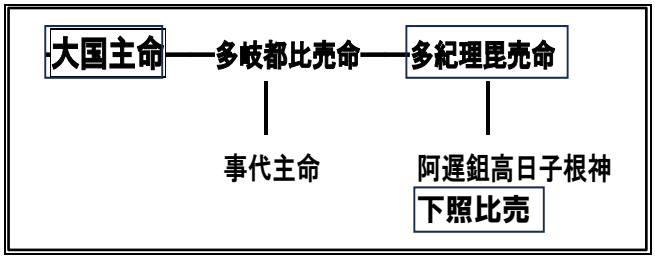
	天の岩屋事件以前	天の岩屋事件よりあと	計
天照大御神がひとりで行動	18	1	19
高御産巣日の神だけが最高主権者的に行動	0	12	12
計	18	13	31

『古事記』では、タカミムスビが天照大神(おそらく娘の豊秋津師姫)とペアで行動するケースが大きく増大し(0→7)、タカミムスビが単独で行動するケースも増加している(0→2)。

『日本書紀』では、タカミムスビが単独で行動するケースがほとんどとである(0→12)。

それはともかく、タカミムスビの期待に反して、出雲に出向いた天稚彦は、事もあろうに、大国主神の娘の下照比売（したてるひめ）と結婚して、「我は葦原中国を得よう」――すなわち、「出雲の王になろう」といって、高天原に戻らなかった。

大国主命の懐柔策は強烈で、娘を授けるどころか、出雲を授ける約束まで行ったのである。



下照比売は、大国主命と宗像三女神の一人の多紀理毘売命(タギリヒメ)との間に生まれた娘で、阿遅鉏高日子根命の妹である。『日本書紀』によれば、高姫、稚国玉(わかくにたま)とも呼ばれたという。

ところが、下照比売の夫となった天稚彦と兄の阿遅鉏高日子根命がそっくりであったことから、のちに大きな騒ぎとなる。

いずれにしても、ここにきて、

――どのような策を用いても、高天原との交渉に応じない。無視する。

という大国主命の断固たる姿勢が明らかとなった。

第四回目の使者は雉の鳴女(なきめ)

そこでタカミムスビらは、天稚彦の動向を探るため、『古事記』では「雉子名鳴女(きぎしななきめ)」、『日本書紀』では「無名雉(ななしきざし)」という一人の女性を派遣した。

もちろん鳥ではなく、人のことである。『古事記』では本物の雉のように書かれた場面もあるが、伝承の過程で誇張されたものというべきである。

古代日本において、葬式のときに雇われて号泣する泣き女(なきめ)がいた。

日本列島で広く行われていた風習である。伊豆諸島や壱岐・対馬、南西諸島などの島々でもおこなわれていた。

泣き女(なきおんな)ともいう。地域によっては、「ナキババ(泣婆)」「ナキバアサン」「トムライババ」などとも呼ばれた。

「五合泣き」「一升泣き」「二升泣き」など、謝礼の量に応じて泣き方を変え、多人数でコーラスまでおこなったともいわれる。

葬式を求めて、旅芸人のように各地を旅する泣き女もいたであろう。

日本最古の「泣き女」の記録は、『古事記』のイザナギの涙から生まれた「泣沢女神(なきさわめのかみ)」とみられる。

古代日本、北海道アイヌ、朝鮮半島、中国、台湾、ベトナムなどアジア各地はもとより、ヨーロッパや中東など世界各地においてもみられた風習であった。

出雲に派遣された雉の鳴女(なきめ)も、旅する泣き女の一人であったかもしれない。密偵にうってつけである。

思金神らは、雉の鳴女に対して、天稚彦の動向を探索するよう命じ、もし天稚彦に直接会えた場合には、「何ゆえ本来の使命を忘れて、何の報告もしないのか」と伝えるよう命じた。

出雲に着いた雉の鳴女は、本物の雉のごとく天稚彦の家の門の楓の木の上に飛び降りた。

もちろん、『古事記』は雉のごとく誇張された伝承をそのまま記している。

木の上の雉が、「何ゆえ出雲を平定するという本来の使命を忘れて、何年も報告しないのか」と叫んだ。

ところが、その声を天佐具売(あめのさぐめ)なる女性が聞きつけた。

『日本書紀』には、「天探女(あめのさぐめ)」と書かれているから、天稚彦の身辺に仕えて不審者

を探る役目の女性であったろう。

「あの鳥の鳴き声は不吉です。射殺すべきです」と、天稚彦に進言した。

そこで、天稚彦はタカミムスビから授けられた弓矢（天鹿児弓と天羽羽矢）で雉の鳴女を射殺した。

ところが、その矢がそのまま高天原まで飛んで行った。

――というのが『古事記』の記事であるが、そのようなことが現実にあるわけがない。

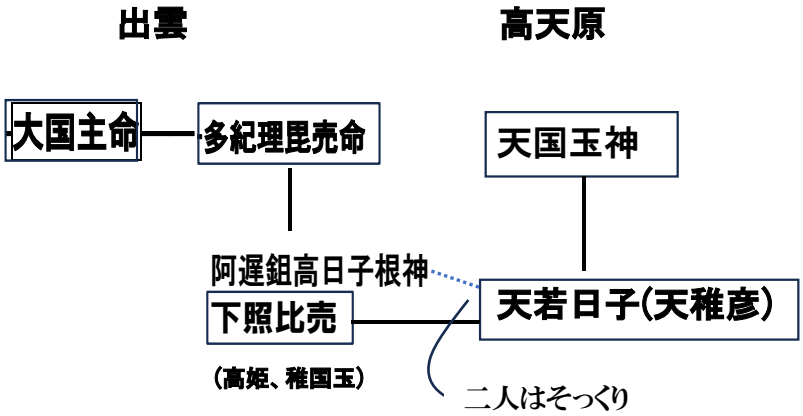
雉の鳴女の仲間が、矢を引き抜いて高天原に届けたのであろう。

その矢を手にしたタカミムスビは、

「天若日子(天稚彦)に邪心があるならばこの矢に当たれ」

と誓約をして、天から地上に落とすと、寝ていた天若日子の胸に刺さり、死んでしまった。

これまた非現実的な話で、実際には高天原方の刺客に暗殺されたのであろう。



天若日子の死を嘆く下照姫の泣き声が出雲から高天原まで届くと、天若日子(天稚彦)の父の天国玉神は下界(おそらく出雲)に降りて、遺体を高天原に移して喪屋を建てて、八日八夜の殯(もがり)をした。

出雲から下照姫の兄の阿遲鉏高日子根命が弔いに訪れたところ、天若日子とそっくりであったことから、天若日子の父母は、「生きていたのか」と大喜びして抱きついた。

それに対して、阿遲鉏高日子根命は、「穢らわしい死人と間違えるな」と憤激し、神渡剣を抜いて喪屋を斬り倒し、足で蹴飛ばした。

蹴られた喪屋は、空に舞い上がり、美濃の藍見川の喪山まで飛んでいった。――というのが『古事記』の記事である。

出雲から美濃(岐阜県)まで 370 km、宗像からでも 615 kmも離れており、荒唐無稽の記事としかおもえないが、驚くべきことに岐阜県美濃市の「喪山」の「喪山天神社」(岐阜県美濃市大矢田)には天若日子が祭られている。

しかも、天若日子に関連した伝承が数多く残されており、『古事記』の記事にもそれなりの理由がありそうなのである。

「喪山神話」伝承遺蹟の説明

① 喪山……阿遲志貴高日子根神の蹴った喪屋が飛んでいった所「この地」です。天若日子を祀る。
② 鳴射田……天若日子が、射落とした矩が落ちた場所。
③ かつら淵……雉鳴女がとまった、「湯津桃」の木があったとされる場所。
④ 矢落街道（日室坂ともいう）……天照大御神からの、返し矢が落ちて来た場所。日室とは、喪山から見て太陽の射す方向を言う。
⑤ 渡来川……返し矢が流れて来た川。
⑥ 大矢田……大きな矢の落ちた田と云う言い伝えから大矢田の地名となる。
⑦ 誕生山……天若日子の召使いの神、天探女を祀る。（現在は、極楽寺の八幡神社に合祀している）

考えられるのは、天若日子と下照比売の末裔が、後の時代にこの地に寄留もしくは移住して伝承を残した可能性である。

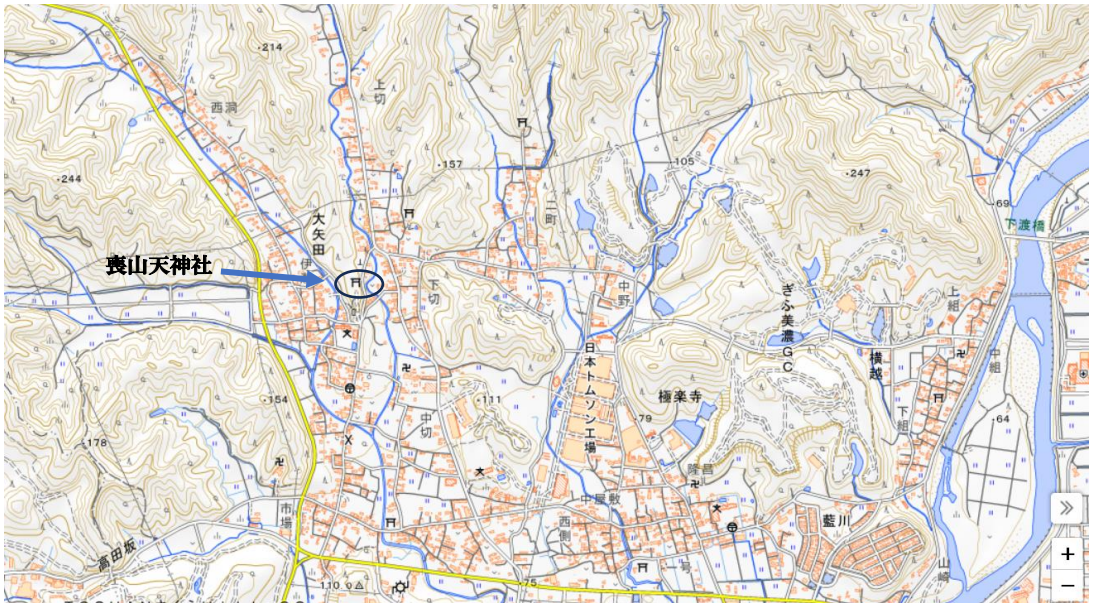
この『日本古代通史』第一巻のプロローグにおいて、飛騨の鉄鏡について述べたことがある。

美濃市の喪山北方約 75 キロに位置する岐阜一之宮神社(岐阜県高山市国府町名張宇宮の前)に伝わる鉄鏡のことである。

この一之宮神社の祭神が、天若日子の妃の下照姫命なのである。

やはり、美濃地方と下照姫命とは何らかのつながりがある。

とすれば、飛騨の鉄鏡についても、下照姫命との関連を考慮すべきかもしれない。



「喪山神話」について

天照大御神は、大国主命の治める葦原中津国（出雲の国）を自分の子どもに治めさせるために、先ず天之忍穂耳命を遣わしましたが、大国主命に婚ひて三年たっても戻りませんでした。そのため今度は天若日子に天之麻迦古弓（弓）と天之波波矢（矢）を持たせて遣わしました。しかし天若日子は、大国主命の娘の下照比売と結婚し、八年戻りませんでした。

天照大御神は、いつまでも戻らない天若日子の様子を伺う為に雉鳴女を遣わしました。雉鳴女は湯津桃の上で伝言を伝えましたが、天探女が「この鳥の鳴き声は不吉です。すぐに射殺してしまってください。」と天若日子をそそのかしたため、天若日子は、先にもらった弓矢で雉鳴女を射殺してしまい、その矢は天照大御神のところまで飛んでいきました。

天照大御神は「もし天若日子が、この矢を悪い事に使ったなら、この矢に当たって死んでしまえ。」と言って投げ返したところ、天若日子はこの矢に当たり死んでしまいました。

天若日子の死を下照比売をはじめ遺族達が「喪屋」を作って嘆き悲しんでいるところへ、天若日子と大変容姿の良く似た友人の、阿遲志貴高日子根神が弔いに訪れました。遺族達は、天若日子が生き返ったと喜んですがりつきましたが、死人と間違われた阿遲志貴高日子根神は大変怒って、十拳剣を抜き「喪屋」を切り伏せ、蹴飛ばしました。そのときの「喪屋」が飛んでいって、この地の「喪山」となったのです。

阿遅鉏高日子根命(アジスキタカヒコネ)

この際、アジスキタカヒコネについても、述べておこう。

一般的にはあまり知られていないが、きわめて重要な人物である。もちろん地上の人間であり、天上界の神(ゴッド)ではないことは、これまで読み続けられた読者にはいうまでもなかろう。

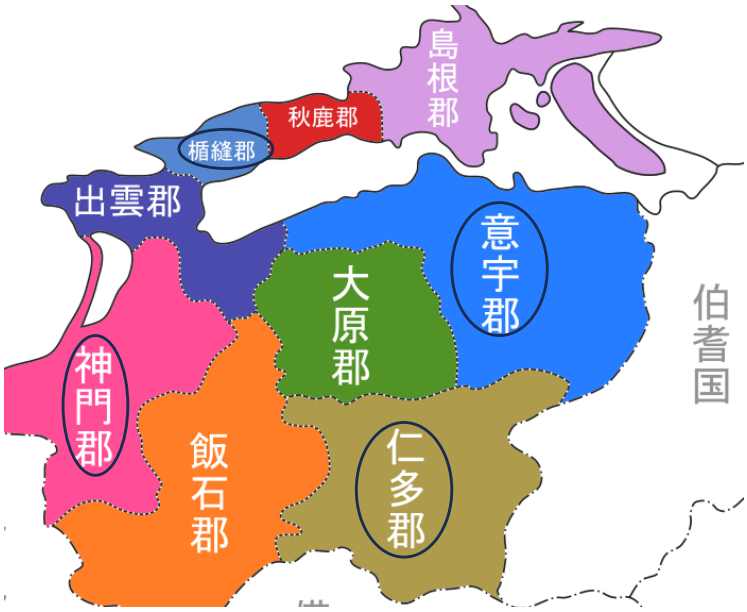
父は大国主命で、母は多紀理毘売命(タギリヒメ)、妹は下照姫命である。

『出雲国風土記』には、妻子の名も記されている。

アジスキタカヒコネの家族

	古事記	日本書紀	出雲国風土記	
本人	阿遅鉏高日子根神 阿遅志貴高日子根神 阿治志貴高日子根神 迦毛(かも)大御神	味耜高彦根神		
妻			天御梶日女命 (あめのみかじひめ)	
子			多伎都比古命 (たきつひこ)	神名樋山(かんなび)の石神は多伎都比古命の御魂。雨乞いをすると雨を降らせる
子			塩冶毘古能命 (やむやひこ)	塩冶郷(かむや)に鎮座していた

『出雲国風土記』には、下記のとおり、意宇郡、楯縫郡、神門郡、仁多郡の条にアジスキタカヒコネに関する記事が載せられている。



『出雲国風土記』のなかに出てくるアジスキタカヒコネ

地　名	現在地	記　　事
賀茂の神戸 (意宇郡)	安来市 大塚町	天の下をお造りになった大神の命の御子、阿遅須枳高日子の命は葛城の賀茂の社にご鎮座している。この神の神戸である。だから、鴨といった。正倉がある。
神名樋山 (楯縫郡)	出雲市 大船山	古老が伝えて言うことには、阿遅須枳高日子の命の后の天御梶日女命が、多忠の村に来られて多伎都比古の命をお産みになった。
塩冶の郷 (神門郡)	出雲市 塩冶町	阿遅須枳高日子の命の御子、塩冶毘古（やむやひこ）命が鎮座していた。だから、止屋(やむや)といった。
高岸の郷 (神門郡)	出雲市 塩冶町	天の下をお造りになった大神の御子、阿遅須枳高日子の命が昼も夜も、きつくお泣きになった。そこで、そこに高床の建物を造って、住まわせられた、そして高い梯子を立て、（世話係を）登り降りさせてお世話した。だから、高崖(たかぎし)といった。
三澤の郷 (仁多郡)	雲南市 奥出雲町	大神大穴持の命の御子、阿遅須伎高日子の命はひげが八握ほどにも伸びるまで、昼も夜も泣くばかりで、しゃべることができなかった。 その時、御親の大神が、御子を船に乗せて多くの島々に連れめぐって、心をなごませようとされたが、やはり泣き止むことはなかった。 大穴持命が「御子が泣くわけをお教えください」と祈ると、その夜、御子と言葉が通じるようになったの夢を見た。そこで目覚めて御子に問いかけると、御子は「御澤(こさわ)」と口にした。 そのとき、大穴持命が「どこをそう言うのか」と尋ねると、御子は大穴持命の前から立ち去り、石の多い川を渡って板の上に留まり「ここです」といった。 そのとき、その澤の水沼で沐浴をした。だから、国造（こくそう）が神吉事（かんよごと）を奏上するために朝廷に参内するとき、その水沼の水を初めに用いるのである。これによって、今も産婦はその村の稲を食べない。もし食べると、生まれながらにして子はものを言う。だから、三澤という。

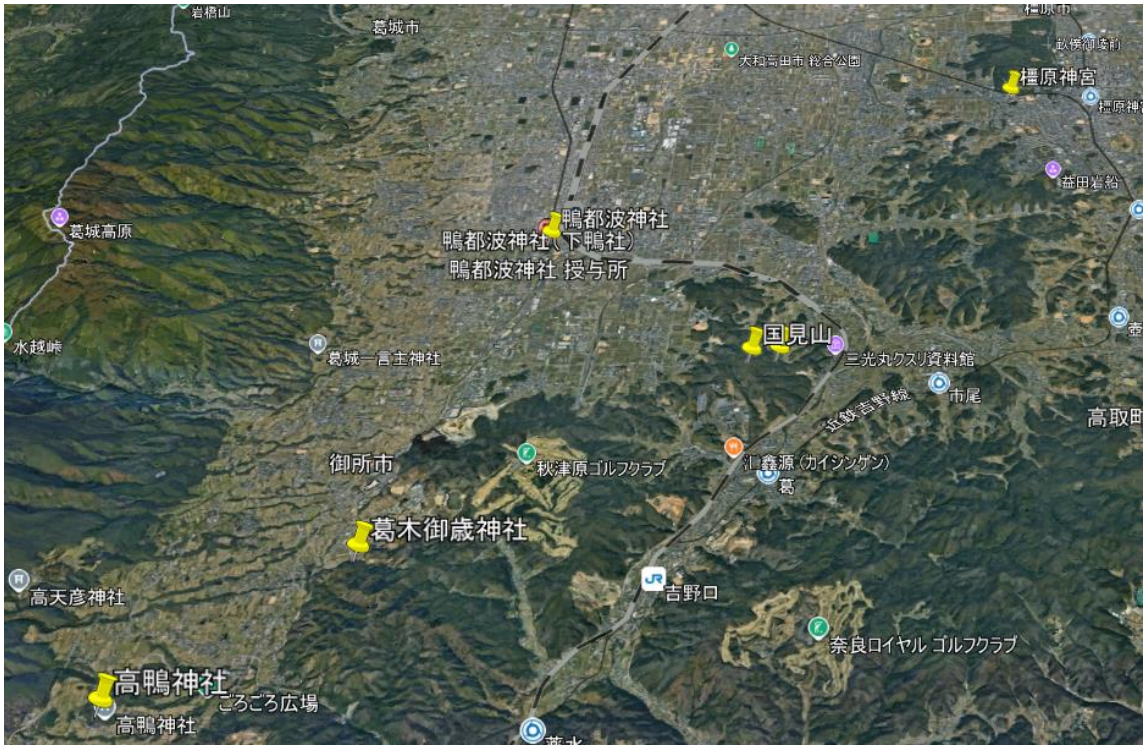
出雲の国譲りのあと、大和の葛城に祭られる

賀茂の神戸(意宇郡)の条では、アジスキタカヒコネは「葛城の賀茂の社にご鎮座している」と書かれている。

高鴨神社(奈良県御所市鴨神)のことである。アジスキタカヒコネは迦毛之大御神として祭られている。京都市の賀茂神社（上賀茂神社・下鴨神社）を始めとする全国のカモ系（鴨・賀茂・加茂）神社の総本社とされる。

なお、御所市には上鴨社の高鴨神社のほか、中鴨社の葛木御歳神社と上鴨社の鴨都波神社の二社が祭られている。

上鴨社	高鴨神社	奈良県御所市鴨神	鴨一族の発祥地 アジスキタカヒコネが出雲から移住？
中鴨社	葛木御歳神社	奈良県御所市東持田	東持田に移った鴨一族
下鴨社	鴨都波神社	奈良県御所市宮前町	葛城川の岸辺に移った鴨一族



アジスキタカヒコネが、何ゆえ大和の葛城に祭られることになったのか、「出雲国造神賀詞（かんよごと）」のなかに、その経緯が記されている。

すなわち、出雲の国譲りののち、

「大穴持命（大国主命）は自分の和魂（にぎたま・大物主神）を大御和社（大神神社）に、さらに子の阿遅須伎高孫根命を葛木の鴨の神奈備に、事代主命を宇奈提（うなて）の神奈備に、賀夜奈流美命を飛鳥の神奈備に鎮座させて、皇室の守護神とした」

というのである。

しかしながら、「出雲の国譲り」の時代には、大和政権はいまだ成立していないので、「皇室の守護神」になれるはずはない。「皇室」を「高天原」に読み替えなければならない。

当時の大和地方は、九州の高天原（筑紫）や出雲にくらべたら、はるかに後進的な地域であった。

大国主命は、出雲から遠く離れたいまだ未開の大和地方に移住させることによって、高天原への敵意がないことを意思表示したのであろう。まさか、その地が後の時代に政治の中心地になろうとは、毛ほども思ってもいなかったはずである。

大国主命の和魂	大御和社	大神神社	奈良県桜井市
阿遲須伎高孫根命	葛木の鴨の神奈備	高鴨神社	奈良県御所市
賀夜奈流美命	飛鳥の神奈備	飛鳥坐神社 加夜奈留美命神社	奈良県高市郡 奈良県高市郡

賀夜奈流美命は、『古事記』にも『日本書紀』にも登場しないため、大国主命の子であるにしても、男子か女子であるかも含めていっさい不明である。

ただし、『延喜式交替式』と『類聚三代格』には「賀屋鳴比女」とあるから、女子であった可能性が高いというべきかもしれないが、いずれにしても詳細は不明である。

出雲郡の阿須伎神社

なお、『出雲国風土記』(733 年)には、アジスキタカヒコネを祭る阿須伎神社が、出雲郡に 38 社もあったことが記されている。『延喜式』(905 年)にも、おなじく出雲郡に 11 社の阿須伎神社が記されている。

これらのうち、現存するのは、阿須伎神社(出雲市大社町遙堪 1473)一社のみである。

江戸時代の岸崎時照著『出雲国風土記抄』(1683)によれば、寛文年間(1661～73)に 1 社を除き残りはすべて出雲大社に遷されたという。

阿須伎神社

そもそも、何ゆえに、38 社もの阿須技神社が、出雲大社の所在する出雲郡につくられたのか。

その理由は想像するしかないが、子のアジスキタカヒコネが 38 の社で結界を張って、出雲大社の大国主命を守護しようとしたのか、あるいは、出雲から追放されたアジスキタカヒコネに同情を寄せた出雲の住民たちが、大国主命を守護するために阿須技神社をつくったのか。

ということは、アジスキタカヒコネが、大国主命の有力な後継候補であった可能性も考えられるかもしれない。

播磨国とアジスキタカヒコネ

アジスキタカヒコネは、播磨国(兵庫県)にも足跡を残している。

すでに述べたように、播磨国には大国主命の伝承も数多く残されており、畿内方面あるいは瀬戸内海方面に対する出雲の前進基地としての性格を有していたとみられる。

アジスキタカヒコネが拠点としたのは、「新次(にいすき)神社」(姫路市豊富町御蔭市)の地といわれる。ただし、この神社は江戸時代には葛城権現社と呼ばれており、明治初年に姫路藩が新次神社と改称したもので、元宮は山田町地区にあったといわれる。

新次神社

摂津国とアジスキタカヒコネ

大阪市東成区東小橋三丁目――もと東小橋(ひがしおばせ)字大小橋(おおおばせ)に、「比売許曾神社」があり、下照比売を主祭神として、スサノオ・アジスキタカヒコネ・大小橋命・大鷦鷯命(仁徳天皇)・橘豊日命(用明天皇)が祭られている。

下照比売とはもちろんアジスキタカヒコネの妹で、大小橋命（おおばせのみこと）は神功皇后とともに朝鮮に出兵した中臣烏賊連(雷大臣)である。武内宿禰の身代わりとして自決した壱岐真根子命は大小橋命の弟に当たる。

比売許曾神社

土佐とアジスキタカヒコネ

高知市一宮（いっく）） しなね 2 丁目に土佐国一の宮の「土佐神社」がある。

『日本書紀』では「土左大神」、『土佐国風土記』逸文では「土左高賀茂大社」、『延喜式』および『日本三代実録』では「都佐坐神社」と記されている。

一言主神（ひとことぬし）について、『古事記』は「葛城之一言主大神」、『日本書紀』は「一事主神」と記す。

『古事記』によると、雄略天皇が葛城山へ鹿狩りをしに行ったとき、天皇一行と全く同じ恰好の一行が向かいの尾根を歩いているのを見つけた。雄略天皇が名を問うと「吾は悪事も一言、善事も一言、言い離つ神。葛城の一言主の大神なり」と答えた。天皇は恐れ入り、弓や矢のほか、官吏たちの着ている衣服を脱がせて一言主神に差し上げ、『日本書紀』によると、雄略天皇と狩りをして楽しんだとう。

一言主神（ひとことぬし）について、『古事記』は「悪事・善事も一言で言い放つ神」とするが、その系譜およびアジスキタカヒコネとの関係はまったく不明である。

葛城地方を本拠としたアジスキタカヒコネの末裔の賀茂氏が、土佐に勢力を及ぼす過程でおなじ葛城地方の一言主神を、権威を高めるために付け加えたのであろう。

「アジスキタカヒコネ＝一言主神」とする説もあるが、時代が大きくかけ離れているため、この説は成り立たない。

土佐神社

なお、『播磨国風土記』、『摂津国風土記』逸文、『土佐国風土記』に記されたアジスキタカヒコネに関する記事は下表のとおりである。参考にされたい。

風土記	記　事	備　考
『播磨国風土記』 神前郡多駝(ただ)里 【邑日野(おおわちの)】	阿遅須伎高日古尼命が新次(にいすき)の社におられて、神宮をこの野に造られた時、大輪茅を刈りめぐらして垣とされた。だから、邑日野と名づけた。	延喜式内社・新次神社
『摂津国風土記』逸文 【味耜山・大小橋山】	大小橋山（おおおばせやま）。松・杉は、建築材にすると良い。また茯苓・細辛が採れ、珍しい石や金玉なども産出する。 昔は高い山であったので、山頂からは武庫の港までも見えたという。 味耜高彦根命が、この山に天降られた時から味耜山と名付けたということである。	比売許曾神社
『土佐国風土記』 【高賀茂の大社】	土左の郡。郡の役所の西の方角へ行くこと四里の所に土左の高賀茂の大社がある。 その祭神の名を一言主の尊だとしている。 その祖先神はよくわからない。 一説では大穴六道（おおなむじ）の尊の御子神である味鉏高彦根尊であるとしている。	土佐神社

第五回目の使者は建御雷命

以上のとおり、第四回目の使者の雉の鳴女を出雲に派遣したものの、またしても失敗してしまった。そこで、天照大神(豊秋津師姫のこととみられる)が八百万の神々に今度はどの神を派遣すべきかと問うと、思金神と八百万の神々は、

「天の安の河の河上の天の岩屋にいます伊都之尾羽張之神(イツノオハバリ)か、その子の建御雷神(タケミカヅチ)を遣わすべきです」

と答えた。

天之尾羽張(アメノオハバリ)も、「建御雷神を遣わすべきです」と答えたので、建御雷命を派遣することが決定した。

タケミカヅチの表記

古事記	建御雷之男神、建御雷神、 別名に建布都神(タケフツ)、豊布都神(トヨフツ)
日本書紀	武甕槌神、武甕雷神
先代旧事本紀	建甕槌之男神、武甕雷男神、建雷命

建御雷神は、『古事記』では、イザナギが火神火之夜芸速男神(カグツチ)の首を切り落とした際、十束剣(天之尾羽張・アメノオハバリ)の根元についた血が岩に飛び散って生まれた三神の一柱とされる。剣の別名は伊都之尾羽張(イツノオハバリ)という。

『日本書紀』では、このとき甕速日神(ミカハヤヒ)という建御雷命の祖が生まれたという伝承と、建御雷命もそのとき生まれたという伝承を併記している。

建御雷命の父祖の名とイザナギの剣

	父祖の名	イザナギの剣(十束剣・十握剣)
古事記	天之尾羽張神(アメノオハバリ) 稜威雄走神(イツノオハバリ)	伊都之尾羽張(イツノオハバリ) 天之尾羽張神(アメノオハバリ)
日本書紀	【本文】 建御雷命は稜威雄走神の四世の孫 ① 稜威雄走神(イツノオハシリ) ② 甕速日神(ミカハヤヒ) ③ 熯速日命(ヒノハヤヒ) ④ 武甕槌神(タケミカヅチ・建御雷神)	稜威雄走神(イツノオハシリ)

・「オハバリ」ないし「オハシリ」は「剣」を意味するという(福永酔剣『日本刀大百科事典』雄山閣)

天鳥船神

『古事記』には、

「天鳥船神(あめのとりふね)を建御雷命に副(そ)えて葦原中国に遣わしたまひき」

とあるから、建御雷命は、おそらく特別の軍船を与えられ、多くの兵卒とともに船団を編成して出雲に向かったのであろう。

天鳥船神について

古事記	鳥之石楠船神 天鳥船	イザナギとイザナミから生まれる	
古事記	天鳥船神	建御雷命の副使のようにして出雲に派遣された。	・美保湾にいた事代主神の意見を聞くために天鳥船神を使者として派遣 ・『日本書紀』では稲背脛(いなせはぎ)を熊野諸手船(もろたぶね)で派遣 ・美保神社の諸手船神事の由来
日本書紀	天磐櫲樟船 (あめのいわくすふね) 鳥磐櫲樟船 (とりのいわくすふね)	イザナギ・イザナミが産んだ蛭児(ひるこ)を乗せて流す。	『古事記』では蛭子が乗っていったのは葦船(あしぶね)とされる。

毎年 12 月 3 日、美保関漁港において美保神社(松江市美保関町)の「諸手船(もろたぶね)神事」が行われる。

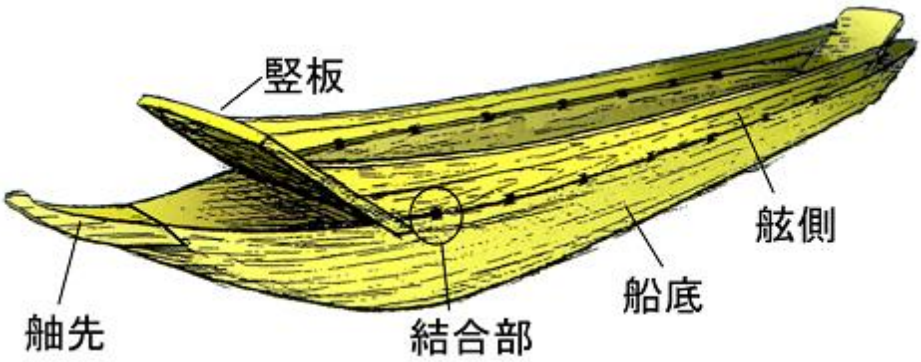
そのとき用いられる二隻の諸手船(もろたぶね)は、かつては一本のクスノキの巨木を刳りぬいた刳舟であったという。40 年ごとに作り変えられる。

現在の二隻の諸手船は、1978 年(昭和 53)に建造されたもので、モミの木で造られている。なお、美保神社の収蔵庫には、1940 年(昭和 15)に建造されたクスノキの古船が保管されているという。

いずれにしても、九人乗り程度の刳舟――小さな丸木舟であり、外洋航海には不向きの船である。したがって、諸手船は建御雷命が乗ってきた天鳥船神をモデルにしたものではないとみられる。

美保神社天祭（十二月三日）諸手船神事

弥生時代後期～古墳時代前期の下長遺跡(滋賀県守山市)からは、船底と舷側板を結合した全長約 6 メートルの準構造船が出土しており、弥生時代後期の大国主命の時代に、準構造船が開発されていたことは確かである。



下長遺跡の準構造船復元想像図(『守山市史』)

以上のことから、建御雷命が乗ってきた天鳥船は、かなりの大型の準構造船であった可能性も考えられよう。

(以下、つづく)

季刊「ふくおかアジア」に連載された河村哲夫氏の論文
【2024 年 9 月から】

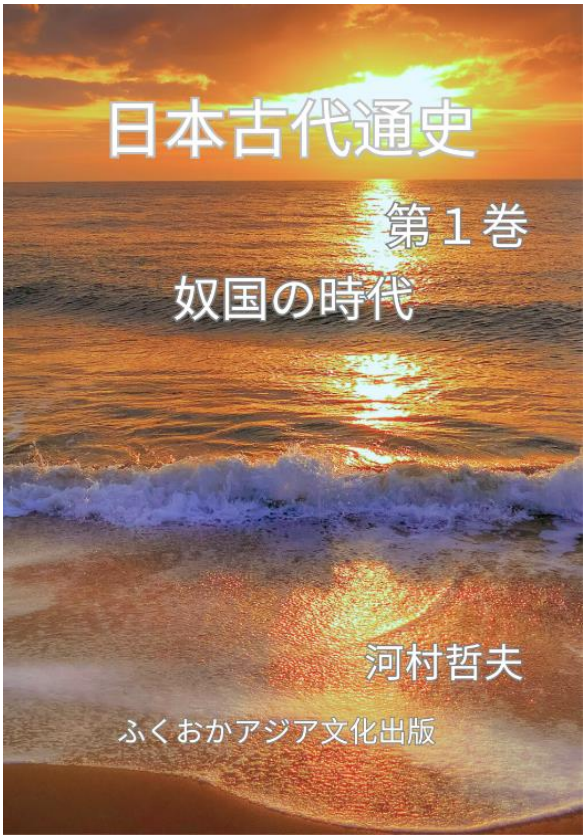
季刊「ふくおかアジア」	日本古代通史・連載回数	テーマ
創刊号(2024 年 9 月) 3 論文一挙掲載！	第 32 回【後期・邪馬台国の時代⑪】	出雲の国譲り
	第 33 回【後期・邪馬台国の時代⑫】	出雲大社
	第 34 回【後期・邪馬台国の時代⑬】	出雲の銅鐸

河村哲夫著『日本古代通史』の連載・発売状況

○『日本古代通史』 第一巻　奴国の時代

【令和 6 年(2024)9 月アマゾン kindle 版にて発売開始】

テーマ	季刊古代史ネット掲載号
【Ⅰ】卑弥呼の鏡 【Ⅱ】天照大神の鏡	第 1 号(2020 年 12 月)
【Ⅰ】邪馬台国前史としての奴国 【Ⅱ】高天原の神々	第 2 号(2021 年　3 月)
朝鮮半島南部の倭人の痕跡	第 3 号(2021 年　6 月)
北部九州のクニグニ	
奴国の神々	第 4 号(2021 年　9 月)



○『日本古代通史』 第二巻　邪馬台国の時代①

【令和 6 年(2024)10 月アマゾン kindle 版にて発売予定】

テーマ	季刊古代史ネット掲載号
卑弥呼の登場	第 5 号(2021 年 12 月)
卑弥呼の外交①	第 6 号(2022 年　3 月)
卑弥呼の外交②	第 7 号(2022 年　6 月)
【邪馬台国への道】 三韓諸国	第 8 号(2022 年　9 月)
対馬と壱岐	
末盧国と西海の島々	第 9 号(2022 年 12 月)
末盧国から伊都国へ	第 10 号(2023 年 3 月)
伊都国から奴国へ	第 11 号(2023 年 6 月)

○『日本古代通史』 第三巻　邪馬台国の時代②

【令和 6 年(2024)11 月アマゾン kindle 版にて発売予定】

テーマ	季刊古代史ネット掲載号
夜須をゆく	第 11 号(2023 年 6 月)
朝倉をゆく	
日田をゆく	
投馬国は豊の国	第 12 号(2023 年 9 月)
狗奴国は肥の国	
狗奴国と卑弥呼の死	
卑弥呼と台与	

○『日本古代通史』 第四巻　続・邪馬台国の時代①

【令和 6 年(2024)9 月からアマゾン kindle 版にて発売中】

テーマ	季刊古代史ネット掲載号
英彦山と京都平野	第 13 号(2023 年 12 月)
神夏磯媛と豊比売命	
英彦山と宗像	
ニギハヤヒ	
スサノオと五十猛命	第 14 号(2024 年 3 月)
出雲の神々	
スサノオとクシナダヒメ	

○『日本古代通史』 第五巻　続・邪馬台国の時代②

【令和 7 年(2025)1 月アマゾン kindle 版にて発売予定】

テーマ	掲載号
隠岐の島	季刊古代史ネット 第 15 号(2024 年 6 月)
大国主命	
大国主命の国づくり	
出雲の国譲り①	季刊「ふくおかアジア」 創刊号(2024 年 9 月)
出雲の国譲り②	
出雲の銅鐸	
出雲の銅剣	季刊「ふくおかアジア」 第 2 号(2024 年 12 月予定)
ニギハヤヒと丹波	

【今後の予定】

【令和 8 年(2026)1 月アマゾン kindle 版にて発売予定】

○『日本古代通史』 第六巻　日向王朝と神武東遷①

○『日本古代通史』 第七巻　日向王朝と神武東遷②

日本古代通史・連載第 33 回

後期・邪馬台国の時代⑫
出雲の国譲り②

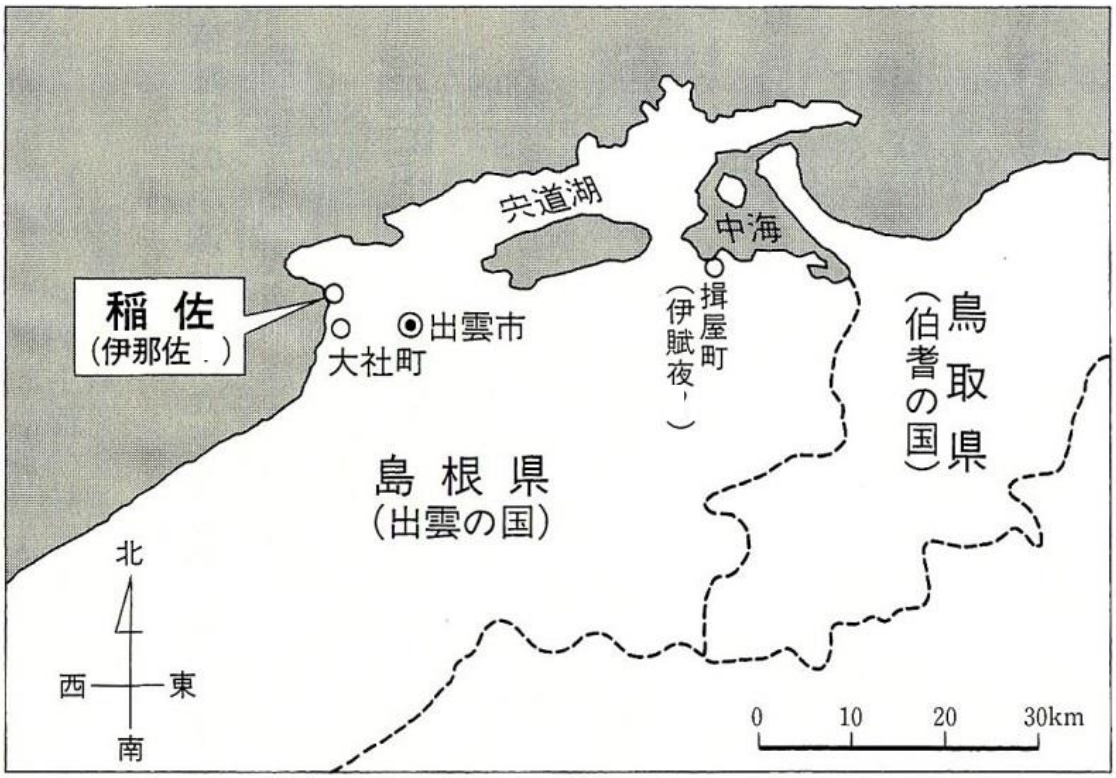
河村哲夫

『古事記』における出雲の国譲り

『古事記』は、次のように記している。

「建御雷神と天鳥船神は、出雲国の伊那佐之小浜（いなさのおはま）に降り至って、十掬剣（とつかのつるぎ）を抜いて逆さまに立て、その切先にあぐらをかいて座り、大国主神に『この国は我が御子が治めるべきであると天照大御神は仰せられた。それをどう思うか』と訊ねた。大国主神は、自分の前に息子の八重事代主神（やえことしろぬし）に訊ねるよういった。事代主神はその時、鳥や魚を獲りに出かけていたため、天鳥船神が事代主神を連れて帰り、国譲りを迫った。これに対して事代主神が『恐れ多いことです。言葉通りこの国を差し上げましょう』と答えると、船をひっくり返し、逆手を打って船の上に青柴垣（あおふしがき）を作って、その中に隠れた」

(一) 稲佐の浜



稲佐の浜の弁天島

稲佐の浜といえば、毎年旧暦 10 月 10 日(西暦では 11 月)の夕刻に神迎神事(かみむかえしんじ)が行われる。

ご承知のとおり、全国的にいえば 10 月は神無月とされているのに対し、出雲においては神在月とされ、稲佐の浜において神々を迎える神事がおこなわれる。

稲佐の浜で御神火(ごじんか)が焚かれ、注連縄(しめなわ)が張り巡らされた斎場の中に神籬(ひもろぎ・神霊が天下る木)が 2 本、傍らに神々の先導役となる龍蛇神(りゅうじゃじん)が海に向かって配置される。

神事が終わると、神籬(ひもろぎ)は両側を絹垣(きぬがき)で覆われ、龍蛇神が先導となり、高張提灯(たかはりちょうちん)が並び奏楽が奏でられるなか、参拝者が続き、稲佐の浜から出雲大社への「神迎の道」を行列が続く。

この後、出雲大社神楽殿において国造(こくそう)以下全祀職の奉仕により「神迎祭」が執り行われる。これが終わると、神々は旅(宿)社である東西の十九社に鎮まる。

神々の先導の竜蛇神は、豊作や、豊漁・家門繁栄などの神である。神迎祭終了後には特別拝礼の儀式が行われ、神在祭期間中は八足門(やつあしもん)内の廻廊に飾られる。

筆者も平成 29 年の稲佐の浜の迎神事に参加したが、

――これは、高天原の戦勝記念の祭りなのかな？

という感想を抱いたことを記憶している。

(一) 捕らえられた大国主命

建御雷神は天鳥船に乗って、伊那佐之小浜――すなわち稲佐の浜に上陸して、十掬剣（十握剣）を浜に突き立て、大国主命に国譲りを迫った。おそらく、大国主命はすでに捕らえられ、稲佐の浜に引きずり出されたのであろう。

(二)十握の剣

すでに述べたとおり、明治 11 年(1878)に石上神宮から出土した 3 尺 1 寸 5 分(95.5 ㎝)の素環頭大刀――布都御魂剣(韴霊剣)(ふつのみたまのつるぎ)とみられており、高倉下から神武天皇に伝わったものである。詳細については、「スサノオとクシナダヒメ」の章を参照されたい。

(三)事代主命

美保湾で漁をしていた事代主神のもとへ、天鳥船が赴き、事代主命を連れ帰ってきた。

事代主命は宗像三女神の一人・多岐都比売命の子である。

母方からみれば、高天原直属ともいえる血筋である。

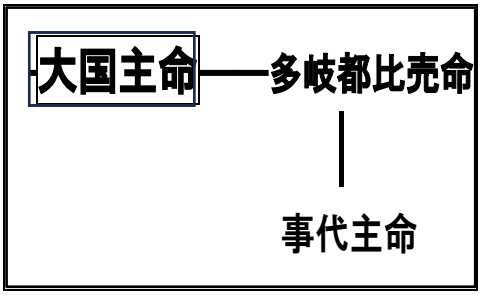
出雲が高天原に属すること自体については、それほどの抵抗はないものの、父は大国主命である。国譲りを了解したのち、

「船をひっくり返し、逆手を打って船の上に青柴垣（あおふしがき）を作って、その中に隠れた」

とあるのは、武力による威嚇に屈服したふがいなさを恥じ入ったからであろう。

伊勢物語に「かの男(をとこ)は、天の逆手(あまのさかて)を打(う)ちてなむ呪(のろ)ひ居るなる」とあるように、逆手は呪いのしぐさである。

事代主命は、その後、行方をくらました。



『古事記』はつづける。

「建御雷神が『事代主神は承知したが、他に意見を言う子はいるか』と大国主神に訊ねると、大国主神はもう一人の息子の建御名方神（たけみなかた）にも訊くよういった。その時、建御名方神が千引石（ちびきのいわ）を手の先で持ち上げながらやって来て、『ここでひそひそ話すのは誰だ。それならば力競べをしようではないか』と建御雷神の手をつかんだ。建御雷神は手を氷に変えて、さらに剣に変化させた。逆に建御雷神が建御名方神の手をつかむと、若い葦を摘むように握りつぶして放り投げたので、建御名方神は逃げ出した。建御雷神は建御名方神を追いかけ、科野(しなの)国の州羽海(すわのうみ)まで追い詰めて殺そうとした。すると、建御名方神は『恐れ入りました。どうか殺さないでください。この土地以外のほかの場所には行きません。父の大国主神や事代主神の言葉には背きません。天津神の御子の仰せのとおりに、この葦原中国を譲ります』といい、建御雷神に降参した」

(一)建御名方神

すでに述べたとおり、建御名方神の母親は越の沼河比売である。したがって、九州の高天原とは縁もゆかりもない。当然、九州の高天原勢力への屈服には断固反対の姿勢である。

力自慢の青年であったらしく、建御雷命に対して力比べによる決着を申し出た。

ところが、建御雷命の方が強く、建御名方命は簡単に投げられてしまった。

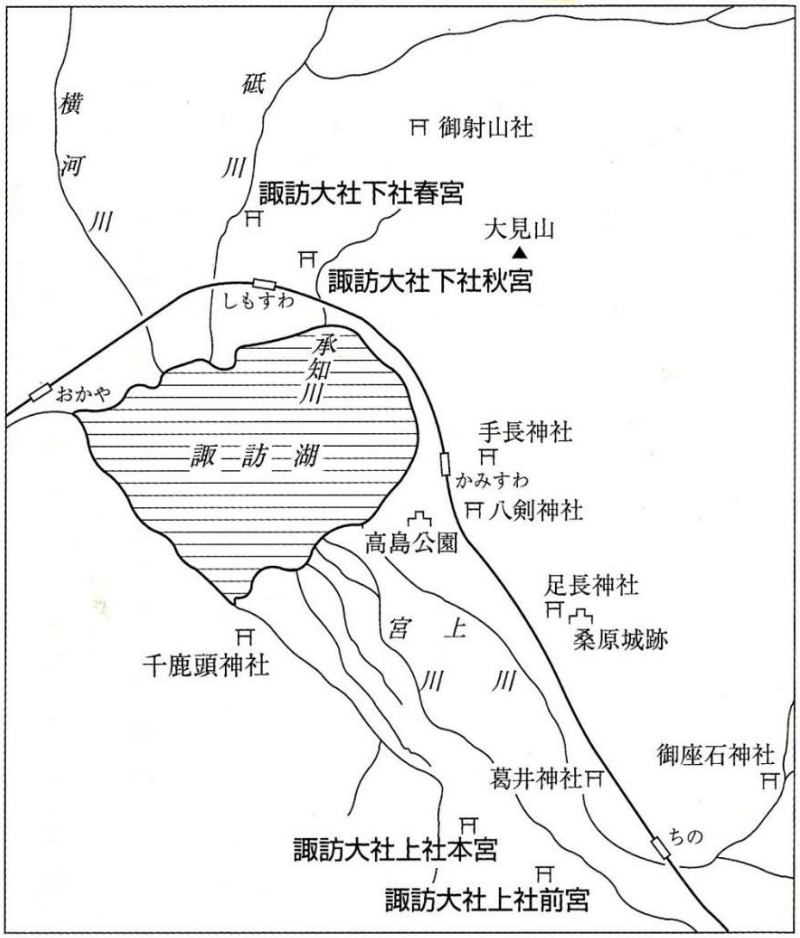
建御名方命は逃亡し、信濃国の諏訪湖(長野県諏訪市)まで逃げ延びたが、建御雷命らに追いつめられ、

① 諏訪の地から出ない。② 大国主命と事代主命に背かない。

③ 出雲の国譲りを承諾する。

の三つを約束して降参した。

(二) 諏訪大社(長野県諏訪市)



地図11　諏訪神社の場所（谷川健一編『日本の神々 9』〔白水社刊〕による）

信濃国の一の宮の諏訪大社は、健御名方神とその正妃の八坂刀売神および事代主神を祭っている。諏訪湖周辺の 4 ヶ所にある神社の総称で、式内社（名神大社）で、全国約 25,000 社といわれる諏訪神社の総本社である。

諏訪湖の南に「上社」、北に「下社」が鎮座する。

諏訪大社		祭　神	所　在　地
上社（かみしゃ）	本宮（ほんみや）	建御名方神	長野県諏訪市中洲宮山
	前宮（まえみや）	八坂刀売神	長野県茅野市宮川
下社（しもしゃ）	秋宮（あきみや）	建御名方神 八坂刀売神 事代主神	長野県諏訪郡下諏訪町武居
	春宮（はるみや）	建御名方神 八坂刀売神 事代主神	長野県諏訪郡下諏訪町下ノ原

御柱祭

社殿の四隅に御柱（おんばしら）と呼ぶ 4 本のモミの柱が立っているほか、社殿の配置も独特の形を備えている。社殿は多数が重要文化財に指定されている。柱の樹皮は、本来は剥がされていなかったが、1986 年から剥がされるようになった。

諏訪大社の御柱は寅と申の年に建て替えられ、したがって 6 年に一度（7 年目に一度）「御柱祭」が催される。

全国の諏訪神社や関連社においても、同様の祭（小宮祭）が行われる。

なお、『諏方大明神画詞』には平安時代初期の桓武天皇年間（781～806）に御柱祭を実施したとする記録がある。

最近の御柱祭の開催年は、2004 年、2010 年、2016 年、2022 年であり、次回は 2028 年である。

・4 月 2 日～4 日（上社山出し）、4 月 9 日～11 日（下社山出し）

・5 月 2 日～4 日（上社里曳き）、5 月 8 日～10 日（下社里曳き）

・5 月 7 日（下社宝殿遷座祭）、6 月 15 日（上社宝殿遷座祭）

御柱の位置

御　柱	前宮	秋宮	春宮	本宮
一之御柱	拝殿に向かって右手前			左手前
二之御柱	拝殿に向かって左手前			左奥
三之御柱	拝殿に向かって左奥			右奥
四之御柱	拝殿に向かって右奥			右手前

諏訪湖の御神渡り（おみわたり）

冬になり、諏訪湖が全面結氷すると、南の岸から北の岸へかけて氷が裂けて、高さ 30 センチ～1.8 メートル程度の氷の山脈ができる。

いつのころからか、諏訪神社上社の建御名方命が、下社の八坂刀売命のもとへ通う道といわれるようになった。

諏訪湖に御神渡りができると、八剣神社（諏訪市小和田）の御渡り神事が行われる。

八剣神社の宮司以下、氏子総代、古役、小和田各区長など約 60 名が、琵琶湖の氷の亀裂や厚さ、水中の温度などを観測し、その年の農作物や社会情勢、気候雨量などを占う。

「御神渡り」神事がいつから始まったか不明であるが、氷の観測記録が残されているのは 1443 年(嘉吉 3)からで、実に 2024 年まで 581 年にわたる観測データが残されている。

このような長期にわたる気象観測データは、世界で随一であり、内外の研究者から注目されている。

氷が氷結しない年は、「明けの海」と呼ばれ、1443 年から 1986 年(昭和 61)までの 534 年間で 44 回(欠落を含む)に過ぎず、91.8%の確率で御神渡りが出現している。

明治、大正期に御神渡りが出現しなかったのは各 2 回。昭和に入っても、太平洋戦争が終結する昭和 20 年までのわずか 2 回(昭和 7 年と昭和 12 年)に過ぎない。

ところが、1987 年(昭和 62)から 4 年連続で出現せず、1991 年(平成 3)に出現したあと、6 年連続で出現していない。

したがって、1987 年(昭和 62)から 2023(令和 5)年までの 37 年間で御神渡りが出現したのはわずか 9 回に過ぎない。出現確率は 24.3%で、明らかに気象変動が起きている。

このように、諏訪湖の御神渡りの記録は、地球温暖化の推移に関する貴重なデータとなっている。

出雲大社の由来

建御名方命を諏訪まで追い詰めた建御雷命は出雲にもどり、再度大国主命に国譲りを求めた。

すると、大国主命は、

「二人の息子が天津神に従うのなら、私もこの国を天津神に差し上げます。その代わり、私の住む所として、天津神の御子が住むのと同じくらい大きな宮殿を建てて下さい。そうすれば私は百(もも)足らず八十坰手(やそくまで)へ隠れましょう。私の 180 柱の子神たちは、長男の事代主神に従って天津神に背かないでしょう」

と答えた。

すると、大国主神のために出雲国の多芸志(たぎし)の小浜に宮殿が建てられ、水戸神の孫・櫛八玉神(くしやたま)が沢山の料理を奉った。

建御雷神は葦原中国の平定をなし終えると、高天原に復命した。

大国主命は、

(一)自分のために大きな宮殿を建てること

(二)事代主神はじめ自分の多くの子供たちは高天原に反抗しないこと

と、申し入れて国譲りを承諾したのである。

以上が、『古事記』による出雲の国譲りの経緯である。

経津主神(ふつぬし)

しかしながら、『日本書紀』本文では、建御雷神(武甕槌神)のほかに、経津主神なる高天原の武将が登場する。すなわち、

「天照大神は武甕槌神と経津主神を派遣した。二柱の神は出雲に降りて、大己貴神(大国主命)に『この国を天の神に譲るか』と問うた。大己貴神は『私の子の事代主は、鳥を狩るため三津之碕(みつのさき)にいます。彼を尋ねてからご返事致します』と答え、使者を遣わして尋ねさせた。事代主神は『天神の要求されるところであれば、奉りましょう』と返事して、大己貴神はその言葉を報告した」

とある。

(一)経津主神の表記

『古事記』	記載なし
『日本書紀』	経津主神(ふつぬし) 別名は斎主神(いわいぬし)または伊波比主神(いわいぬし)・斎之大人(いわいの・うし)
『出雲国風土記』	布都怒志命(ふつぬし)
『出雲国造神賀詞』	布都怒志命(ふつぬし)
『肥前国風土記』	物部経津主之神(もののべの・ふつぬし)
『常陸国風土記』	普都大神(ふつの・おおかみ)
香取神宮(千葉県香取市)	香取神、香取大明神

(二)経津主神の系譜

『日本書紀』巻第一 第五段第六の一書	イザナギがカグツチを斬ったとき、十握剣の刃から滴る血が固まって、天の安河のほとりにある五百箇磐石(いおついわむら)となり、これが経津主神の祖となった。
『日本書紀』巻第一 第五段第七の一書	カグツチの血が五百箇磐石(いおついわむら)を染めて磐裂神・根裂神が生まれ、その子の磐筒男神・磐筒女神が経津主神を生んだ。
『日本書紀』巻第二 第九段の本文	経津主神は磐裂・根裂神の子、磐筒男・磐筒女が生んだ子
『古語拾遺』	「経津主神、これ磐筒女神の子、今下総国の香取神是れなり」
『先代旧事本紀』巻第一	イザナギの剣の先から飛び散った血が湯津石村(ゆついわむら)に着くと磐裂・根裂神が生まれ、その子の磐筒男・磐筒女が経津主神を生んだ。

『日本書紀』第二の一書

「天神は経津主神と武甕槌神を遣して葦原中国を平定させようとした時、二柱の神は『天には天津甕星(あまつみかほし)、またの名を天香々背男(あまのかかせお)という悪い神がいるので、まずこの神を征服してから葦原中国を平定しよう』と告げた。

天津甕星を征するための斎主神(いわいぬし)は、斎之大人(いわいの・うし)ともいい、東国の檝取(香取)の地に鎮座する。

二柱の神は出雲の五十田狭(いささ)の小汀(おばま)に降りると、大己貴神(大国主命)に『この国を天の神に譲るか』と問い詰めた。大己貴神は天津神を騙(かた)って我が国を奪いに来たのかと疑い同意しなかったので、経津主神はいったん天に戻って報告した。そこでタカミムスビ(高皇産霊尊)は再び二柱の神を大己貴神に遣わして、『現世の政治は我が孫が治めるべきものなので、代わりに幽世の神事を掌れ。お前の住むべき天日隅宮(あまのみすみのみや)を造ろう。お前の祭祀を掌るのは天穂日命である』と言った。

すると大己貴神は『天神の仰せは行き届いております。従わない訳にはいきません』とようやく交換条件を受諾した。岐神(ふなとのかみ)を二柱の神に自分の代わりとして推薦して、大己貴神は永久に隠れた。

経津主神は岐神(ふなとのかみ)を先導役として、葦原中国を平定した。服従しなかった者を斬り殺して、服従した者には恩賞を与えた。この時に帰順した首長は、大物主神と事代主神であった。そして大物主神と事代主神は八十万神を天高市(あまのたけち)に集めて、それらを率いて天に昇って忠誠心を示した。タカミムスビは大物主神に対して、『もし国神を娶れば、お前には謀反の心があると思ってしまう。だから、私の娘の三穂津姫(みほつひめ)をお前の妻とさせたい。八十万の神々を率いて、永遠に皇孫(すめみま)を守護し奉れ』と勅して、下界に帰り降らせた」

(一) 五十田狭(いささ)の小汀(おばま)

『日本書紀』では、大国主命と少彦名命が初めて出会った海岸とされており、『古事記』などの記事と総合的に考慮すれば、稲佐の浜と解すべきであろう。

(二) 岐神(ふなとのかみ)

一般には、「道の分岐点などに祭られる神。旅人を守護する道祖神。塞(さえ)の神。巷(ちまた)の神」などと解されているが、この場合は「村々の役人たち」とでも解釈してよろしかろう。

大国主命は永久に隠れる前――死去する前に、村役人たちに命じて出雲国の人々に対して高天原への国譲りを布告させたのであろう。

(三)大物主神

『古事記』『日本書紀』に記された大物主神と大国主命・事代主神の関係は、かなりあいまいで定説が確定されていない状況といえる。

大物主神について

①大国主神とする説	㋐説:大国主神の別名
	㋑説:大己貴神(大国主命)の和魂(にぎたま)とする説
	㋒説:大己貴神の幸魂(さきみたま)奇魂(くしみたま)とする説
②事代主神とする説	・『日本書紀』では三穂津姫を妻としているが、その事績は事代主神のものとなっている。妻や子孫、神武天皇前代という世代数が事代主神と一致することから、事代主神の別名が大物主神であったと考えられる。 (村島秀次「大物主神=事代主神」論」『歴史研究』618 号 2014 年など)。
③大物主神とする説	・大国主命・事代主神とは別人 ・近畿大和を支配するために出雲の大国主命から派遣された人物 ・大国主命の子であるかどうか不明。ニギハヤヒと協力して近畿地方を治めていた出雲系の有力者

ただし、神武天皇の正妃となった媛蹈鞴五十鈴媛(比売多多良伊須気余理比売、ひめたたら・いすずひめ)の父とされる人物に関して、『日本書紀』『古事記』は次のように記している。

媛蹈鞴五十鈴媛の父

出典	父
『日本書紀』巻 1 神代上	大三輪神
『日本書紀』巻 1 神代上	事代主神
『日本書紀』巻 3「神武紀」	事代主神
『日本書紀』巻 4「綏靖紀」	事代主神
『古事記』中巻・神武記	大物主神
『先代旧事本紀』	事代主神

すなわち、大三輪神＝大物主神＝事代主神という関係が成り立っている。

もちろん、100％の断定は難しいにしても、大物主神は事代主神であり、彼は出雲の国譲りののち大和地方に移り住み、三輪山を拠点にしていたと考えるのが自然であろう。

「出雲国造神賀詞」における出雲の国譲り

新任の出雲国造が天皇に奏上する「出雲国造神賀詞（かんよごと）」は、新任の出雲国造が天皇に対して奏上した儀礼の言葉で、『延喜式』に記され、『貞観儀式』には儀式の内容が記されている。

奈良時代の霊亀 2 年（716）から平安時代の天長 10 年（833）までの 15 回が記録上確認できる。

「出雲国造神賀詞」の内容は次のとおり。

「高天原の神王高御魂命が天下の大八島国を治められたとき、出雲国造の遠祖・天穂比命を国土の視察に派遣した。天穂日命は地上をくまなく視察した後、『豊葦原水穂国は、昼はハエのように喧しく、夜は炎のように光り輝く荒々しい神々が蔓延し、岩も木も青い水の泡までもが物言う荒れ狂う国である』と報告し、自分の子である天夷鳥命（あめのひなとり）に布都怒志命（経津主神）を副えて地上へ派遣した。荒ぶる神々は平定され、地上を開拓経営した大穴持大神は国譲りに同意した。すると大穴持命は自分の和魂（大物主神）を大御和社に、さらに子の阿遅須伎高孫根命を葛木の鴨の神奈備に、事代主命を宇奈提（うなて）の神奈備に、賀夜奈流美命を飛鳥の神奈備に鎮座させて、皇室の守護神とした。そうした後に、大穴持命自身は八百丹杵築宮に鎮まり留まった」

なお、『古事記』『日本書紀』『出雲国造神賀詞』に記された出雲の国譲りの主な関係者を整理した。

出雲の国譲り関係者

	古事記	日本書紀 本文	日本書紀 第一の一書	日本書紀 第二の一書	日本書紀 第六の一書	出雲国造 神賀詞
天照大神	○		○	○		
タカミムスビ	○	○			○	
天穂日命(天菩比命)	○	○				○
大背飯三熊大人 (おおそびの・みくまの・うし)		○				
天稚彦(天若日子)	○	○	○		○	
雉の鳴女（なきめ）						
建御雷命	○	○	○			
経津主神(ふつぬし)		○	○	○		○
大国主神(大己貴神)	○	○	○	○		○
事代主神	○	○	○			
建御名方神	○					
天夷鳥命 （あめのひなとり）						○

「出雲国造神賀詞」の性格を、天皇に対する服属儀礼あるいは復奏儀礼とする説があるが、出雲の国譲りののち、あらためて出雲の国の統治者に任命された天穂日命・天夷鳥命の高天原に対する宣誓の儀式を先例にしたものであろう。

第一回目の使者として派遣された天穂日命が大国主命に懐柔され、任務を果たすことはできなかったものの、長期にわたって出雲に居住し、出雲の内部事情に精通していたことによるものであったろう。

杵築大社(出雲大社)

すでに述べたように、『古事記』には、大国主命の国譲りに応じる条件として、

「我が住処を、皇孫の住処のように太く深い柱で、千木が空高くまで届く立派な宮を造っていただければ、そこに隠れておりましょう」

と述べ、これに従って出雲の「多芸志(たぎし)の浜」に「天之御舎(あめのみあらか)」を造ったという。

『日本書紀』によれば、タカミムスビは国譲りに応じた大己貴命に対して、

「汝の住処となる『天日隅宮(あめのひすみのみや)』を、千尋もある縄を使い、柱を高く太く、板を厚く広くして造り、天穂日命に祀らせよう」

と述べたという。

なお、このほか『出雲国風土記』などの出雲大社に関する表記は次のとおり。

文　献	名　称	備　考
『古事記』	天之御舎(あめのみあらか)	多芸志(たぎし)の浜
『日本書紀』	天日隅宮(あめのひすみのみや)	
『出雲国風土記』楯縫郡	天日栖宮(あめのひすみのみや)	
『釈日本紀』	杵築宮	
『延喜式』	杵築大社	江戸時代までの呼称

「出雲大社」(島根県出雲市大社町杵築東)は、江戸時代までは、「杵築大社(きずきたいしゃ)」と呼ばれていたが、1871 年(明治 4)に改称された。

むろん、大国主命を祭る神社で、熊野大社(松江市八雲町熊野)と並び、出雲国の一の宮である。

その神殿の規模について、平安時代の『口遊(くちづさみ)』(源為憲著)には、

「雲太(うんた)、和二(わに)、京三」

として記されている。

第 1 位 「雲太(うんた)」(出雲太郎) ・・出雲大社(16 丈・48 メートル)

第 2 位 「和二(わに)」(大和二郎) ・・奈良の東大寺大仏殿(15 丈・45 メートル)

第 3 位 「京三(きょうさん)」(京三郎)・・京都の大極殿

という意味である。

現在の本殿は、江戸時代の1744年（延享元）に建てられたもので、高さは8丈（約24m）である。

ところが、本居宣長が『玉勝間』には、かつての本殿はその倍ほどもあり、中古（平安時代）には16 丈（48m）、さらに上古（平安より前）には 32 丈（およそ 96m）であった、という伝承が記されている。そして、「金輪御造営差図(かなわのごぞうえいずさしず)」という図面が添付されていた。

出雲大社宮司家の千家(せんげ)家に伝わる「金輪御造営差図」を写した図である。

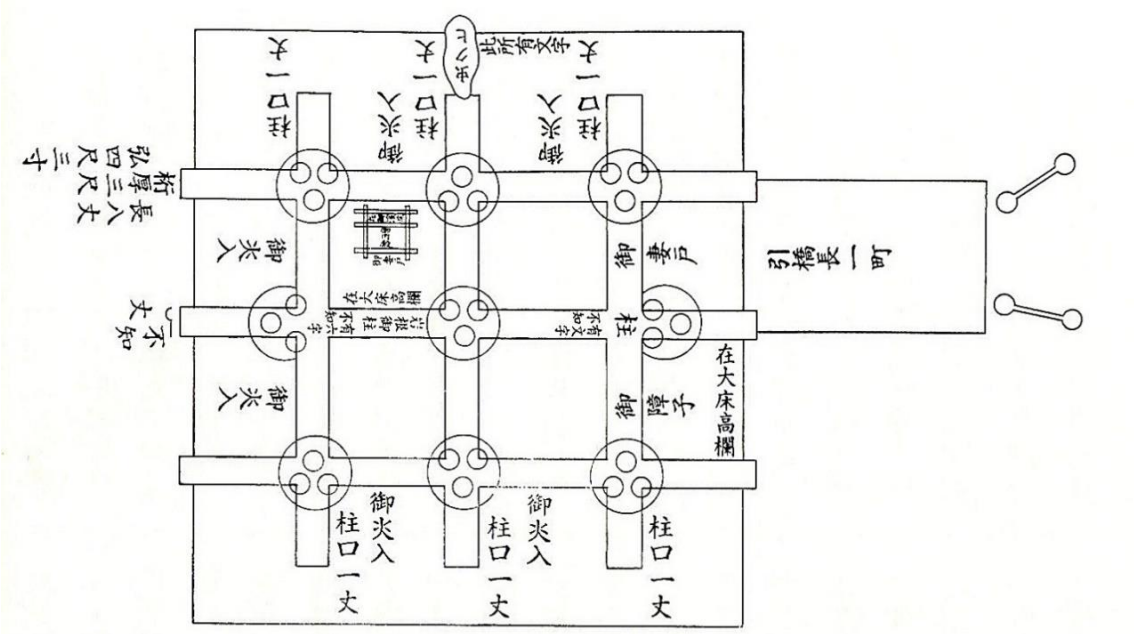


図 5　金輪の造営の図

柱の太さが1丈（3m）もあり、しかも9本の柱はそれぞれ、3 本の木を鉄の輪で 1 つに束ねってあって、まさに異様ともいえる巨大さである。それに加えて、前面に描かれた引橋の長さは1町（約 109 m）と記されている。

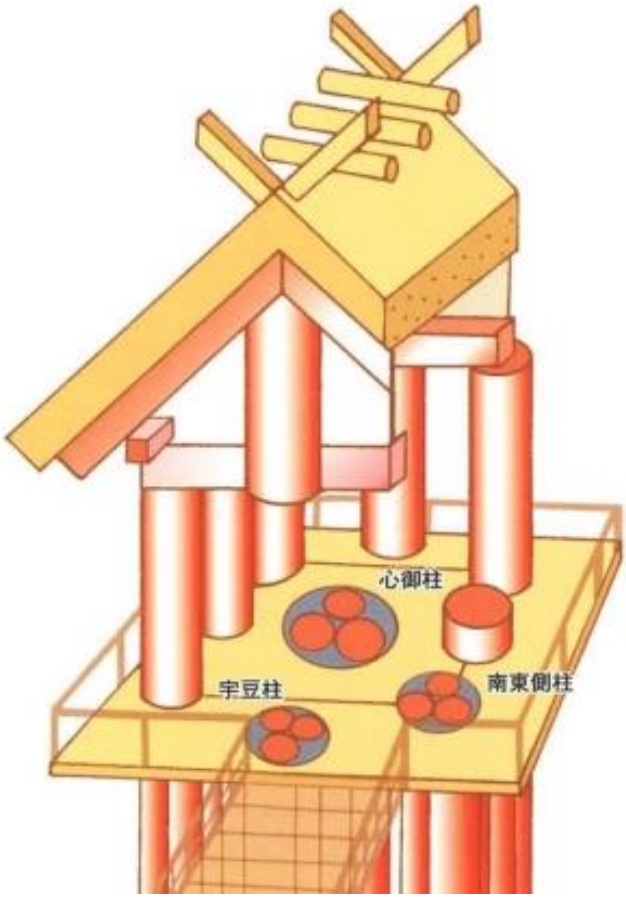
9 本の巨大な柱に支えられた神殿――それは 48 メートルという圧倒的な高さである。しかも、神殿に至るには、約100メートルの階段を登っていかなければならない。

戦前はともかく、『古事記』『日本書記』の「出雲神話」を徹底的に否定する風潮のなかでは、そのような大規模神殿の存在を信じる研究者は皆無であったといっていい。

ところが、地下祭礼準備室建設のための事前調査中の平成 12 年（2000）4 月 5 日に、出雲大社境内からスギ巨木の柱（1 本約 1.4m の柱を 3 本束ねたもの）が発見されたのである。

まさしく、「金輪御造営差図」とおなじ柱――棟持柱【宇豆柱(うずばしら)】である。

その年の 10 月には、おなじ構造の柱が二か所(心御柱と南東側柱)から見つかり、本殿の規模や方向などが明らかになった。



「出雲大社境内遺跡」(島根県大社町教育委員会)より

柱周辺からは、祭祀用の上器が出上しており、この土器から推定すると、平安時代終わりごろ(12世紀)から鎌倉時代始めごろ(13 世紀前半)に建てられた本殿であると考えられているから、宝治 2年(1248)の遷宮の際に造営された本殿である可能性が高い。

出雲大社の境内に描かれた下の図は、宇豆柱の出土地点をしめしている。

時　代	高さ		備　　考
古代～奈良時代	32 丈	96m	・未確認伝承
平安時代以降	16 丈	48m	・宝修2年（1248）建築 ・出雲大社境内遺跡の宇豆柱
江戸時代	8 丈	24m	・現在の本殿 ・延享元年（1744）建築

なお、「金輪御造営差図」や出土した宇豆柱、心御柱、南東側柱などをもとに、株式会社大林組によって、秀逸な復元図が作成された。

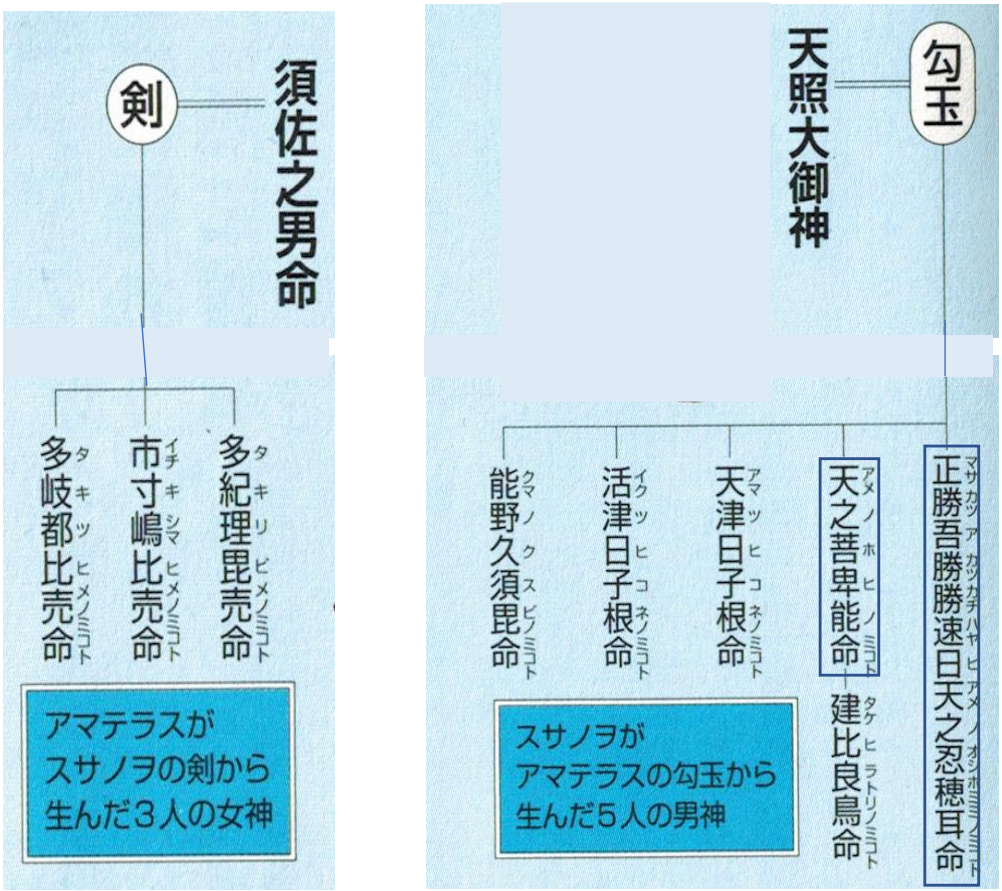
古代日本における木造建築の技術水準の高さをしめしており、当時における世界最高水準の木造建築物と評価しても差し支えなかろう

当初の規模 32 丈(96m)という伝承は信じがたいが、出雲大社は背後と東西を山々に囲まれた袋

状の空間に建てられているから、もし、当初の本殿が山の斜面のいずれかに建てられたとしたら、32 丈(96m)も十分にあり得よう。

天穂日命(アメノホヒ)

出雲国の新しい為政者として、天穂日命が任命された。すでに述べたとおり、『古事記』によれば、天照大神とスサノヲの誓約(うけひ)で生まれたとされる五男三女の第二子である。



これまたすでに述べたとおり、出雲の大国主命のもとに遣わされた第一回目の使者で、大国主命に懐柔され、3 年間高天原に戻らなかったとされる人物である。

彼を実質的に補佐するのは、息子の第 2 代武夷鳥命(たけひらとりのみこと)である。

彼らを任命したのは、九州の高天原(後期邪馬台国)の最高権力者たるタカミムスビである。

天穂日命・武夷鳥命は、出雲国の統治に関して、九州の高天原に向かって忠誠を誓ったはずである。

ところが、九州の高天原勢力はその後近畿に東遷し、大和政権を樹立した。

新任の出雲国造は近畿にいる天皇に対して忠誠を誓うようになった。

それが『出雲国造神賀詞(かんよごと)』である。

時　代	出雲の統治者	任命者	備　　考
邪馬台国時代	天穂日命 武夷鳥命	タカミムスビ	祖型の『出雲国造神賀詞』
大和政権～	末裔たる出雲国造家	天皇	『出雲国造神賀詞）』

出雲の国譲りを、崇神天皇時代の「出雲振根の事件」と混同して論じる人が意外とすくなくない。

『日本書紀』には、出雲には高天原の時代から伝えられた神宝があり、これを第 10 代崇神天皇が見たいと要求した。最高権力者が見たいというのは、欲しいということとおなじである。

折しも振根は筑紫国に出張して不在で、弟の飯入根（いいいりね）が勝手に弟の甘美韓日狭（うましからひさ）と息子の鸕濡渟（うかずくぬ）に命じて神宝を差し出してしまった。

戻った振根は大いに怒り、弟の飯入根を騙し討ちにしたが、甘美韓日狭と鸕濡渟はこのことを朝廷に訴えた。

その結果、振根は天皇の遣わした四道将軍の吉備津彦と武渟川別（たけぬなかわけ）によって殺されてしまった。

この「出雲振根の事件」と「出雲の国譲り」は、まったく別個の事件である。

時代も当事者・関係者もまったく異なる。

何ゆえ二つの事件を混同して論じるのか、このことに触れると、不毛の時間のみが長くなるので、あえて省かせていただくが、読者に対して注意喚起だけは促しておきたい。

天穂日命(アメノホヒ)を祭る神社

出雲国を中心に、次のような神社に祭られている。

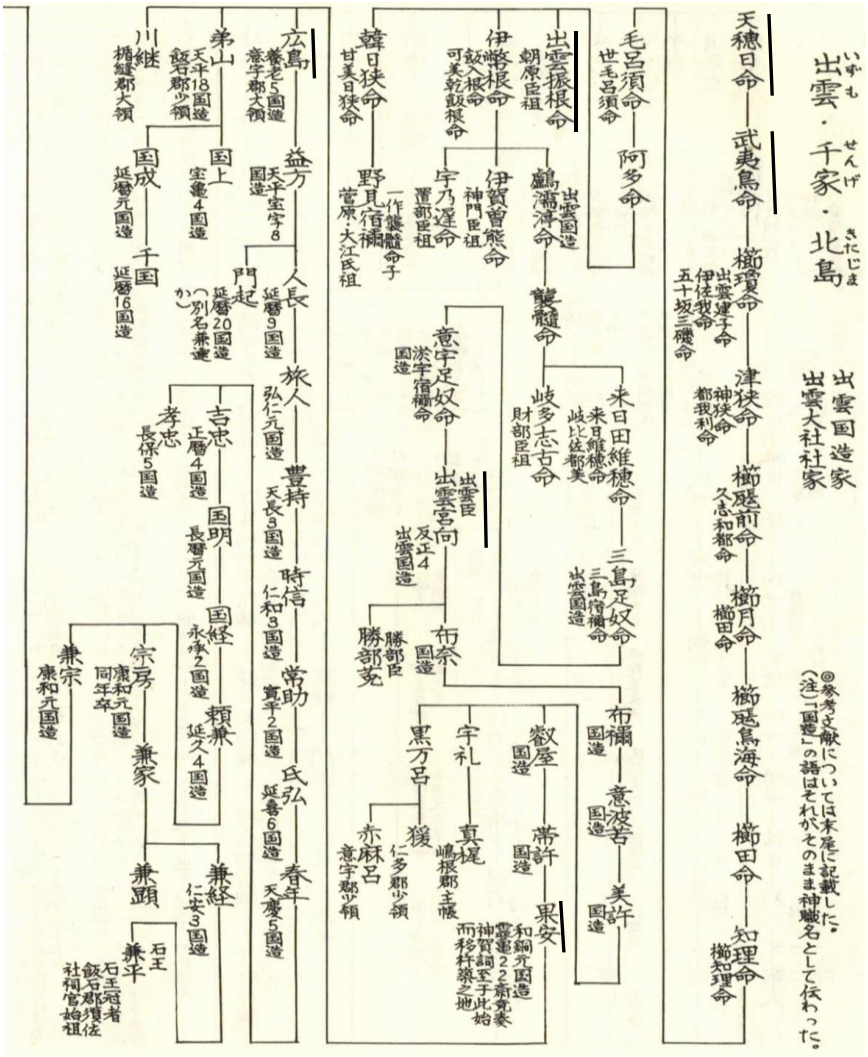
神　社　名	所　在　地	備　考
能義(のぎ)神社	島根県安来市能義町	出雲
天穂日命社(出雲大社境内社)	島根県出雲市大社町	出雲
天穂日命神社	鳥取県鳥取市福井	
大江神社	鳥取県八頭郡八頭町	
芦屋神社	兵庫県芦屋市	
綱敷天満宮	兵庫県神戸市東灘区御影	
馬見岡綿向神社	滋賀県蒲生郡日野町	
天穂日命社(太宰府天満宮境内社)	福岡県太宰府市	

第 2 代武夷鳥命(たけひらとりのみこと)ゆかりの氏族

『古事記』では、出雲国造・无邪志国造(武蔵)・上菟上国造(上海上・上総)・下菟上国造(下海上・下総)・伊自牟国造(伊甚・上総)・津島県直(対馬)・遠江国造(浜松)等の祖神であると記されており、『先代旧事本紀』「国造本紀」にも、下記のとおり同様の記事が掲載されている。

国 造	名	時 代	備 考
出雲国造	宇迦都久怒(うかつくぬ)	10 代崇神天皇	出雲地方
无邪志国造	兄多毛比命	13 代成務天皇	武蔵国
上菟上国造	忍立化多比命	13 代成務天皇	上総国海上郡
下菟上国造	久都伎直	15 代応神天皇	下総国東部
伊自牟国造	伊己侶止直	13 代成務天皇	上総国埴生郡
津島県直	建弥己々命	初代神武天皇	対馬
遠江国造	印岐美命	13 代成務天皇	遠江国西部(浜松)

参考までに、出雲国造・出雲大社家の系譜を掲載しておこう。

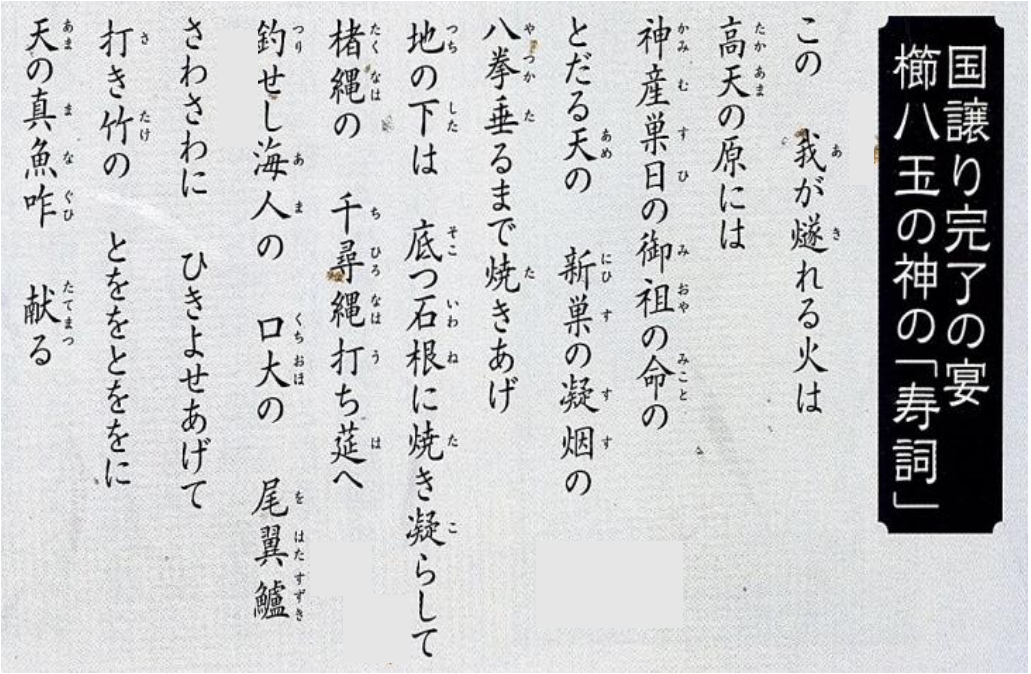


『古代豪族系図集覧』(東京堂出版)

国譲りの完了

『古事記』は、大国主命が国譲りにについて、最後にこう記している。

「『この葦原中国は、すべて献上しましょう。ただし、私の住む所については、天つ神の御子が天照大御神の霊魂をお継ぎになる立派な宮殿のごとく、地下の岩盤に宮殿の柱をしっかり立て、高天原にまで届くように千木を高く作ってくださるのならば、私は遠い世界の八十坰手（やそくまで）へと隠居しましょう。また、私の子である百八十の神たちは、八重事代主神を先頭としてお仕え申し上げれば、背く神はいません』と答えて出雲国の多芸志（たぎし）の小浜に天の御舎（みあらか）を造って、水戸神（速秋津日子神と速秋津比売神）の孫である櫛八玉神を膳夫（かしわで・料理長）に任命して、天の御饗（みあえ）を献上するときに、お祝いの言葉を申し上げて、櫛八玉神は鵜（う）に変身して海底に入り、底にある土を摘んで天の八十平瓮（やそびらか）を作り、海藻の茎を刈り取って燧臼（ひきりうす）を作り、さらにまた海藻の茎で燧杵（ひきりきね）を作り、火を鑽（ぐ）りだして次のように述べた」



【現代語訳】

「この私が燃やすかがり火は、高天原のカミムスビ（神産巣日御祖命）さまの新居の煤（すす）が長く垂れるほど勢いよく燃やし、土の下の岩盤を焼き固めます。そして、楮（こうぞ）で編んだ長い縄を延ばして、海人が釣った口の大きい鱸（すずき）を引き寄せ、竹の器がしなるほどのたくさんの魚を献上いたします」

このの ち建御雷神は高天原へ帰参し、出雲の国を平定したことをタカミムスビに報告した。

こうして出雲の国譲りは完了した。

（以下、つづく）

日本古代通史・連載第 34 回

後期・邪馬台国の時代⑬
出雲の銅鐸

河村哲夫

荒神谷遺跡（島根県出雲市斐川町神庭西谷）の銅剣等

1983 年（昭和 58）、広域農道（出雲ロマン街道）の建設に伴い遺跡調査が行われたのがきっかけであった。調査員が古墳時代の須恵器の破片を発見したことから、発掘調査が開始された。

1984 年(昭和 59) ～1985 年(昭和 60)の 2 か年の発掘調査で、銅剣 358 本、銅鐸 6 個、銅矛 16 本が出土した。

銅剣の一箇所からの出土数としては日本最多の記録で、出雲神話を蔑視していた考古学界に大きな衝撃を与えた。

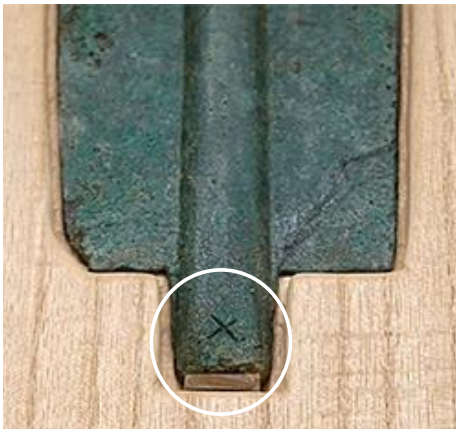
その後発見された「加茂岩倉遺跡」の大量の銅鐸とともに、古代出雲には大きな勢力が存在していたことが明白となった。

(一)銅剣の出土状況

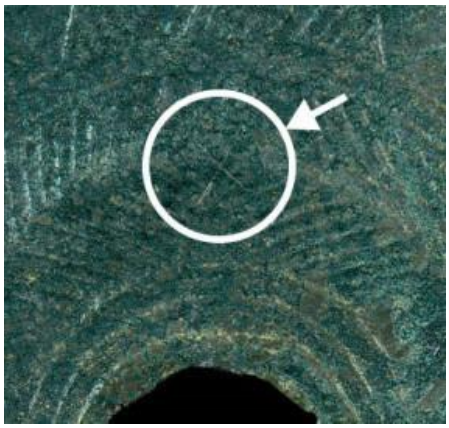
銅剣 358 本は、丘陵の斜面に作られた上下 2 段の下の段に、刃を起こした状態で 4 列に並べられて埋められていた。

すべて中細形 c 類の銅剣で、長さ 50cm 前後、重さ 500g あまり。弥生時代中期後半(紀元前後)の作とみられている。形式が単一であり、同一の地域で作られたことは確実である。

なお、344 本の銅剣の茎部に鋳造後に工具で×印が刻まれている。加茂岩倉遺跡の銅鐸にも刻まれており、両遺跡の青銅器が同一の生産集団によって製造された可能性が高いとみるのが自然であろう。



銅矛の×印



銅鐸の×印

(二)銅鐸の出土

その後、島根県教育委員会が周辺地域を磁気探査器で調査したところ、銅剣出土地の南 7 メートル付近で反応があり、発掘が始められ、二列に並べられた高さ 20 センチの銅鐸 6 個が出土した。

最古の形式である Ⅰ 式(菱環鈕式)が 1 個、それよりやや新しい Ⅱ 式(外縁付鈕式)が 1 個、外縁付鈕式が 3 個、その他の独自文様 1 個であった。

製作時期は、弥生時代前期末から中期中ごろ(紀元前 1～2 世紀)の間と考えられている。

近畿製造説が根強いが、12 年後に出土した加茂岩倉遺跡の 39 個の銅鐸からみても、その説は成り立たない。

なお、三号銅鐸は伝徳島県出土銅鐸と同笵で、二号銅鐸は京都市右京区梅ヶ畑遺跡出土の四号銅鐸と同笵である。

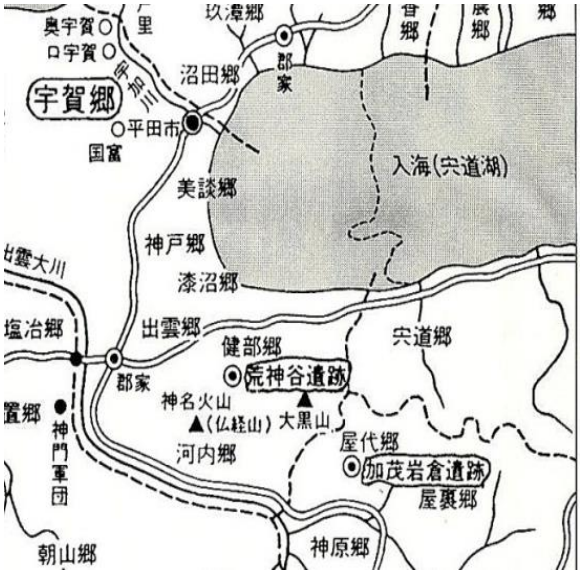
(三)銅矛の出土

さらには、銅鐸が埋められていた埋納坑の東側で、16 本の銅矛(中広形 14 本と中細形 2 本)が

出土した。いずれも刃を起こし、矛先が交互になるように揃えて寝かせた状態で出土した。

横には小ぶりの銅鐸が鰭（ひれ）を立てて寝かせた状態で、同じく交互に並べた状態で出土した。

銅矛の形態や北部九州産の青銅器に見られる綾杉状のとぎ分けがあることから、16 本とも北部九州で製作されたとみる説が根強い。



加茂岩倉遺跡（島根県雲南市加茂町岩倉）の銅鐸

1996 年(平成 8)に加茂町岩倉の丘において農道工事中に発見された。

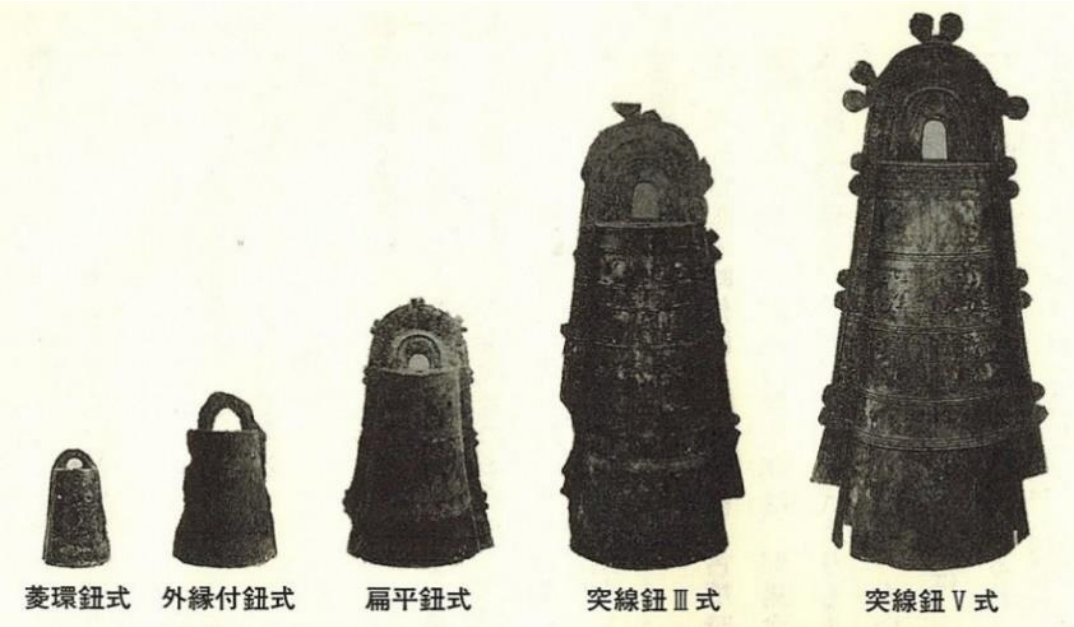
1996 年(平成 8)より 1997 年(平成 9)の 2 年間にわたり、加茂町教育委員会と島根県教育委員会により発掘調査が行われ、その結果、一カ所からの出土例としては日本最多となる 39 個の銅鐸が発見された。

出土した銅鐸の分類

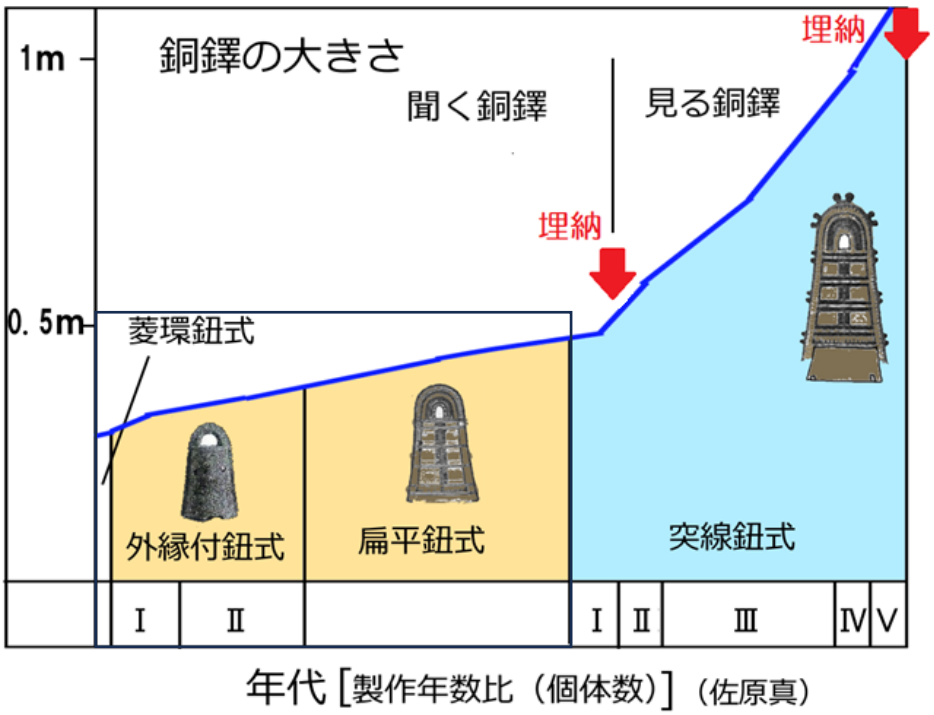
荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸の型式や大きさは、次のとおり。

加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡出土銅鐸の大きさ

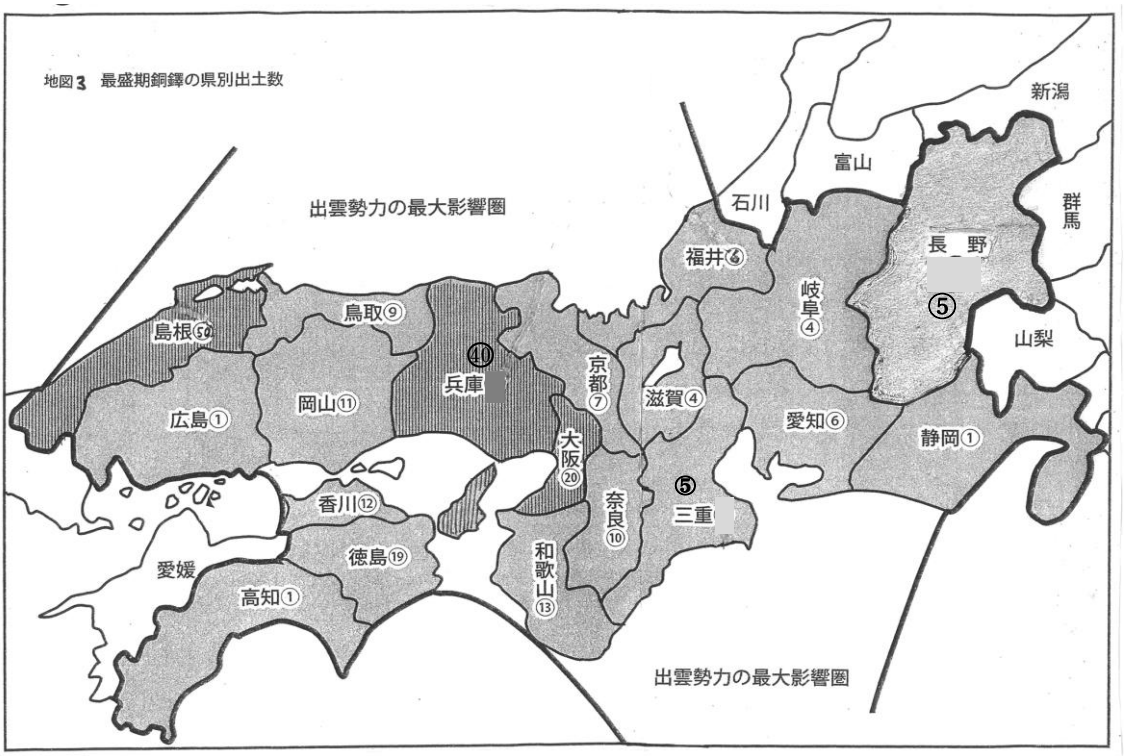
荒神谷遺跡銅鐸		加茂岩倉遺跡銅鐸		
菱環鈕	外縁付鈕式	外縁付鈕式		扁平鈕式新段階
1式	1式(II-1)	1式(II-1)	2式(II-2)	(III—2)
cm 21.7	cm 23.4 23.7 22.4 23.8 23.7	cm 31.0 (4号) 31.5 (6号) 30.0 (7号) 31.5 (9号) 29.5 (17号) 30.0 (19号) 31.0 (22号) 31.0 (24号) 31.5 (27号) 31.5 (30号) 30.0 (33号) 32.0 (38号)	cm 44.5 (5号) 44.0 (11号) 44.0 (21号) 44.2 (31号) 45.0 (32号) 44.0 (34号) 44.0 (37号)	cm 46.5 (1号) 46.0 (8号) 46.0 (10号) 45.0 (20号) 47.0 (26号) 46.2 (29号)
平均21.70	平均23.40	平均30.88	平均44.24	平均46.12



佐原眞氏(1932～2002)の分類に従えば、次のとおり。



菱環紐式・外縁付紐式・扁平紐式のみが出土し、突線紐式は出土していない。
これらの型式の分布状況について、安本美典氏は次のような図をつくられた。
なお、最盛期銅鐸は出雲型銅鐸と読み替えてご覧いただきたい。



○出雲型銅鐸(最盛期銅鐸)の分布

府県	個数	割合	順位	備　　考
島根	50	22.3	1	◎出雲は銅鐸の中心地
鳥取	9	4.0	8	
兵庫	40	17.9	2	◎出雲の前進基地
京都	7	3.1	9	出雲→鳥取→京都
福井	6	2.7	10	滋賀→福井
石川				
富山				
新潟				
岡山	11	4.9	7	○出雲→吉備
広島	1	0.4	13	出雲→安芸
香川	12	5.3	6	○兵庫→香川
愛媛				
徳島	19	8.5	4	○兵庫→香川→徳島
高知	1	0.4	13	太平洋側にはほとんど浸透せず。
滋賀	4	1.8	12	滋賀
岐阜	4	1.8	12	岐阜
長野	5	2,2	11	長野
大阪	20	8.9	3	○兵庫→大阪
奈良	10	4.5	8	○兵庫→大阪→奈良
和歌山	13	5.8	5	○兵庫→大阪→和歌山
三重	5	2.2	11	
愛知	6	2.7	10	東限
静岡	1	0.4	13	
福岡				鋳型
佐賀				鋳型
計	224	100.0		

以上のことから、次のようにまとめることができる。

【出雲型銅鐸】

菱環紐式・外縁付紐式・扁平紐式銅鐸の中心地は出雲にある。

そして、出雲型銅鐸(最盛期銅鐸)は出雲の国譲りによって 260 年ごろ地中に埋納された(安本美典『邪馬台国と出雲神話』勉誠出版・2004)。

「出雲の国譲り」を契機として、出雲の銅鐸は地中に埋納されたままになったのである。

。

銅鐸のルーツは北部九州

銅鐸のルーツは朝鮮式小銅鐸である。北部九州に渡来し、それをモデルとして、旧奴国――福岡市と周辺地域で小銅鐸の製造が開始された。おそらく祭祀のための楽器であったろう。

(一)大南遺跡(福岡県春日市大谷 2丁目)

1960 年(昭和 35)に弥生時代中期の円形住居跡 8 軒、後期の方形・長方形住居跡94軒、不明の住居跡2軒が発掘された。その住居跡から、広形銅戈鋳型や九州初の発見となった小銅鐸などが出土した。10．1cmの4区画袈裟襷文様の小銅鐸である。

(二) 大谷遺跡(福岡県春日市大谷)――鋳型

1977～78(昭和 52～53)に、大谷遺跡(福岡県春日市大谷)から小銅鐸の鋳型の破片が出土し、九州大学の岡崎敬教授や九州産業大学の森貞次郎教授らによって確認報告されたが、近畿や東京の研究者から、まともに相手にされなかったいう。

(三)岡本四丁目遺跡(福岡県春日市岡本四丁目)

1979 年(昭和 54)に弥生中期の無紋の小型銅鐸の鋳型の完成品が出土した。

これまた、近畿・東京の研究者から黙殺されたという。

(四)今宿五郎江遺跡(福岡市西区)

1985 年(昭和 60)に今宿五郎江遺跡から、弥生中期末から後期初頭の小銅鐸が出土した。

無紋で 13.5cm。紐の上端部 3 箇所に突起がある(福岡市教育委員会 1991)。

(五)板付遺跡(福岡市博多区板付 2 丁目)

1989 年(平成元)に弥生後期の小銅鐸が出土した。無紋で 7.6cm。長方形の住居内のピットに土をつめて埋納されていた(福岡市教育委員会 1995-1)。

(六)井尻 B 遺跡(福岡市南区)

2003 年(平成 15)には南区の井尻 B 遺跡で弥生後期の小銅鐸が出土した。無紋で 5.3cm。重さは 12.9g。竪穴住居間のベルト部分から出土した(福岡市教育委員会 2005-1) 。

(七)雀居遺跡(福岡市博多区)

石製の小銅鐸の中子が出土(福岡市教育委員会 19952)。

奴国周辺部の小銅鐸

(一)元岡桑原遺跡群(福岡市西区)

2005 年(平成 17)には元岡桑原遺跡群の第 42 次調査で、弥生後期後半の小銅鐸 2 口が出土した。無紋 6.5cm と 7cm。1 号鐸と 2 号鐸は 8m の間隔で出土した。

2 点とも鐸身裾の断面は銀杏形(1 号鐸は潰れている)である。上部には半環状の鉦が付くなど形状が似ている。典型的な朝鮮系の小銅鐸である。

(二)浦志遺跡(糸島市前原町)

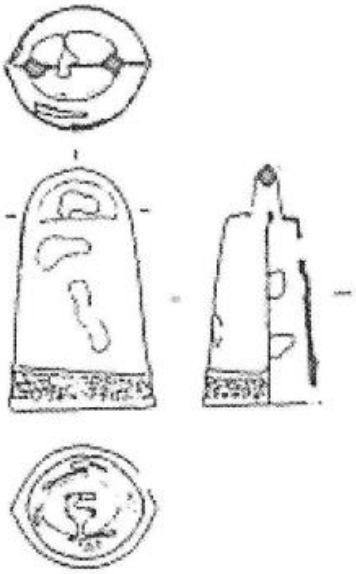
1983 年(昭和 58)に弥生時代後期の溝から出土した。高さ6．55cmの銅製の舌(ぜつ)を伴う無紋の小銅鐸である。

(三)立明寺遺跡(福岡県筑紫野市)

2007 年(平成 18)には立明寺遺跡で弥生後期前半から後期中葉の小銅鐸が出土したと報道された。 4.5cm。鉦の上端部 3 箇所に突起がある(2007.8.29.西日本新聞)。

(四)原田遺跡(嘉麻市馬見)

1986 年(昭和 62)に木桶墓から出土した。有文小銅鐸で、高さ 5.5cm、裾に斜格子文様が施され、銅鐸と朝鮮小銅鐸の折衷タイプで、朝鮮半島の小銅鐸と日本の銅鐸を結ぶ貴重な資料である。舌も出土しているので、音を鳴らす楽器として使用されていたことがわかる。



以上が、旧奴国と周辺地域における小銅鐸と鋳型の出土状況であるが、豊前・豊後からも朝鮮式の小銅鐸が出土しているので、この際、紹介しておこう。

(一)豊前の別府(びう)遺跡(大分県宇佐市)

1977 年(昭和 52)に別府遺跡(大分県宇佐市)で発見されたこの小銅鐸は、わが国で最初に発見された朝鮮製の小銅鐸とされる。

総高 11.6cmで、韓国慶尚北道月城郡入室里遺跡発見の第1号小銅鐸と形状・法量ともによく似ているとされる。

しかしながら、別府大学教授下村智氏による3D 計測を用いた研究によると、日本製の可能性が高いという(下村智・玉川 剛司「新領域研究としての遺物の3D 計測とその方法」2020)。

(三)豊後の多武尾遺跡(大分県大分市大字横尾)

1979 年 (昭和 54)と 1981 年 (昭和 56)の 2 回の調査が行われ、多武尾遺跡(大分県大分市大字横尾)の 6 号溝から、大分県内で 2 例目となる小銅鐸が発見された。

鈕(ちゅう)と裾部が欠け、全体の 3 分の 1 しか残存していないが、復原すると高さ 5.5 cm超で、朝鮮式小銅鐸の系列に属するという。

以上が、九州北部における小銅鐸および鋳型の出土状況である。

紀元前 2 世紀ごろ朝鮮半島から小銅鐸が伝来し、伝来からそれほど時間を置かずに、春日丘陵を中心に小銅鐸の製造が開始されたことがわかる。

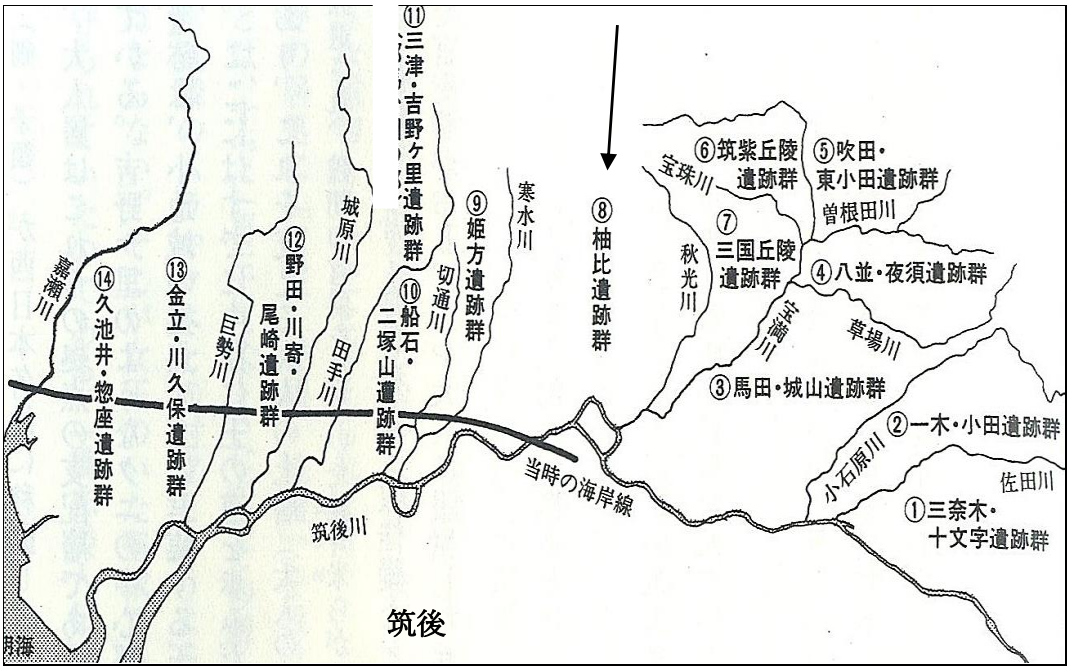
扁平鈕式横帯文銅鐸の鋳型が九州から出土

小銅鐸から進化した銅鐸は、佐原眞氏によれば、【菱環紐式→外縁付紐式→扁平紐式銅鐸】と進化したとされ、戦後の大規模開発などに伴い、近畿を中心とした地域から続々と発掘されるため、近畿を中心とした「銅鐸圏」と九州の「銅剣・銅矛圏」を描いた図は、普通に教科書に掲載されていた。

ところが、1980 年(昭和 55)に、佐賀県鳥栖市の安永田遺跡(鳥栖市柚比町安永田)から、扁平鈕式横帯文銅鐸の「鋳型」が出土したのである。

「まさか九州から鋳型が出土するとは！」

考古学界・歴史学界の受けたショックは大きく、テレビ・新聞などマスコミでも大きく報道された。

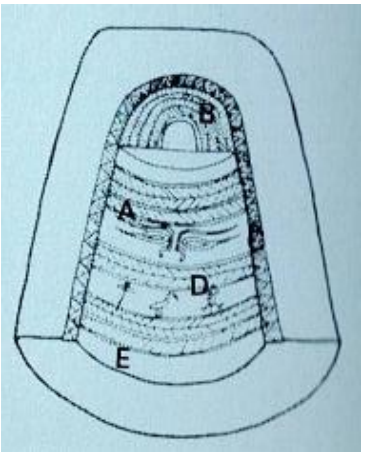


安永田遺跡は、脊振山地東端の九千部山の南麓に派生する谷の入り組んだ標高約 50 メートルの丘陵鞍部の傾斜地にある。

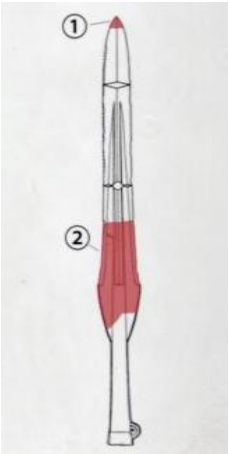
この遺跡からは、1913 年(大正 2)の耕地整理の際に大量のカメ棺が発見され、いくつかの銅戈・銅矛が出土したことで知られていた。

この遺跡から、1980 年(昭和 55)に、弥生時代中期末ごろ(紀元前後)の土器とともに、扁平鈕式の横帯文銅鐸(福田型邪視文銅鐸)の鋳型と中細・中広式銅矛の型を彫った鋳型および星形石器が出土したのである。

安永田遺跡工房跡



銅鐸鋳型出土部位



銅矛鋳型出土部位

調査地区は、北方向から狭く深く谷が入り込む地形で、この谷頭を取り囲むようにして 58 基の竪穴式住居跡が見つかった。このうち 36 軒が弥生時代中期の後半から末の紀元前後の住居跡である。谷底にもっとも近いところから青銅を溶かしたとみられる炉の跡が見つかった。谷底に作ったのは谷間の風通しを利用するためとみる説もある。

4,400 ㎡が史跡に指定され、出土した銅鐸鋳型 5 点、銅矛鋳型 5 点の計 10 点の鋳型片は、一括して国重要文化財に指定された。

現在史跡公園として整備されており、青銅器鋳造遺構が原位置の上に復元展示されている。

弥生時代と銅鐸の年代区分

銅鐸は、中国大陸を起源とする「鈴」が朝鮮半島に伝わって「小銅鐸」となり、朝鮮から伝わり、日本において独自に発展したとみられるが、銅鐸の年代区分については、諸説紛々・混沌状態で、さまざまな論文を読んでも、迷路のなかで頭が混乱するばかりである。

その理由としては、次のことが考えられる。

(一)邪馬台国＝近畿説を前提に銅鐸を邪馬台国時代より前と仮定していること

安本美典氏は、『邪馬台国と出雲神話』(勉誠出版)のなかで、「邪馬台国＝近畿説の立場に立つ考古学者は、銅鐸の最末期は、邪馬台国時代よりもまえである、という仮定のうえにたてられており、実証的な根拠が提出されているわけではない」と述べられ、寺沢薫氏の「銅鐸のはじまりを私は中期の前葉からと考えています。せいぜいさかのぼっても前葉。それから、最後はおそらく、一般的には、弥生の終末といいますか、地域によっては、古墳時代に突入している頃まで、作っているところがあるだろうというところです」という見解を引用され、「寺沢薫氏の銅鐸年代観にたてば、銅鐸は、邪馬台国時代のころ、用いられていたことになる」と述べられる。

(二)弥生時代に関する年代論が混乱していること

従来は、土器などの型式や中国から渡来した銅剣・銅鏡などとの比較を基にしたいわば「古典的な年代論」が主流であった。

ところが、平成 15 年(2003) 5 月 19 日、国立歴史民俗博物館の研究チーム(以下、歴博チーム)がマスコミにリークする形で「北部九州の弥生時代の始まりは紀元前 10 世紀で、従来の通説から約 500 年遡上する」と発表した。

その根拠とされたのは、炭素 14 年代測定法と炭素 14 年代測定法であった。

炭素 14 年代測定法は大気中の炭素 14 の濃度が一定であること前提にしている。しかしながら、大気中の炭素 14 の濃度は太陽活動の影響などによって年毎に濃淡がある。年毎の濃淡の変化を教えてくれるのが年輪年代法である。樹木には年輪がある。1 年ごとに刻まれた年輪のなかには、その年の炭素 14 が封じ込められている。したがって、年輪の絶対年がわかれば、年毎の炭素 14 の濃度がわかるわけである。

年輪年代法の研究は、昭和 55 年(1980)年から奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏ほぼ一人で進められ、昭和 60 年(1985)から実用に移された。

炭素 14 年代測定法と年輪年代法という最先端の科学技術の装いをまとった新しい年代論の登場は、長年にわたりこつこつと土器編年にいそしんできた考古学者――とりわけ九州の考古学者にとって、青天のへきれきであった。文科系が主流の考古学者たちは、なすすべがない状況に陥ったといっても過言ではない。今もその余震はおさまっていない。

炭素 14 年代測定法の最も大きな問題は、本来、骨や種子などの有機物を対象に測定すべきであるのに、土器に付着した汚染物質ともいうべき炭素についても試料として採用していることである。種子であれば、光合成によって取り込まれた大気中の二酸化炭素が種子のなかに保存される。土器に付着した炭素は、どうしても古い時代の測定値をしめす。試料の厳密性に欠けている。

年輪年代法でいえば、最も重要な年輪の基礎データがまったく公表されていないという問題がある。第三者の検証を受けていないものは、単なる仮説にすぎない。これが科学技術の世界の常識である。

ところが、この炭素十四年代法が、またたく間に既定事実となり、ズルズルと弥生時代の始まりが遡及してしまった。

したがって、これまでの土器編年等に基づく「古典的な年代論」と大きなズレが生じてしまった。

論文中に「弥生中期」と書いてあっても、その筆者が、はたしてどのような具体的年代を採用しているのかわからないという事態になってしまったのである。

本稿における年代論

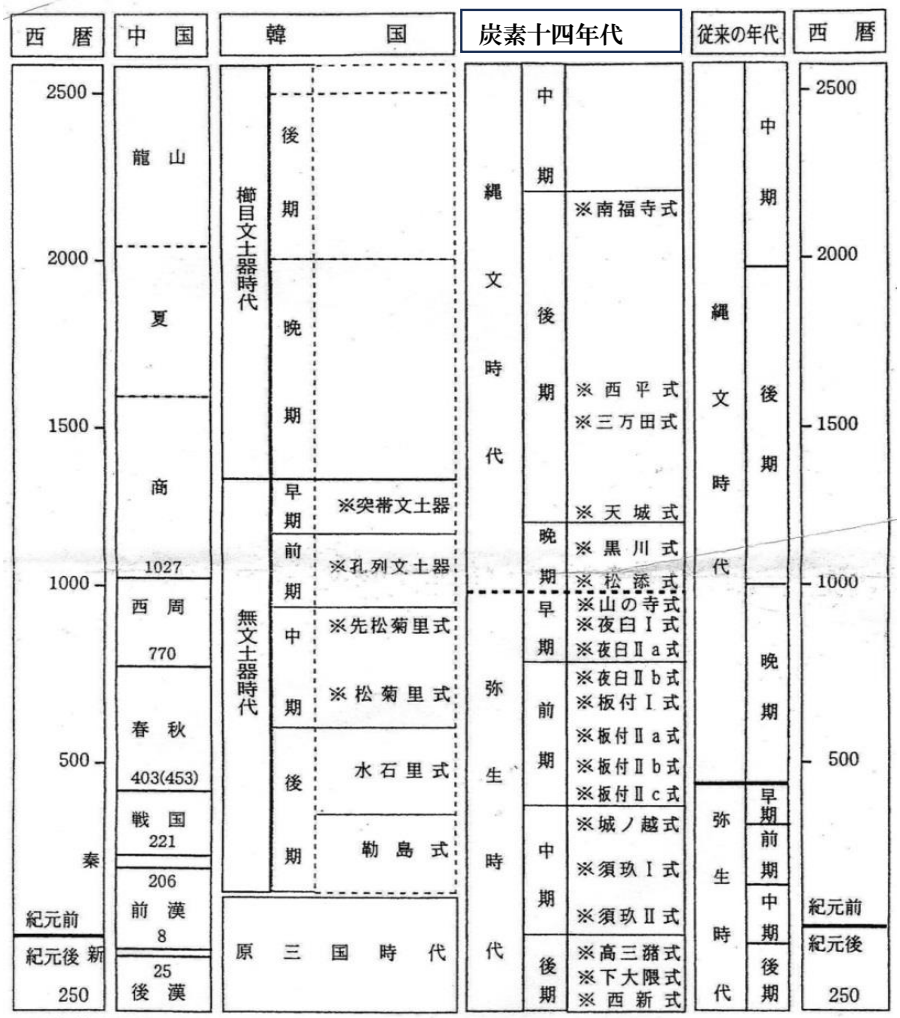
本稿は、基本的に「古典的な年代論」に基づいている。

少なくとも、紀元前後の約 200 年間は、前漢鏡や後漢鏡などの青銅器と同伴する土器などを基礎とした「交差年代法」が九州考古学における年代論の堅牢な基礎となっており、この発掘現場における地道な作業のなかから、コツコツと積み上げられた年代論である。それを軽々しく捨て去ることはできない。

日本における炭素十四年代測定法の手法について、第三者機関による厳密で客観的な審査が望まれる。

ちなみに、『AMS 年代と考古学』(岩永省三など・学生社)に掲載された炭素十四年代測定法(AMS 測定)による年代論と従来の年代の比較は次のとおりとされている。

AMS 測定による弥生時代の年代観



※は年代を計測した土器型式

また、橋口達也氏は『甕棺と弥生時代年代論』(雄山閣)の「まえがき」には次のように記されている。

弥生時代の北部九州においては土器を埋葬用の棺として用いる甕棺葬が盛行した。甕棺は土器であることから日常用の土器と同様形態分類が可能であり，棺そのものが細かく編年できるという特徴を持っている。また前期末頃から首長層は副葬品を持つことが多く，前期末から中期中頃には朝鮮半島系の細形銅剣・矛・戈などの青銅製武器や銅鉇および多鈕細文鏡，中期後半以後は前漢鏡・後漢鏡などの中国系の文物が甕棺内から見いだされることがある。このことから甕棺の相対的編年に中国などで製作年代の明らかな遺物などから絶対年代を推定できるという有利な条件を備えている。著者も含めて北部九州の考古学者は，弥生時代の年代論については基本的には以上の観点から考古学的手法を用いて研究してきた。

しかるに2003年5月，国立歴史民俗博物館の春成・今村・藤尾らのグループは，AMS法（加速器質量分析法）による高精度炭素14年代測定法によれば弥生時代の開始は紀元前1000年，前期初頭の年代は紀元前800年，前期と中期の境は紀元前400年頃にあると推定し，弥生時代の始まる頃の東アジア情勢を殷（商）の滅亡，西周の成立の頃に，前期の始まりも西周の滅亡，春秋の初めの頃となり，認識を根本的に改めねばならない。また前期と中期の境についても仮に紀元前400年頃にあるとすれば，戦国時代のこととなり，朝鮮半島から流入する青銅器についてもこれまでの説明とはちがってくるだろうという問題提起を行なった[1]。その後も国立歴史民俗博物館は組織をあげてこの問題に取り組んでいる。マスコミも大きく取り上げ国民にも大きな興味を抱かせるところとなっているが，考古学者の中には積極的に賛意を表する者も一部にあり，また北部九州の研究者は従来の考古学的方法から反対意見をもつものが多く，著者もその一人でありすでに反対意見を表明した[2]。しかし大部分の考古学者は成り行きを見守っている様に窺える。

そして、次のような年表を掲載されている。

表10　弥生時代の推定年代

畿内	推定年代	時代	北部九州	朝鮮半島	中国
晩期		縄文時代	後期	無文土器時代 前期	春秋時代 B.C.770
			晩期		戦国時代 B.C.476（史記） B.C.453（三晋分立）
	B.C.400	弥生時代	早期	中期	
早期	300		前期		
前期 I	180～170			後期 円形粘土帯土器	秦 B.C.221 前漢 B.C.202
中期 II	90		中期 前半	武帝四郡設置（B.C.108年） 三角粘土帯土器	
III			後半		
IV	B.C. A.D.		後期 前半 漢委奴国王金印（A.D.57年）	原三国時代	新・王 A.D.8 後漢 A.D.25
後期 V 倭国大乱	90		倭国王帥升朝貢（A.D.107年） 後半		
庄内			終末		三国時代 A.D.220
布留	240	古墳時代		三国時代	

・もと縄文時代晩期を弥生時代早期という新たな時代区分を導入し、100 年ほど弥生時代が繰り上げられている。

・弥生時代の終期および古墳時代の始期を 240 年ごろとされていることから、邪馬台国近畿説に立脚されているようである。

筆者の立場

筆者は、自由な立場から論じることをモットーとしている。

これまでの論述をみればおわかりとはおもうが、あらためて筆者の年代論と銅鐸の製造時期をまとめれば次のとおりである。

(一) 弥生時代は紀元前 3 世紀～紀元後 3 世紀

(二) 銅鐸は弥生時代中期・後期・終末期にわたって製造された。

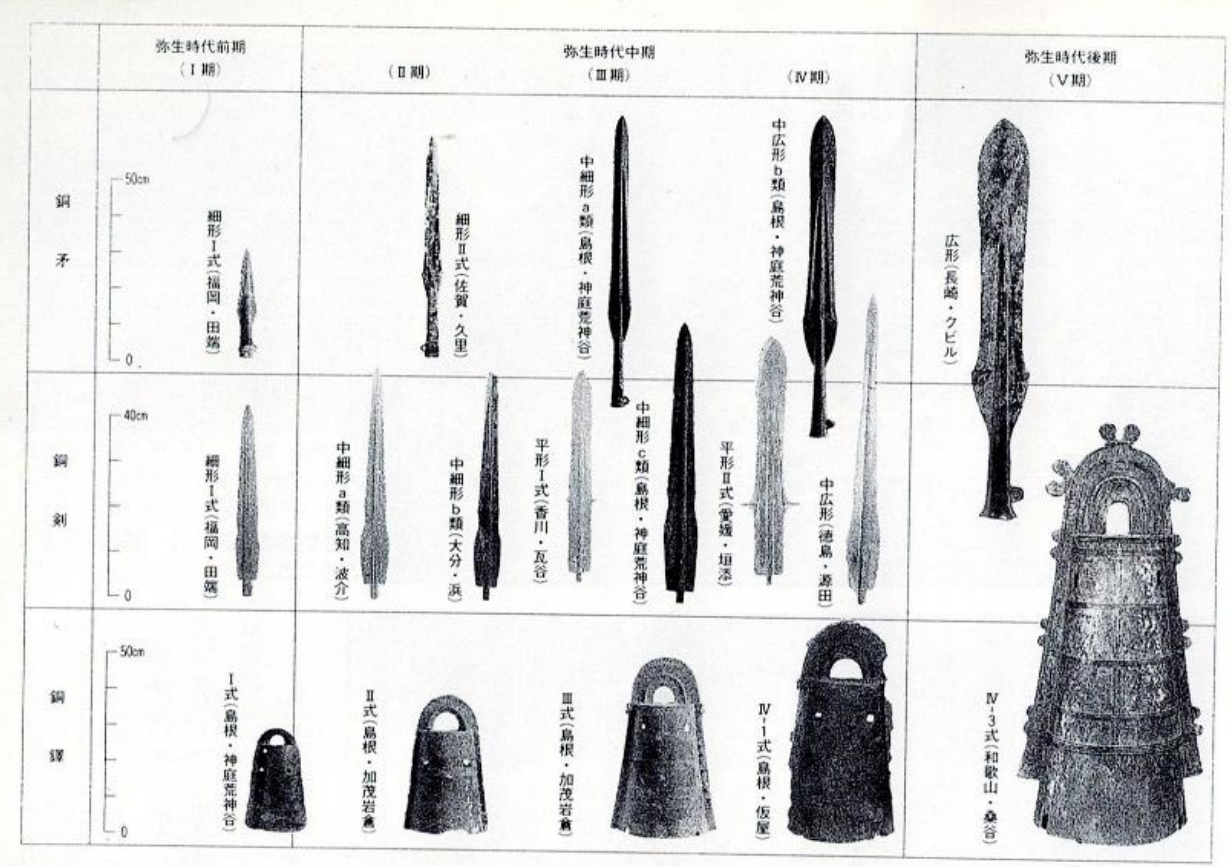
① そのうち、弥生時代中期前半の紀元前 180 年ごろから弥生時代後期前半の 170～180 年ごろまでが奴国の時代である。

② 弥生時代後期後半と終末期の 180 年ごろから 270 年ころまで邪馬台国の時代である。

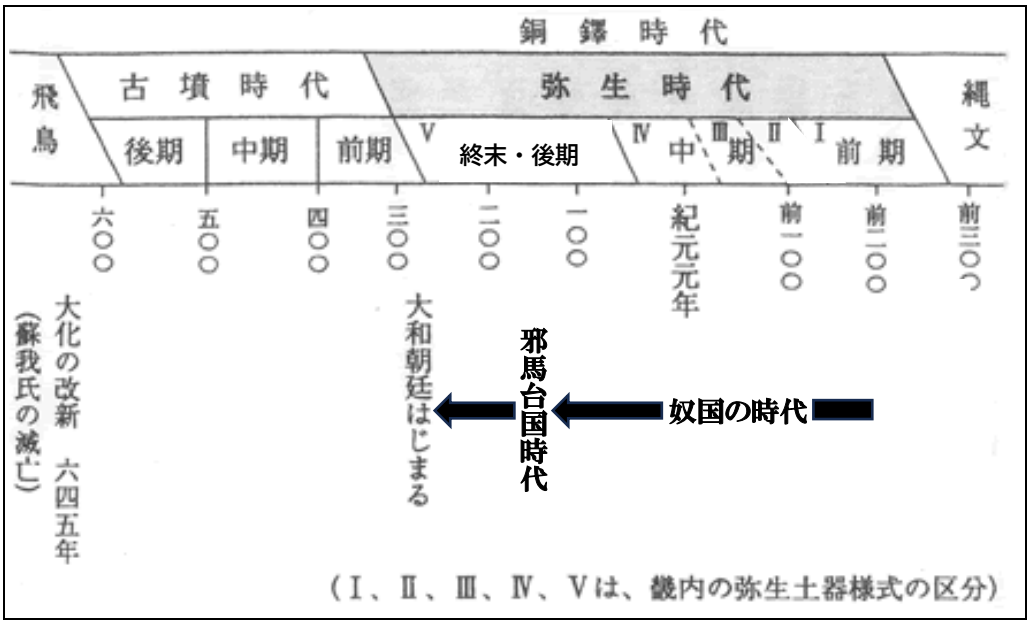
(三) 大和政権時代は 290～300 年ごろから始まる。

(四) 前方後円墳は 350 年前後から築造された。

(五) このことを前提に、銅鐸の製造年代をまとめれば次のとおりとなる。



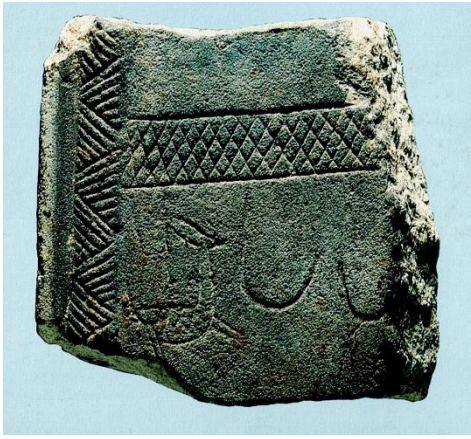
銅矛・銅剣・銅鐸の変遷 『古代出雲文化展 図録』(1997年刊)より。



赤穂ノ浦遺跡の横帯文銅鐸の鋳型

ところが、1980 年(昭和 55)の安永田遺跡(佐賀県鳥栖市柚比町安永田)の扁平鈕式横帯文銅鐸の「鋳型」の出土につづき、1982 年(昭和 57)には福岡市の赤穂ノ浦遺跡から、横帯文銅鐸の鋳型が出土したのである。

II－2式横帯文で、鹿や釣り針などの絵が刻まれている。



これらのことによって、銅鐸が九州において製造されていたことがほぼ確定したが、主たる生産地を九州とすることについては、もちろん近畿は納得するわけもなく、その文献名は忘れてしまったが、近畿から九州に発注して出雲に下げ渡したなどとするアホな説を読んだ記憶がある。

さらには、九州から出土する鋳型は石製であるが、近畿の土製の鋳型が先進的とする説なども提示され、迷走に迷走を重ねているのが銅鐸の製作地をめぐる現状といっていい。

「磨古・鍵考古学ミュージアム」の「ミュージアムコレクション 8」には、石製の鋳型には欠陥があり、土製の鋳型にはその欠陥がないと堂々と書かれている。

石製鋳型は、丈夫で6回前後も使えますが、青銅を流し込んだ時に発生するガスを逃がすのが難しく、失敗する確率が高い鋳型です。また、最適な石材の入手や大きさには限界があります。これに対して土製鋳型は、前述した石製鋳型の欠点がないので優れています。特に銅鐸が大型化する弥生時代後期以降に土製鋳型へと移行しました。

しかしながら、石の鋳型は何度でも再使用できる。土の鋳型は一回しか使えない。どちらが効率的かあるいは先進的か子どもでもわかる。

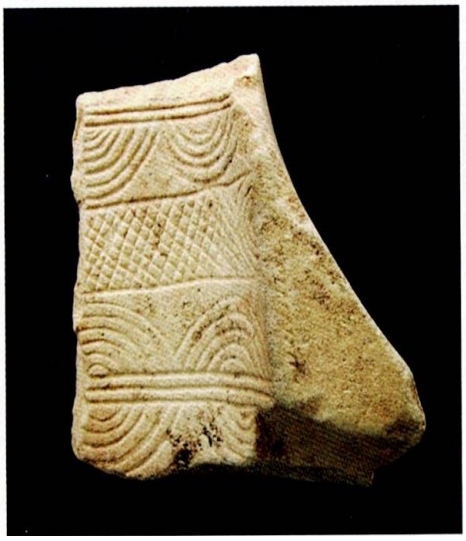
石製から土製の鋳型に変化していったのは、デザインの複雑化や銅鐸の大型化への対応など、別の理由があったからではないか。

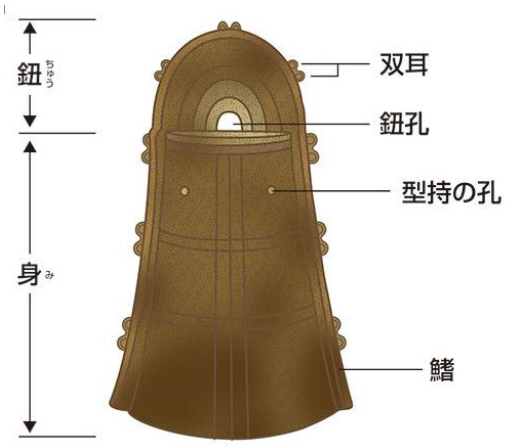
鳥栖の本行(ほんぎょう)遺跡の銅鐸鋳型

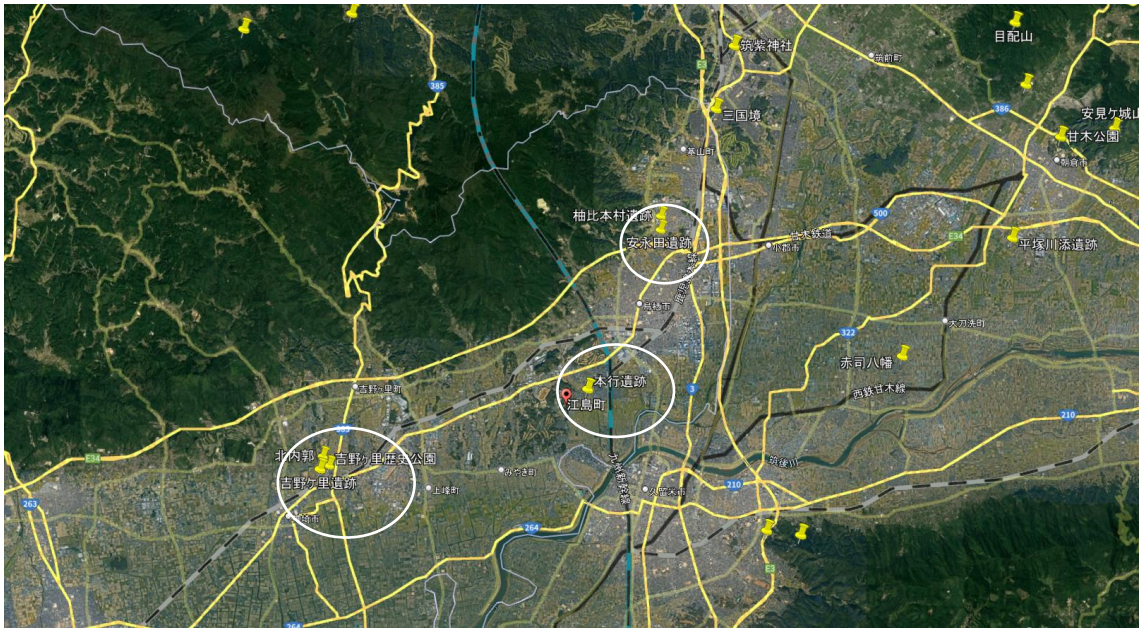
また、柚比遺跡群の南西方向に位置する鳥栖市江島町の本行遺跡からも、1991(平成 3)～1994 年(平成 6)までの調査で、12 点の青銅器鋳型が出土した。ヤリガンナ・銅剣・銅矛および銅鐸である。石英長石班岩製の銅鐸鋳型は、長さ 10 センチ、幅 7.9 センチで、鋳型面以外は砥石として使用され、かなり摩耗していた。

銅鐸の中位部分の身の半分から鰭(ひれ)の部分で、文様は斜格子文と重弧文、鰭には斜線文が描かれている。

この鋳型から鋳造された銅鐸は高さが 18 センチ前後で、安永田遺跡よりも小型とみられている(藤瀬禎博『九州の銅鐸工房』新泉社)。







吉野ケ里遺跡から銅鐸そのものが出土

そして、銅鐸そのものが九州から出土した。ほかならぬ吉野ケ里遺跡からである。

1998 年(平成 10)、発掘調査に先立つ表土除去作業中、紐(ちゅう・釣り手)を下に向け、逆さに埋められた銅鐸が出土した。

吉野ケ里遺跡出土の銅鐸

その後の調査で、同じ鋳型でつくられた銅鐸が存在することがわかった。

島根県島根県松江市宍道町から出土したとされる「福田型邪視文銅鐸」――扁平紐式に属する銅鐸である。

▲吉野ヶ里遺跡出土銅鐸と同じ鋳型でつくられた島根県出土の福田型銅鐸

佐賀県の安永田遺跡から出土した銅鐸の鋳型も、「福田型邪視文銅鐸」のデザインであった。
下記のとおり、大きさは多少異なるが、おなじデザインの銅鐸が西日本各地から出土している。

福田型邪視文銅鐸の出土地

安永田遺跡	2 区横帯文	邪視文銅鐸【鋳型】	佐賀県鳥栖市柚比町安永田	200mm±
伝出雲国出土銅鐸	2 区横帯文	邪視文銅鐸	島根県松江市宍道町	223mm(残存) 同笵
吉野ヶ里遺跡	2 区横帯文	邪視文銅鐸	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町	280mm
伝伯耆国出土銅鐸	2 区横帯文	邪視文銅鐸	鳥取県鳥取市東町	**197mm**
福田(木の宗山)遺跡	2 区横帯文	邪視文銅鐸	広島県広島市東区福田	195mm
伝上足守出土銅鐸	3 区横帯文	邪視文銅鐸	岡山県岡山市足守	178mm

福田型と呼ばれるのは、初例が広島市東区福田(木の宗山)から発見されたことに基づく。
魔除けなどのためか、眼や顔を表現したデザインを「邪視文(じゃしもん)」と呼ぶ。

ちなみに、安永田遺跡から出土した鋳型をもとに復元された銅鐸は次のとおりである。

鳥栖市教育委員会

まとめ

邪馬台国のみならず、古代史のあらゆる分野で近畿中心史観が勢いを増しており、九州を極端に軽視・無視する風潮が高まっているようにおもえる。

しかしながら、銅鐸のみならず、銅鏡、銅剣、銅矛などの青銅器の最も古い型式は、北部九州に出揃っている。

最古の型式である小型の銅鐸やその鋳型も北部九州から出土している。

日本における銅鐸のルーツは、北部九州である。

紀元前後における北部九州の盟主は、福岡平野を拠点とした奴国であった。

明治大学の石川日出志教授も、

「青銅器文化のルーツはもともと朝鮮半島や大陸にある。それが九州に伝わって、独自の進化を遂げながら、九州以外の各地に広まっていった。近畿に直接朝鮮系の青銅器が伝来したはずはなく、近畿に銅鐸の由来を求めるのは無理がある」

と述べておられる。

そして、安永田遺跡の福田型邪視文銅鐸の鋳型とおなじデザインの銅鐸が、出雲や鳥取から出土し、安芸(広島)や吉備(岡山)から出土したということは、出雲の大量の銅鐸もまた北部九州で生産された銅鐸であったということになる。

(以下、次号へつづく)

河村哲夫(かわむら・てつお)

福岡県柳川市生まれ
九州大学法学部卒
歴史作家
福岡県文化団体連合会顧問
ふくおかアジア文化塾代表
立花壱岐研究会会員
元『季刊邪馬台国』編纂委員長
西日本新聞 TNC 文化サークル講師・朝日カルチャーセンター講師
大野城市山城塾講師

〈おもな著作〉

『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全 5 巻)』(1995 年海鳥社)
「小楠と立花壱岐」(1998 年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)
『立花宗茂』(1999 年、西日本新聞社)
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999 年角川書店)
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001 年西日本新聞社)
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003 年海鳥社)
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年 11 月梓書院)
「北部九州における神功皇后伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』97 号、98 号)
「九州における景行天皇伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』99 号)
「『季刊邪馬台国』100 号への軌跡」(2008 年、『季刊邪馬台国』100 号)
「小楠と立花壱岐」(2009 年 11 月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010 年 3 月海鳥社)
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011 年 1 月、『環』藤原書店)
『天草の豪商石本平兵衛』(2012 年 8 月藤原書店)
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013 年 12 月原書房)
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014 年 6 月原書房)
『法顕の旅・ブッダへの道』(2012～2016 年『季刊邪馬台国』114 号～124 号に連載)
『日本古代通史』(2020 年 12 月から季刊「古代史ネット」で連載し、2024 年 9 月より季刊「ふくおかアジア」で連載継続)

(テレビ・ラジオ出演)

平成 31 年 1 月 NHK「日本人のおなまえっ！　金栗の由来・ルーツ」
平成 28 年より RKB ラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演中
令和 6 年 4 月より YouTube 番組「河村哲夫の古代史チャンネル」に出演中